
帝國自衛隊

あああ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帝國自衛隊

【Nコード】

N3352Y

【作者名】

あああ

【あらすじ】

史実とは異なる平行世界。

電波を利用した索敵装置の開発を命じられた第一調査小隊の面々は、異世界から訪れた日本人たちとの接触を経て、誰も知らない帝國の勝利を実現するために行動を開始する。

絶望的なまでの未来に向けて突き進む彼らは、太平洋戦争に勝利することが出来るのか？

※この小説は自サイトである極東士官学校で掲載していたものの転

載になります。元のサイトの管理パスワード失念に伴い、にじふア
ンに転載を開始しました※

第一話『第一調査小隊』（前書き）

この作品はかつて運営していた『極東士官学校』で連載していた作品を転載したものです。

管理パスワードを紛失し、当時のプロバイダーを解約し、それでもサイトが存続し続けていたために転載を控えていた作品です。

しかしながら、最近になって続きのアイデアが浮かんできたために、にじファンにて続投を決意致しました。

第一話『第一調査小隊』

元号が大正から昭和へと変わった最初の年、大日本帝國陸軍にある特務部隊が創設された。

陸軍参謀本部直属、第一調査小隊

表向きの発表では、国内の不穏な動きを探るために創設された事になっている。

しかし、書類上は小隊を名乗ってはいるが、その規模はわずか四人。

分隊の定員すら下回る人数であるこの小隊の本当の仕事は、その名前からかけ離れたものだった。

「新兵器の開発？聞いていた話と違いますが」

この小隊の隊長である高橋大介少佐が質問している相手は、彼の直属の上司にして帝国陸軍大佐の佐藤大輔である。

実戦を経験していることを示す大きな傷を頬に付けてはいるが、飽食を示すかなりの肥満体でもある人物だ。

「おや、君は既に気がついていないかと思っていたがな、少し失望したぞ」

本当に失望したような顔をした大佐が、嫌な笑みを顔に浮かべつつ言う。

「はっ、申し訳ありません」

慌てて視線を上に向け、敬礼をする大介。

本来ならば、上官にこのような顔をさせた時には慌てて調子を合わせるべきである。

しかし、彼はこの大佐の調子に乘せられるとろくな目に合わない事を各地の同期から聞いていた。

気をつけろよ俺、絶対に目を合わせるな、話も聞くな。まだ死ぬには早いだろう？

内なる彼が警告する。

しかし、その警告は遅すぎた。

「ほう、悪いと思っているのなら行動で示してもらおうか」

「は？」

思わず視線が落ちる。

そこには、満面の笑みを浮かべた大佐の笑顔があった。

「君に電波を利用した索敵兵器の試作を命令する。期限は一週間。君と君の部下達を最大限に使い」

いきなり大佐は具体的な命令を発した。

「はあ」

当然ながら驚いた少佐はまともな回答を返せない。

その間にも大佐は話を続ける。

「この作戦に対して会計課は一切関与しない。君達が餓死しようと我々は知らん」

「はあ」

「与えられる予算は今から渡す書類に書いてある。それ以外は、びた一文ださんからそのつもりで」

引き出しの中から書類用封筒を出す大佐。それには『軍機』と書かれていた。

「話は以上だ。帰ってよろしい」

注意していたにもかかわらず、大佐のペースに乗せられてしまった少佐は、次第に表情を引きつらせつつも封筒を持って退出した。小隊に割り当てられた部屋に戻った少佐は、ひとまず書類を見てみることにした。

彼の部下達は例によって全員遅刻しており、規律という言葉をどこかに忘れてきた彼らがやってくるまでにはかなりの時間的余裕がある。

さっそく少佐は封筒の中身を取り出し、具体的な命令内容を確認し始めた。

彼は書類に記された予算額を見てニヤけ、ついで任務の内容にあれこれと考える顔をし、そして最後に大佐の手書きで添えられたメッセージを見て顔を蒼ざめさせた。

「やるしか、ないか・・・」

ようやく全てに目を通した彼が呟いた時、太陽は南中に入ろうとしていた。

「おはようございます、遅れました」

午後二時を回ったころ、最後の遅刻者が現れた。

「遅い！また貴様が最後だ！」

隊長用の机に腰掛けて腕を組みながら大介が怒鳴る。

この部屋は、12畳ほどの比較的大きな部屋で長方形をしている。壁の中央にあるドアから見て、一番奥の窓の手前に小隊長席がある。

そして、小隊長席から手前にかけて左右に机が四つ並んでいる。中央に空いた通路には、読みかけの資料や趣味の読み物、よくわからないガラクタ等が乱雑に詰まれ、歩くことが非常に困難になっている。

「まあまあ隊長、特に仕事があるわけじゃ・・・」

「ないでしょう？」

と、いつものように言おうとした最後の遅刻者、柴田和也が日ごろとはかなり違う空気の室内に気がつく。

「あのー、なんか空気重くないですか？」

恐る恐る大介に尋ねる。

「まあな」

対する大介は素っ気無い。

大介がそのような態度になるのかもしれない。

何しろ渡された指示書には電波を使用して敵の位置を探る兵器『電波索敵装置』を開発しなければならないこと、そしてそれが達成できなかった場合、彼らは揃って北海道最北端の警備施設に回されるということが書かれていたのだ。

「それはあんまりですよ……まさか、この部隊の設立理由って……」

徴用前は科学者や技術者の集まりであるこの小隊の設立理由によろやく気がつく柴田。

「そう、初めから大佐は我々にこんな事をさせる気でこの小隊を作ったんだ」

苦々しい顔で大介。

「まあ予想できないわけではないけどな。大体、小隊長が少佐なんて特務部隊にしてもおかしいとは思っていたんだ」

部屋の左側の机の上に座って紅茶を飲んでいた男、岡村継が言う。

「え？みんな気がついていたんですか？なんだ、ならもっと早く言えよよかった」

右側の机に座っていた小柄な男、斎藤弘之が言う。

「さて、全員が揃ったところで再び会議を始めよう。

この電波索敵装置……名前が長いな、電索とでも言っておこう。電索は、具体的にはこちらから電波を発射してその電波に敵が接

触して起きる反応を確認する装置だ。

問題は、その反応をどのようにして感知するかという事。いかに高出力の電波を出すかと言う事。

そして、いかに遠くの敵を察知できるようにするかと言う事だ」

ドアから見て左側の壁に掛かっている黒板になにやら図を書き始める大介。

「諸君らも知っての通り電波とは直進するものだ。基本的にこの原理を変える事はできない。そして、電索は電波を使用する以上この法則を無視する事が出来ない」

船のつもりらしい下手な絵のマストの上に印をつける。

「これを電索と思って欲しい。ここに電索があると仮定し、さらに出力を無制限に取ってやる。すると……」

黒板の左側にある水平線と書かれた歪んだ線までの間をチョークで雑に埋める。

「大体これくらいの幅全てに、満遍なく対空監視員を置いたのと同じ効果が得られるわけだ。

しかもこの監視員は寝ないし、間違えないし、濃霧立ち込める時も、明かり一つない新月の夜も必ず敵を発見してくれる」

興奮したらしく、近くにあった斎藤の紅茶を一口飲んだ。

「すまん、すこし興奮してしまった……さて、この電索だが、水平線上の物までしか探知できない」

「何故ですか？」

柴田が不思議そうな声を出す。

「さっき言っただろうが、電波は直進しか出来ん。従って水平線を越える事はできん」

「あ」

しまったと言う顔をする柴田。

「人の話はちゃんと聞け・・・で、次にどのようにしてその反応を探知するかだ、これについて何か意見があるものはいるか？」

大介が意見をもとめると、岡村が直ぐに手をあげた。

「少し前に八木博士が開発したアンテナがあるだろう？ あれは使えないか？」

今度は大介が「あ」と言う番だった。

腐っても技術者。

一度でも「これは使えるかもしれない」と判断した物は、いざというときに備えて記憶し、そして必要な時に必要な情報が出てくる。それは技術者として

「確かにあれは使えるそうだな、いや、『使える』な」

断言する大介。

「直ぐに用意させよう、どうやって探知した物を表すかは斎藤と柴

田に任せる。

俺と岡村は効率のいい発信・受信装置を作る。期限は3日。それを越えたら計画はきつくなるぞ。各員の健闘を祈る。直ぐに作業を開始しろ！」

大介の号令と共に全員が各々の仕事に取り掛かった。

次の日から作業は始まった。

より正確には昨日から始まっていたのだが、昨日の場合はひたすら電話をかけて注文を取っていた位なので厳密には作業とは言わない。

しかし、彼らの偉業の一ページ目が、実は昨日行われたのだ。

当時、各企業に連日のように自称発明家が押し寄せており、多少の法螺ならば余裕を持って撃退していた審査官にとって、八木と言う博士の持ってきた電波の受信率が格段に上がるアンテナはハッタリにしか見えなかったらしく、博士は速攻で会社を追い出された。

（やはり外国企業に売るしかない）と八木博士が決断しかけた時、奇跡は起きた。

彼の家にいままで彼の事を追いついた会社の重役達が現れ、口々にアンテナの特許を売ってくれと言い出したのだ。

大介達が各社へ「八木アンテナは売ってるか？売ってるならあるだけ売ってくれ」と電話したからである。

これを軍需産業への一步と認識した各社は、こぞってこの利益にあやかろうと行動を開始した、というわけだ。

警察官が静止に踏み切るほどの大騒ぎの後、アンテナの特許権は博士が持ったままで、売上に対して一定の使用量を払いつつ三菱財

閥が販売権を握る事で決着がついた。

量産ではなく試作ということで、翌日には銀座の施設に試作品の八木アンテナ2基と、その他必要物資が届けられた。

「・・・・・・・・・・よし！できた！」

全高10mと言う巨大な装置を見上げながら大介が言う。

「早速試運転をしてみましょう！」

斎藤が蒸気動力機を動かす。

蒸気を噴出しながら電索が徐々に動き出す。

メーターの値が次々と必要な所まで動いていき、特殊な構造のガラスに反応があったことを示す光点が浮かび上がる。

「えーと・・・十二時の方向！約200m、一つです」

それを見ていた柴田が叫ぶ。

その声にしたがって他の全員が上空を見る。

「・・・・・・・・・・あった！ありました！！！」

岡村が指差す方向を見ると、陸軍省が揚げた一機の気球が上空を漂っていた。

「やった！！実験は成功だ！！！」

大介が拳を突き上げる。

しかし、その瞬間上空が突然曇りだし、雷鳴が轟き始めた。

「な、なんだ？どうなっ・・・」「たいへんですっ！！」

突然の事態に大介が漏らした呟きは、機械のそばにいた斎藤の叫びがかき消した。

「どうした！？」

その声の異常さに気がついた大介達が電策のそばに駆けつける。

「出力が下がりません！」

バルブを回したり、レバーを下げたりしながら斎藤が叫ぶ。

「そんな馬鹿な！？安全弁は？」

「すでに開いてあります！もう直ぐ圧力が限界になります！！」

その叫びを聞いた他の研究員達が思わず動力機から離れる。

「怯えている場合じゃない！何とかしろ！」

設計図を片手に装置を点検しながら大介が叫ぶ。

その叫びを聞いた他の研究員達は我に帰ったように慌てて装置に取り付いた。

しかし、大介達の健闘もむなく装置の出力は上昇を続けた。

圧力計のレッドゾーンに針が入ったのを見た大介はどうとう装置をあきらめる事を決定した。

「全員装置から離れろ！もうだめだ！」

装置に取り付いていた研究員達が蜘蛛の子を散らすように離れていく。

「早くしろ！」

装置の上に登っていた柴田が慌てて梯子を降りるのを見た大介が叫ぶ。

「わ、わかってます」

振動を始めた装置を恐怖の表情で見ながら柴田が答える。

地面まで残り2mあたりまで来ると、柴田は梯子から飛び降りて全力疾走を始めた。

振り向いてみると動力機からは蒸気が漏れ始めている。

「後ろを振り向くんじゃない！走れ！！」

大介達が叫ぶ。

そして、装置は爆発した。

轟音、煙、そして大量の水蒸気。

「おい！全員生きてるか？」

動力機が爆発した影響であたりに立ち込める蒸気を手で振り払いながら大介が叫ぶ。

次第に晴れていく蒸気の中から次々と研究員達が挙手しながら出てくる。

どれも顔に煤がついていたり髪の一部が焼けていたりするが怪我は無いようだ。

「!!!? 小隊長殿! あれは!?!」

爆発に気づいて駆けつけた兵士が銃を構えながら叫ぶ。

「え?」

兵士の視線を辿ってみると、完全に大破した装置が……

「あ!?! なんだあれは!?!」

そこには見たことも無いトラックが停車していた。

そのトラックは灰色に緑を混ぜたような極めて目立たない色をしていた。

全長が見た感じ9 mほどで高さが3 m近くもあった。

荷台には幌が張られ、所々に半透明の覗き窓らしき物がある。

大介は失われた電索の事を忘れてそのトラックに見入った。

他の研究員も同様だ。

「気をつけろ、二人続け」

いち早く我に帰った衛兵が銃を構えながらトラックに近づいていく。

「お、おい、うかつに撃つなよ」

大介が恐る恐る声をかける。

「分かっております」

いいながら運転席のドアに手を掛ける衛兵。

しかし、彼があける数秒前、ドアが勢いよく開いた。

「うわっ!!」

開いたドアに直撃して倒れこむ衛兵。

倒れこんだ勢いで小銃が地面へと転がる。

「展開しろ!」

さまざまな色の緑が混ざっている服を着た男が見たこともない銃を構えながらドアから飛び降りると、倒れていた衛兵の首筋に銃を押し当てる。

「動くんじゃねえぞ!! 動きやがったらこいつを殺す!」

男が牽制している間にも後部から次々と同じ格好の男達が小銃らしき物を構えながらトラックの周りに円を書くように展開する。

高度に訓練されているらしく、その動きには隙が無かった。

「やるな」

大介が顎に手をやりながら感心したように言う。

「感心している場合じゃ無いでしょう?」

そういう自分も現状を楽しんでいるような柴田が耳打ちする。

「連中は何者だと思う？」

斎藤が横にいる岡村に言う。

「さあ？ まあ我が軍ではないことは確かだな」

岡村が答える。

「少佐、どうするんです？ 戦うんですか？」

慌てて駆けつけた他の衛兵達が最上位者の大介に尋ねる。

「・・・・・・・・・・全員銃をしまえ」

「は？」

指示の意味がわからず、間拔けな声を出す衛兵。

「銃をしまえといったんだ」

「はっ」

いかにおかしい命令とはいえ、そこは上位者の命令が絶対の軍隊、不服そうにしながらも銃をしまう衛兵達。

それを見た男達も小銃を空に向ける。

「貴様らは何者だ！」

隊長らしい背の低い男が叫ぶ。

「大日本帝國陸軍第一調査小隊だ！皇軍と知ってのこの振舞い、ただでは済まさんぞ！！」

大介が怒鳴りかえす。

「帝國陸軍？　どういうことだ？」

背の低い男が不思議そうな声を出す。

「班長、こいつら軍事オタクかなんかじゃないんですか？」

意志の弱そうな男が背の低い男に言う。

「かもしれないな・・・おい！貴様らこの非常時に自衛隊に喧嘩を売ってただで済むと思っているのか！？」

背の低い男が聞いたことのない名前を出す。

「自衛隊？」

こんどは大介が不思議そうな声を出す番であった。

「貴様らこそ何を言っている？　そんな隊は我が軍には無いぞ」

「は？」

「まったく、時代が昭和になったからっていきなりこういう奴等が出てきたんじゃ・・・」

「お、おいおい、今は平成だろうが」

馬鹿にしたような声で背の低い男が言う。

「何を言っている。貴様ら新しい年号も知らんのか」

「お前らこそ何時まで戦前のつもりでいる気だ」

「戦前？何を言っている？」

相手の言っている意味が分からず不思議そうに問う大介。

「だから、何時まで昭和のつもりでいるんだよ」

「どうやら、相手は自分達が『平成』というところから来たと思い込んでいる様だ。」

「少佐殿、いかがいたしますか？」

衛兵が尋ねる。

「まあ待て」

答えながら謎の集団の方へ歩いていく。
当然ながら非武装である。

「止まれ！！」

全員が小銃を構える。

それを見た衛兵達も銃を構える。

両者の間に緊張が走るが、大介はそれにかまわず隊長らしい男のところへ歩いていく。

「なんだ？」

背が低いので見上げるように睨みながら男が言った。

「何時までもこうして睨みあっても仕方が無いでしょう？ここは私に免じて私の研究室で話ませんか？」

「・・・・・・・・・・いいでしょう」

暫く考えた後、背の低い男は了承した。

「それではこちらへ」

研究室の方へ歩き出す大介。

「坂田一士！松永一士！ついて来い！！残りは車両周辺を確保！」

背の低い男が指示を出しながらその後続く。

「衛兵の皆さんは撤収して、残りは俺についてきてくれ」

「しかし・・・・・・・・」

ようやく駆けつけた衛兵隊長が納得いかなそうに言う。

「命令だ」

「はっ」

上位者の命令とあっては仕方がなく、衛兵達は持ち場へ戻っていた。

「改めて自己紹介といきましょう」

自分の机に座りながら大介が言う。

「私の名前は高橋大介。帝國陸軍少佐です」

「・・・自分は陸上自衛隊の山口三等陸曹です」

「三等陸曹？なんだそれは？」

「何って、三等陸曹は三等陸曹です」

無然とした表情で山口が答える。

「ちょっと待ってください班長」

松永と呼ばれた眼鏡で小柄な男が会話をさえぎった。

「どうした松永？」

「先に確認しておきたいのですが、ここはどこで、今は何年何月で
すか？」

それを聞いた大介が失笑交じりに答える。

「どこって、銀座に決まっているだろ。そして、今日は昭和元年4月14日だ」

「15日です」

すかさず柴田が修正する。

「ああそうだったな」

「ちょ、ちょっと待って下さい。昭和元年ってどういうことっすか？」

坂田と呼ばれた軽薄そうな男が山口に言う。

「待ってくれ、何をいつているのか良く分からないのだが？」

事態を飲み込めない山口が混乱したように言う。

「こういうことじゃないんですか班長」

松永が説明を始める。

「ここへ来る直前、何があったか覚えていますか？」

坂田が答える。

「何って、ソ連の爆撃機が爆弾を落としてきたんじゃないか」

「そう、突然現れたソ連機が我々の頭上に爆弾を落としてきた。本来ならば我々は粉々になっているはずです。しかし、我々はここにいる」

少し下がった眼鏡を指で治す松永。

「何がいたいんだ？ 要点を言え要点を」

気が短い山口が苛立った様に言う。

「つまり、我々は爆弾が炸裂した影響でこの時代、昭和元年に飛ばされてしまったという事です」

一瞬、全員が押し黙った。

全員の頭の中に青いロボットが浮かぶ。

「タイムスリップってことか？」

坂田が声を絞り出すように言う。

「恐らくはね」

眼鏡を光らせて松永が言う。

「ま、まてまて、そうすると君達はその平成とかいう年号の時代から来たという事か？」

大介が会話に割り込んでくる。

「そんな馬鹿な事があるか、一体何を考えて・・・」

「それではお尋ねします。あなた方の技術力で表のトラックや、今我々が持っているような装備を作る事ができますか？あなた方だけではない、工業国アメリカやイギリス、フランスやドイツ、そうそうロシアなんかもいいですな」

しかし、いかに優れた工業国家であろうとも彼らの装備品を作る事ができないのは、技術者である大介には分かりきっていた。

だが、時間を超えてきたという彼らの話は、それを認めたくなくなるほどおかしかった。

少なくとも、簡単には信じられない。

そして、彼らが持っているものがそこまで凄まじい物なのかどうか、よくよく考えてみるとわからないという疑問も出てきた。

「・・・班長、少佐殿に我々の持っている物を見せた方がいいですよ」

何時までも口を開こうとしない大介に苛立った松永が言う。

「ま、まて松永、私だって納得したわけじゃあないんだぞ」

「班長、じゃあ聞きますけど、我々の世界にこんな街中のところがあると思いますか？」

窓の外を指差す松永。

そこには、平屋が延々と連なり所々に飛行船や気球が飛んでいる昭和元年の帝都が広がっていた。

言われるまでもなく、現代にこんなところは無い。

班長と坂田は数秒で納得した。

「よし・・・何を見せればいいと思う？」

「そうですね・・・」

服についている携帯無線機を取り出す松永。

「いまから下にいる人たちに指示を送って色々と道具を持ってきてもらいます。それで納得してください」

「何をもって来るんだ？　こう見えて私も技術者だ。よほどのものではない限りは驚かんぞ」

馬鹿にしたように大介が言うと、松永はにやりと笑って言った。

「見ていてください」

第二話『陸上自衛隊?』

「つたくよお、ここはどこだって言うんだよお」

トラックのダッシュボードに両足を乗せながら中村三等陸曹は言った。

下士官として本来ならば一般兵たちに規範を示すべき立場であるはずなのだが、彼はいわば『何かの間違いで』下士官になったような男で、それは全員が既に了解しており、誰も彼の態度についてどうこう言ったりはしない。

「まあまあ三曹殿、落ち着いてくださいよ」

荷台への覗き窓からのんびりとした声が聞こえてくる。

「長谷部技監殿はずいぶんと落ち着いていられるんですね」

「まあね、それより、さっきこの空気を採取して検査したんだけどさ…」

「ガスですか!?!」

慌てて足元から防毒マスクを取り出そうとする三曹。

「ははは、落ち着いてくださいよ、ガスだったらもう死んでますよ」
ケタケタと笑いながら長谷部が笑う。

「お、脅かさないで下さいよ」

涙目になりながら後ろを振り向く三曹。

しかし相手は技監である、強い口調で言う事は出来ない。

ちなみに、技監とは技官や技師の総監督の事で、長谷部の場合は技術研究本部の本部長である。

何故それほどの高官が部隊と行動を共にしていたかというところ、ソ連軍によって全てのリーダーが破壊された北海道へ臨時の移動式リーダーを配備するために技術を持つものが総動員されたからである。

「すみませんね、それで空気の件なんですがね、ここの空気、普通より汚染物質の濃度が凄く薄いんです」

「それだけなんですか？」

「それだけって、通常より窒素酸化物やなんかの濃度が半分に近いんですよ？」

「何でそんなに低いんですか？」

「さあ？ただ恐らく…」

「恐らく？」

「ここは元いた日本とは違う所だと…」

深刻な顔をして長谷部。

「ま、まさか…」

真っ青な顔をしながら中村が言う。

頭ではそんな事はないと思っているのに、そうとしか説明できない事態が続いていてゲシュタルト崩壊を起こしそうな中村。対照的に長谷部は落ち着いている。いや、この状況を楽しんでいるようにも見える。

それは性格もあるだろうが、技術者としての好奇心、というよりは探究心もあると思われる。

技術者や研究者という人種は、時として生存本能よりも好奇心や探究心を優先させるからだ

<こちら松永、18号車応答願います>

不意に無線機から松永の声が流れ出して思わずひっくり返りそうになる中村。

「わっ！ま、松永！びびらせるんじゃないっ！」

<申し訳ありません。班長より命令です>

「なんだ？」

<89式、MINIMI、パンツァーフースト？をそれぞれ一つずつ、今いる訓練場に配置するようにとのことです>

「お、おいおい、戦争でもおっぱじめる気か？」

焦った声を出す中村。

89式のみならば自衛用として分かる。

しかし、MINIMIはれっきとした機関銃であり、パンツァー

ファースト？にいたっては最新型の対戦車砲である。

おいそれとそんな物を使うわけにはいかない。牽制のつもりが一步間違えれば二桁の死者が出る可能性もあるのだ。

く落ち着いてください。こちらの力を相手に見せ付けるだけです。それでは直ぐにそちらへ向かいます＞

「あ、ああ」

「どうしました？」

通信が切れると、直ぐに長谷部が話し掛けてきた。

「いや、なんか武器の用意をするようにって…」

「うーん、いいんじゃないんですか？上官の指示なんだし」

「そうなんですけどね」

「それじゃあ直ぐに始めましょうよ」

「はあ」

生き生きしている長谷部を不思議そうに見ながら気の抜けた返事をする中村。

直ちに中村の指示の元、対戦車ロケットとMINIMI機銃が演習場に設置された。

念には念を入れて、発射箇所には土嚢を並べていつでも戦闘が行えるようにもした。

「おーし、用意出来てるな」

班長達が現れたのは、準備が整ってから十分後だった。

「はっ、配置完了しました」

今までの態度とは違い、真面目な顔をしながら中村。

「ご苦労、間もなく標的が……」

標的が来ると言おうとした山口の背後の建物の影から、小振りな戦車が2両現れた。

「はっ班長！あれは！？」

狼狽した中村が射撃体勢を取りながら言う。

「落ち着け、あれが標的だ」

「えっ…なるほど、あれをロケットで破壊する訳ですか」

ようやく何をするのか悟った中村が銃を下ろしながら言う。

「定位置についた後、乗員の退避を待ってロケットで破壊する」

「しかし、戦車は二両あります。もう一ついるのでは？」

そう、用意したロケットは1門しかないのだ。2両とも破壊する

のにはもう1門必要なのだ。

だが、中村は相手が何であるのかを忘れていた。

今中村達の目の前に停車しているのは97式中戦車（チハ型）の試作機である。

これは昭和11年に製作が決定し、その後大戦末期までにおよそ2123両が製造された三菱重工のベストセラー車である。

製作当初としては高機動・高性能とそれなりに使えたのだが、その後の性能向上に力を注がなかったため、対米戦で相手となったM4シャーマンには手が出せなく、数両で戦いを挑んではその全てが返り討ちになるという情けない結果を生み出していた。

まあそれはとにかく、この時期の日本にある戦車としてはもっとも高性能な物である。

ちなみに、名前の後にある『チハ』というのは『中戦車』の『チ』と設計順の三番目に当たるため『イロハ』の『ハ』を組み合わせたものである。

「僕の記憶が確かならば、97式の正面装甲はMINIMIの集中砲火に耐えられない筈です」

松永が眼鏡を指で治しながら言う。

「本当かよ、間違ってたら俺達笑い者だぜ」

いつのまにかマイルドセブンを口にくわえていた坂田が言う。

暫くライターを探していたが、あきらめたらしくタバコを箱に戻した。

「バズーカならあんなちゃいもんどころか90式でもやれるだろうけど、MINIMIは機関銃だぜ？はじかれて終わりじゃないの

か？」

「ご安心を、万が一装甲を貫通できなかった場合、89式小銃にしているグレネードで止めを刺します」

坂田の持っているグレネードつき89式小銃を指差しながら松永が答える。

「どちらにせよあちらさんの度肝を抜く事ができるでしょう」

「という事だ、直ぐに射撃体勢に入れ。あちらさんには俺と松永が行く」

既に歩き始めながら班長が言う。

「あ、じゃあそういうことでお願いします」

小銃を持ちながら松永がついていく。

「そろそろ始まります」

大介のところに来ると山口が言った。

「あんな物で本当にチハ型が破壊できると思っているんですか？」

土囊の間に置かれたパンツァーファースト？を見ながら大介が言う。

「それでは早速見ていただきますよう」

傍らに控えていた松永に指示を出す。

松永が中村に指示を伝えると、直ぐに自衛隊員たちが配置に付きだした。

中村が土囊のところに伏せ、パンツァーファースト？を構える。後ろに回った坂田がロケット弾を装填し、中村のヘルメットを叩く。

昔から続く装填完了の合図である。

<撃ちます！>

無線から緊迫した感じの音がするのと同時にパンツァーファースト？が発射された。

放たれたロケット弾は内蔵された固形燃料に点火して、オレンジ色の炎と煙を噴出しながら一気に加速してチハへと襲い掛かる。

総合火力演習や日ごろの演習でよく目にしていた山口達にとっては見慣れた光景だが、ロケット自体を始めてみた大介達は記録用の写真をとるのも忘れて啞然としている。

そして、発射から三秒後にロケットはチハに着弾した。

モンロー効果で装甲を溶かし、一瞬で内部に侵入したロケット弾は内部で反対側の装甲にぶつかって炸裂した。

凄まじい轟音を発してチハの砲塔が宙に舞い、少し後ろに着地する。

「次、MINIMI射撃開始」

<了解>

トラックの真横に土囊を積み上げて設けられた発射場所からMI

N I M I が発射される。

M I N I M I とは 5・56mm 機関銃 M I N I M I の略称で、89 式小銃と同じ 5・56mm 弾を発射する事ができる普通科部隊の基本武装の一つである。

専用の箱型弾倉のほかに、ベルト式（ランボーが肩にかけてるあれ）、89 式小銃の弾倉による給弾が可能となっている。

土嚢や障害物、地面に三脚を置いて発射する他に、他の隊員が両手で三脚を持って発射したり、腰だめに発射する事もできる。

日本人の体型にジャストフィットした重量と形状は自衛隊の装備品の中でも特筆すべき使い勝手の良さだが、値段の方は適正かというところでもないらしい。

映画でおなじみの『ダ』の連発を響かせながら 5・56mm 弾が毎分約 800 発の勢いで発射されていく。

たちまちチハ型の装甲にへこみが付く。

幾ら 50 年以上未来の物とはいえ、こちらは機関銃で相手は戦車である。

おいそれと装甲を破れる物ではない。

カンカンとむなしい音を立てて跳ね返される弾丸。

撃っている隊員が（やっぱ無理だよ）と思った瞬間、立て続けに弾丸を打ち込まれた正面装甲の一部がついに屈した。

ビシッという音と共に戦車の内部で銃弾が跳ね回る音がする。

「ええっ!!」

その様子を別の場所から見ていた大介達が再び驚愕して声を出す。一度装甲が開いてしまえば破壊するのは簡単である。

続けざまに銃弾を撃ちこんでいく。放たれた弾丸は次々と脆くなった装甲を破って戦車の中を跳ね回る。

と、不意に跳弾の一つが坂田の胸に突き刺さった。

「いっ痛てえ!!」

叫んでひっくり返る坂田。

「じゃ、射撃中止!!」

慌てた山口が叫びながら坂田の方へ走っていく。

「衛生兵！怪我人だ!!」

一瞬呆けていた大介であったが、慌てて衛生兵を呼びつつ坂田の元へと走り出した。

大介が坂田の所へ到着したところには、その場に居合わせた自衛隊員全員が坂田の周りを囲むようにして様子を見ていた。

「坂田！おい坂田!!」

山口が坂田の肩をゆすっている。

「は…班長？」

坂田がうっすらと目を開く。

「は、ははは…ごほっごほっ…やられちゃいましたよ…」

胸ポケットからタバコを取り出す。

「最後は…こいつをくわえながらカッコよく決めさせてもらいます

…」

言いつつタバコの箱から一本取り出して唇でくわえる。

「ち、畜生…目が霞んできやがった…」

そのとき、坂田のタバコの箱を見た山口があることに気がついた。

「あ…浅野三曹だ…おい」

既に幻覚が見えるのだろうか、坂田は憧れの上官の名前を呼んだ。

「え？こっちへ来ていいことしようって？いいよ」

それを聞いた山口の顔が引きつる。

「な、貴様！そんな事は許さんぞ！起きろ…！！」

どこからか出した警棒で坂田の側頭部を思いっきり叩く。

ガッン…！！

凄まじい音があたりに鳴り響き、坂田が飛び起きる。

「いてえ…！！班長、あんた殺す気ですか！」

「うるせえ！夢の中だって浅野三曹に触るんじゃねえ…！！」

取っ組み合いを始めた二人をあきれた目で見ながら大介が松永に尋ねる。

「彼は結局どうしたんだ？」

同じくあきれた目で見ていた松永が答える。

「あたりましたよ。それも心臓の所に」

まるで何事もなかったかのように答える松永。

「あたりましたよって、何であいつは死んでいないんだ？」

「ああ、これですよ」

言うところ松永は自分の迷彩服の下から防弾服を見せた。

「それは？」

「防弾服と言いましてね、特殊な繊維の服に装甲板を入れたものです」

「……」

「見せ付けられた兵器だけでも信じられないと言うのに、今見せられた服はその上を行っていた。」

しかし、信じないわけにはいかない。

現実にはチハ型二両は撃破され、銃弾を受けた男はあおして元気に殴り合いをしているのだ。

「……大佐に会ってくる」

傍らにいた柴田に言う大介は建物に向かって歩き出した。

「少佐、あの二人はどうするんですか？」

後ろから柴田の声が聞こえてくる。

「ほっとけ」

大介の答えは簡潔だった。

第三話『目標は核兵器廃絶』

最新兵器を見せ付けられ、大介はあっさりと山口たちの言う事を信じた。

そして、彼は山口たちの持つ兵器や技術をどうすればいいのか、誰に聞くまでもなく結論を出し、そのための行動を始める。

かくして、未来人たちは陸軍大佐佐藤大輔との会談に出席する事となる。

「で？ 貴様らは何が望みなんだ？」

椅子に反り返っている佐藤大佐が言う。

中学生程度の身長の上に上官に対して卑屈な態度をとりやすい山口は一瞬で負けた。

「え、えーと、望みと言いますか、こちらからの提案なのですが…」

早くも緊張してしどろもどろになる山口。

「提案？」

実は密かに窓から実験の様子を見ていた大佐の目が光る。

「はい、我々の持つ技術や知識を全て皇国に謙譲します」

「その見返りに保護を、か？」

「はい。聞けばここはかなり排他的かつ閉鎖的な基地と聞きます」

「まあな」

答えつつ、心の中で（正確には嫌われ者の集団を閉じ込めた刑務所に近いがな）と呟く大佐。

「ですから、私以下五名を保護していただきたいのです」

「ほう……少し待て」

「なんですか？」

山口達を隣室で待たせた後、大佐は大介のみに部屋に残るように命じた。

「どうしたらいいと思う？」

山口達が待たされている隣室を見ながら大佐が言う。

「彼らの提案を受けるべきではないかと」

「何故だ？」

面白そうに大佐が尋ねる。

「彼らのもっている武器は我々のそれを大きく上回る性能をもっています。」

あれらに使われている技術を我が国でも使えるようにできれば、帝國は世界一の技術力を手にする事ができるだけではなく、それを用いて世界一の軍事力を持つこともできます」

「ほう、世界一とな？」

大佐の目が細められる。

「はい、世界一です」

自信を持って言い切る大介。

試作とはいえ次期戦車であるチハ型の装甲を紙のように突き破ったあのロケットという兵器さえ量産できれば、敵がどんな戦車を投入しようと撃破できるであろう事は誰でもわかる。

それからMINIMIとかいう機関銃、あれほどの完成度を誇る兵器を製造するための技術、そして高性能で貫通性に優れた弾丸。

そして、彼らが言うリーダー——100%の信用性と水平線すら越えてしまう電索——を開発できれば、皇国の必勝は疑うまでもなくなる。

彼の頭の中はそれでいっぱいだった。

実際にはトラックに積まれているエンジンや89式小銃など参考にする点はいくつもあるのだが、そこまではさすがの大介も頭が回らない。

「それで？彼らの処遇はどうしたい？」

「そうですね：我が部隊専属の科学顧問でいかがでしょう？」

数秒だけ考えた大介が言う。

「科学顧問ね：それでいいだろう、取り計らっておく」

「はっ、ありがとうございます」

踵を揃え、敬礼をしながら大介が言う。

「礼はいい、それより壊れた電索をさっさと作り直せ」

「はあ、何故ですか？」

もっと高性能な物が作れるかもしれないのに、わざわざ低性能な物を作らせようとする大佐の指示の意味がわからない大介。

「ですから、彼らの技術を使えば…」

「それができるまでに何日掛かる？ 貴様らに残された時間はあとわずかだぞ」

「あっ、そうだ！ も、もうしわけありません。直ちに試作機を再建造します」

ようやく指示の意味がわかり慌てる大介。

「そうしろ、時間がないぞ」

「はっ！」

その2日後、深夜の九十九里沿岸を舞台に電索の性能試験が行わ

れた。

試験の内容は、別々の方向からやってくる仮想敵機が、海岸に照明施設と一緒に設置された電索付近に通信筒を投下するまでに全て発見できるかと言う物である。

軍の落ちこぼれ達を集めた銀座研究所、一部の口の悪い将校たちの間では別名銀座刑務所と呼ばれている集団が作った装置と言う事で、どうせまともに動きはしないだろうと思っていた上層部の予想は大きく裏切られた。

なんと、試験開始とほぼ同時に別方向からこちらへ向けて飛行中だった複葉機5機すべてを発見してしまったのだ。

翌日、日が昇る前から佐藤大佐の卓上電話は鳴り止まなかったと言うから、いかに上層部が電索の性能に驚かされたかが伺える。

ひとまず研究員と言う形で銀座研究所に保護された山口達は、班長の山口三等陸曹、軍事マニアの松永一等陸士、技監の長谷部の三人が連日会議を開いていた。

「まず最初に考えるべき事は、我々は何ができるかと言う事です」

黒板に議題を次々と書き入れながら長谷部が言う。

「具体的には、史実を元にした作戦立案の補助、我々の持つ技術の供与などが考えられます。

前者の方ですが、別に軍事行動だけではなく、満州事変に関する件など歴史的事項にも言えることです。

例えば、朝鮮半島への無駄な干渉や中国への無意味な出兵など、国力の無駄遣いどころか自分の首をしめるに等しい行動の停止、そして世界恐慌によって起こる経済ブロック化に対抗しうるアジア経

済共同体の建設などなど：先を知るからこそできる、いわばじゃんけんの後出し的戦略の立案とその補助などです」

「ちょ、ちょっと待って下さい」

山口が両手を前に出して長谷部の説明をさえぎる。

「満州事変ってなんでしたっけ？」

その言葉に長谷部と松永の首がすんと下を向く。

「山口さん、あんた基幹隊員でしょ？だめですよそれくらい知らないきゃ」

「そうですよ班長。自衛隊員として、今までに起きた戦争の詳細を知っておくのは当然の事ですよ！」

松永が立ち上がって言う。

（それは違う）

山口と長谷部の気持ちは一つになった。

「：えーと、ごほん！満州事変というのは、柳条湖事件と呼ばれる満州鉄道爆破事件を契機に始まった日本軍による中国への武力侵攻の事を言います。

これが原因で日中戦争がはじまったといっても過言ではありません
ん」

「そ、そうなのか」

「はい、その後指揮官の独断による越境出撃、関東軍による空爆と暴走が始まります」

黒板の前に立ち、私物と思われる本を小脇に抱えた長谷部はまるで歴史の教師のようだ。

「結果として、我が国は隣国中国と戦争を始めますが、そもそもあんなでかい国を屈服させようとするのが間違っているんです。

仮に屈服させたとしてですよ、あんな巨大な国を管理できるわけがないんです。

現に朝鮮や樺太を抱えているだけでも我が国の管理能力は限界を超える一歩手前なのですから」

「それではどうすれば？」

先ほどから瞳を輝かせていた松永が長谷部に尋ねる。

「中国を武力で屈服させるのは不可能です。これは歴史が証明してくれています。

ではどうするか？答えは単純です。彼らと敵対するのではなく、彼らを中心としたアジア諸国と手を組んで一つの勢力を作るのです」

「ASEANみたいなのか？」

山口が持っている知識を総動員して該当しそうな名前を出す。すると、長谷部は出来のいい生徒を褒めるような口調で再び喋りだした。

「よくできました。」

私が考えている経済統合機構は、私たちの世界において存在した ASEAN——東南アジア諸国連合、1967年設立——に近い物がありますね。

まあ、どちらかと言うとAPECに近い物がありますけど」

「それは確か中東の奴じゃないのか？」

「それはOPEC——石油輸出国機構、1960年結成——です。確かに名前は似ていないわけではありませんが、あれは石油産出国がメジャーの石油支配に抵抗するために結成した物で、私が言っているのはAPEC——アジア太平洋経済協力会議、1989年設立——です」

どうやら、長谷部は世界史や現代社会などにも造詣が深いらしい。

「メジャー？有名所ってことか？」

しかし山口は現代社会の成績が悪かった。

「そりゃあ確かに英語のメジャーの意味は有名ですけどね、私が言っているのは国際石油資本の（メジャー）のことです！それくらいは文脈を読めば分かるでしょう！？」

余りにボケた答えに長谷部の怒りが少し爆発した。

「こくさいせきゆしほん？」

山口の脳で処理できる限界を超えているらしく、すでに言葉がひらがな化している。

その様子を見た長谷部がこめかみを抑えながら説明を開始する。
既に怒りを感じる領域を越えたらしい。

「ふう……いいですか？ 国際石油資本というのは石油の採掘から輸送：製造：販売などを一括して扱って世界の石油産業を支配する国際的な石油資本の事で、アメリカ系のモービル，エクソン，テキサコ，シェブロン，イギリスのブリティッシュ：ペトロリアム，イギリス：オランダ合併のロイヤル：ダッチ：シェルにフランス石油を加えた7社のことを言います」

「モービルは知ってるぞ」

国内のガソリンスタンドでよく見る名前はわかった山口。

「まあ、そう言ったことに疎い班長さんですら知っているという事でいかにメジャーが巨大かはわかりましたよね？」

少しだけ不安そうに長谷部が山口に尋ねる。

「……わかった」

「（今の間はなんだよ）とまあ班長殿が納得した所で話を元に戻しますが、えーと、とにかく、私が作りたいと思っているのはAPECです」

「それはどういうものなんだ？」

まったく分かりません、という表情で山口が言う。

「APECと言うのは、我が国を初めとした21カ国の国、地域に

よって作られている世界経済のブロック化——例えばEUの市場統合など——に対処する機構のことです。『開かれた地域協力』を掲げ、自由貿易の拡大、投資促進などを進めて、アジア：太平洋圏の経済協力強化を行っています。

私はアジア諸国と非白人国による、それも我が国を主軸とするAPECを考えています。

しかし、勘違いして欲しくないのですが、これはあくまでも経済共同体であって、主従関係などはないんです」

「どういうことだ？」

長谷部の言わんとしている事がいまいち分からない山口。

「つまり、経済力の違いはあれど、我が国とアジア諸国はあくまでもよき友人でいこうという事です」

かなり演説に熱が入ったらしく、身振り手振りまで混ぜて説明している。

「これによってアジア諸国が結ばれば、欧米列強に対抗できる一大勢力になるどころか、多彩な人材：豊かな資源、そして世界一の軍事力と強い団結力を持つ史上最強の共同体を形成する事が出来るかもしれません」

そこまで言うのと落ち着いたのか、長谷部はいったん椅子に座った。

「長谷部さんの言いたいところは分かりました。ですがどうやってそれを実行するんですか？」

いち早く話を飲み込んだ松永が具体的なプランを尋ねる。

「それをこれから話し合うんです、といたいところなんです、まあ大まかなプランは出来ているんですよ。皆さん、お手元の資料をご覧ください」

ここに来て、最初に配られていた資料によりやく出番が来た。この時点で、会議開始から既に一時間が経過していた。

「まず最初に行うべきなのは、陸海軍内部の意識改革と、空軍の創設、そして技術革新です」

資料の一ページ目には兵器と言うタイトルと、必須項目としてリーダー、パッシブ：アクティブソナー、750以上出るエンジン、トランジスタなどと書かれていた。

「これは？」

山口が尋ねる。

「今後、2・3年以内に実用化しなければならない物をリストアップしました。

リーダー・ソナーに関しては今更重要性を説く必要は無いでしょう。

750以上出るエンジンとは、時速750km以上を出す事が出来る馬力を持つ航空エンジンということです。

これにより、悪名高い『ワンショットライター』をはじめとした日本軍機特有の装甲の薄さと、出力の低いエンジンのせいで目の目を見なかった超重爆撃機の製造を行い、航空戦力の強化を行うのです」

「なるほど、それではトランジスタってのは？」

当然のように尋ねた山口を、哀れむような目で見ると長谷部と松永。

「トランジスタは分かりますよね？」

恐る恐る長谷部が尋ねる。

「ああ」

なぜか自信満々に山口。

「それならば話は早い。トランジスタを作る事によって、真空管を使用したときよりもっと信用性が高く、もっと小型に各種装置を作る事が出来るんですよ。」

それに、トランジスタを使った装置をいくつも使えばICかそれに限りなく近い物を作ることだって出来ます」

「な、なるほど」

「戦争において技術力の違いはそのまま戦力差に繋がります。工業力だけでもアメリカの十分の一の我が国がこの先勝ち抜いていくのには、技術力と周辺諸国との協調はなによりも大切です」

「だが、トランジスタなんてそんな気楽に作れるものか？」

山口がふと気がついたように言う。

確かに設計図も持たずに一からそんなものを作れるとは思わない。

「ああ、その点は問題ありません。私は技監になるほどの男ですし、

もう一人、一緒に来た私の部下が何とかしますよ」

長谷部はそこでニタリと笑った

「ふえっくし！」

トラックで待機していた長谷部の部下、柴村鏡花がくしゃみをする。

今年で21になる、容姿端麗頭脳明晰語学堪能文武両道といくつもの四文字熟語が当てはまる素晴らしい女性である。

身長は165cm、体重43?、スリーサイズは上から85・36・60、趣味は読書（専門文献に限る）と紅茶を入れる事。

それとダイエット代わりに銃剣道や徒手格闘を行う事。

そして独身で恋人はなし。

ちなみに描写が異常に詳しいのは作者の趣味なので気にしないでもらいたい。

「風邪ですか？」

荷台で装備品のチェックをしていた坂田が話し掛ける。

「いえ、多分誰かがうわさでもしてたんでしょ」

再び読んでいた専門書に目を落としながら鏡花。

その姿は73式特大トラックの荷台であるということを考慮しても（いやむしろそれが追加されて）非常に絵になるが、読んでいる本の内容が『リスクマネジメント概論——日本帝国の犯した失敗とその傾向——』というのがいただけでない。

「気をつけてくださいよ、ここじゃあ薬局に行って風邪薬を買ってくるわけにはいかんですから」

装備品のチェックを続けながら坂田が言う。

「わかってるわよ」

素っ気無い鏡花。

ちなみに、極度の女好きである坂田が彼女に手を出さない理由の一つ。

この部隊に彼女が着任した際に手を出そうとし、近くにあった小銃で完膚なきまでに叩き伏せられたからである。

「あのお嬢さん、役に立つんですか？」

「立ちますとも、彼女は私の一番弟子ですから」

胸をはって長谷部が言う。

「まあ、そういうわけで補助兵装や技術関連に関しては私と鏡花に任せてください。次に、兵器や戦術に関してなのですが…」

「そこから先は私が説明します！！」

普段は大人しい松永が立ち上がって叫ぶ。

銃器マニアでミリタリーオタクの彼は、銃を持つと性格が変わる。

「まず、先ほどもご覧になったチハ型戦車を初めとした脆弱な機甲戦力の改善！歩兵用装備の向上と強化！

レーダー測定器などを使つての艦船の砲の命中率の向上！航空戦力の強化！歴史に基づいた先手を打つ作戦の立案補助！諜報機関の強化！そして・・・ロスアラモス研究所の爆破です」

最後の項目に室内は静まり返る。

「原爆か」

山口が呟く。

「そうです」

松永が静かに答える。

「しかし、アメリカの開発を妨害するだけではありません。やつらより先に我々が開発し、そしてあの国へ落としてやるんです」

「「な、なんだってー！？」」

とんでもない発言に二人が思わず叫ぶ。

「長谷部技監ほどのお人ならば初步的なものならば作れるでしょう？」

「そりゃ作れるが・・・じゃなくて！そんな事をしてどうする！？」

唾を飛ばして叫ぶ長谷部とは対照的に、松永は落ち着き払っている。

「我々の世界でのお返しと、今後の核開発の妨害です」

「お返しは分かるが、どうやって妨害する？」

「簡単な事です。実際に落として、その結果と恐ろしさをローマ法王に見せてやり、彼の名で全面撤廃を世界に勧告させるのです」

それは、白人社会においてこれ以上無い抑止力であった。

キリスト教を第一とする白人社会において、ローマ法王の勧告を無視する愚か者はそうそういない。

そして、非キリスト圏においてもそれは言える。

ローマ法王の勧告を無視すると言う事は、そのままキリスト圏国家との深刻な対立を意味する。

下手をすればそれを口実に侵略戦争がおきる可能性もありえる。宗教の力という物は、時として核兵器にも勝る事がある。

「なるほど！そうすれば、どの国も持つことは無くなる！」

長谷部がぼんと手を打つ。

「そうです。そして我が国は核兵器撤廃を実現させた国として、後世にいたるまで歴史に名を残すでしょう」

今度は松永が演説病に掛かったらしい。

ヒートアップしていく会議室。

会議は翌朝まで続けられた…

第四話『5121小隊登場』

翌朝、目を真っ赤にした三人は徹夜明けの重い体を引きずって佐藤大佐の部屋を訪れた。

朝っぱらから酔っ払いのようにふらふらしている男三人の訪問を受けて彼はかなり怒っていた。

「で？会議の結果はどうなったのだ？夜警がうるさいと怒っていたぞ」

葉巻を吹かしながら大佐が発言を促す。

その言葉に山口が一步前に出て答える。

「一晩中議論を続けた結果、今後の方針が固まりましたのでご報告します。

まず、銀座研究所を拠点として日本の技術力の底上げを行います。技術力の差は戦力の差にそのまま影響しますので」

「そうなのか？」

大佐が興味を覚えたように尋ねる。

「はい。第一次世界大戦がそのいい例かと思えます。大佐殿も戦車の恐ろしさは良くご存知かと」

「まあな」

銃弾を跳ね返ししながら塹壕を踏み潰し突き進む戦車隊を思い出して思わず背筋が寒くなる大佐。

考えてみれば、目の前にいる男達は戦車すらも軽々と倒してしまう装備をもっているのだ。なるほど、確かに技術力は戦力の差に少なからずとも影響するようだ。

「歩兵装備の強化、敵の通信を攪乱する装置、敵を自動で追尾する爆弾、音より速く飛ぶ航空機などなど、我々に協力さえしていただければ全て用意できます」

既に頭の中では具体的な開発プランが出来上がっている長谷部が言う。

「貴様らでなければとくに追い出しているのだがな、まあ貴様らがチハ型を一瞬で破壊する様を見た以上はそうするわけにもいかん。よし、研究開発に関しては可能な限り協力してやろう」

「ありがとうございます」

長谷部が頭を下げる。

「ただし」

大佐は続ける。

「ただし？」

「それなりに期限をきめてやってもらう。いつまでたっても開発中じゃあ話にならない」

「分かっておりますとも。ですが、多少は長めに取って頂かないと。2日や3日でおいそれと出来る物ではありませんからね」

「そんな事は分かっている」

「ありがとうございます」

「ひとまずは何を作るんだ？」

「トランジスタという電子部品です。」

これを使う事によって、いままで真空管に依存していた装置の性能を飛躍的に増大させ、かつ軽量化と小型化を行う事が出来ます。もちろん、信用性も増加します」

「とら：まあいい。で？どれくらい掛かるんだ？」

「そうですね、大体2週間も頂ければトランジスタを搭載した試作のレーダーをお披露目できます」

「2週間だな？よし、予算に関しては可能な限り協力するように私から言っておく」

そこで今度は松永が前に出る。

「それでは続きまして自分から史実に基づいた作戦立案について説明させていただきます」

「おう」

「それでは、最初にこの先起きる第二次世界大戦の概略を説明させ

ていただきます」

そこで松永は第二次世界大戦で起きたことを可能な限り事細かに説明した。

事の発端となった張作霖爆殺事件から、満州国建国。そして盧溝橋事件から始まった日中戦争。その規模は定かでは無いにしても起きた日本軍による南京大虐殺。日独伊防衛協定。

昭和13年の国家総動員法から始まった全国規模の生活統制。翌年昭和14年に起きたノモンハン事件による陸軍の信じられない規模の惨敗。

昭和15年の北部仏領印度進駐と日独伊三国軍事同盟成立。大政翼賛会発足。

翌年昭和16年。日ソ中立条約。関東軍特種演習と同時に行われた南部仏領印度進駐。

そして、1941年12月8日、運命の太平洋戦争開戦。

タイのシンゴラ奇襲上陸と真珠湾奇襲攻撃。

マレー半島、香港、シンガポール、ビルマ、オランダ領東印度諸島、フィリピン諸島と続いた快進撃。

1942年6月のミッドウェー海戦の敗北からソロモン諸島ガダルカナル撤退、そして始まった各地の日本軍玉砕。

1944年7月のサイパン島陥落。

9月のイタリア降伏。11月以降から始まった本土空襲。

1945年3月下旬から沖縄で始まった『鉄の暴風』。

5月のドイツ第三帝国無条件降伏。

7月に米・英・中三国によるポツダム宣言。

鈴木貫太郎内閣によるポツダム宣言黙殺。

8月6日に起きた広島への原爆投下。

8日、同年2月のヤルタ会議によるソ連の中立条約の一方的破棄。
9日、ソ連軍による満州への侵略。
同日に起きた長崎への原爆投下。

14日、日本無条件降伏。

そして1945年8月15日、昭和天皇による『玉音放送』……
帝國陸海軍の事実上の『全滅』

焼き払われた都市、そのあちこちにゴミの様に積み上げられた無数の帝國臣民の遺体。

GHQによる占領政策。

誇りと自信を失った日本国。

そして、政治的植民地として周辺諸国とアメリカ合衆国の顔色を窺いつつ歩まれる今日までの歴史……

「ふう」

全てを聞き終えた大佐は深いため息をついた。

この先大日本帝国を待ち受ける余りにも悲惨な運命を知ってしまった彼は、ため息をつく以外何も出来なかった。

「それで、貴様はどうするんだ？」

疲れたように松永に話し掛ける大佐。

「このことを踏まえたうえで、皇国をより良い方向へ導くための作戦立案の補助です」

「つまり参謀の事か？」

「それに近いですね。

私たちの時代では、過去の大戦について個人で研究している物がかなりあります。

そのため、大戦当時の軍の動きや艦隊戦の結果など神でもない限り知り得ない情報を多数記憶しております。

この知識を元にすれば、作戦行動時にどのような行動を取れば敵を殲滅し、こちらの被害を減らす事が出来るかを知る事が出来ます」

「なるほど」

「聞けば閣下は各地へ顔が利くとか、閣下のお名前で陸海軍へ助言などしていただけると助かるのですが」

「よからう、許可する」

「ありがとうございます」

自分が直接歴史に関与できる事に喜びを感じながら松永が頭を下げる。

「最後は自分です」

山口が前に出る。

「貴様はなんだ？」

「ここを拠点として、帝國空軍を作っていたのだきたいのです」

「空軍？」

「はい。陸海軍の各航空隊を全て結集し、ここ銀座研究所の横あたりにでも空軍省を置いていただきたいのです」

「まてまて、空軍っていうと飛行機を使うんだよね？」

「はい」

「あんな物役に立つか？駆逐艦一隻倒すのにも一苦労じゃないか」

この時代、航空機に対する軍関係者の評価は軒並み低かった。それは未だ技術が確立されていないことを理由とする低い耐久度と攻撃力が主な原因であった。

「さきほど閣下は駆逐艦を沈めるのにも苦戦するといっておりましたね。それでは潜水艦は敵艦を沈めるときどうしますか？」

「魚雷を使うに決まっているではないか」

あたりまえだろと言う顔をしながら大佐が言う。
それを聞くと山口は尋ねた。

「それでは閣下。10機の航空機と1隻の潜水艦。どちらが高価ですか？」

「馬鹿か？潜水艦に決まってるじゃないか」

頭がおかしいのか？といわんばかりの顔で大佐が答える。

「それでは、周囲を警戒しつつ潜望鏡で狙いをつけた4本の魚雷と、敵艦隊を常に視界に治めつつ発射される10発の魚雷…どちらが効

果的ですか？」

「・・・10発の魚雷だな」

徐々に山口の言わんとするところが分かってくる大佐。

「それでは、魚雷を装填した航空機数十機と水雷戦隊。どちらが対費用効果に優れていますか？」

「ついひようこうか？」

聞きなれる単語に目を丸くする大佐。

「つまりですね、生産や運用にかかる費用を考えた場合に、それがどの程度の性能を発揮できるかという事です。

対費用効果に優れていると言う事は、値段のわりにいい働きをす
るとも言いますか、まあ、いわゆる『お得』というやつですね。
安価でありながら高性能なものとも思ってください」

大佐は少し考えた顔をする。

「当たるんならば航空機の方だが、そんなに高性能な物があるとは聞いていない。まあ、そのうち・・・」

「ですから作るんです。

幸いな事に、我々には優秀な技術者が二名おりますから、どちらか片方に新型動力機の開発に回って頂いて、運動性・装甲・武装全てに優れた航空機を製作します。

それを見ていただければきっと閣下も納得していただける筈です」

「まあ、言うだけであれば誰にでも出来る。せいぜい頑張りたまえ」

「はっ、それでは完成の暁には…」

「いいだろう、可能な限り働きかけてやる」

「ありがとうございます」

「さて、私は眠いからもう一寝入りする事にする。さっさと消えろ」

眠そうな目をこすりながら大佐が言う。

久々に早起き――それでも定刻に遅刻していたが――したために、彼は凄まじく眠かった。

分かりましたと三人が敬礼して部屋を出ると、早速机に突っ伏していびきをかき始めた。

しかし、彼の安眠はわずか数分で破られた。

異変に最初に気づいたのは坂田だった。

トラックの運転席で惰眠をむさぼっていた彼は、いつからか無線機に空電が入っているのに気がついた。

どうやら、寝返りをうっている間にスイッチに触れてしまったらしい。

スイッチを切ろうと彼が手を伸ばした途端…

<…ちら…小隊…だれ…応……してく……>

手を伸ばしたまま彼は固まった。

無線機に通信が入っている!?

震える手でレシーバーを掴む。

「こちら中村三等陸曹！！応答願います！！」

<陸……？…何を……まあい……>

徐々に空電が収まってくる。

<こちら5121小隊、瀬戸口です！後方に撤退許可を願います！>

通信がはつきりとするのと同時に、銀座研究所の一角である射撃試験場に、突然戦闘ヘリ2機、見慣れない戦車1両、坂田達のは違う大型のトラック1台、ドラム缶やコンテナ多数。そして、人型の巨大なロボットが3機現れた。

一瞬、銀座研究所の面々と現れた連中はお互いに呆けたような顔をした。

しかし、次の瞬間にはお互い武器を構えてにらみ合いを始めた。相手には見たことも無い機動兵器や戦車、着陸しているとはいえ戦闘ヘリすらあるのだ。

トラック1台の山口達の時とは危険度の度合いが違う。

「善行委員長、どうしますか？」

薄暗い車内で、モニターの中に映し出されている1945年代の日本兵の格好をした集団を見ながら、オペレーターの瀬戸口が部長である善行に尋ねる。

容姿が結構優れているうえに何よりも色恋沙汰を優先する彼は『

人妻から幼稚園児』までをカバーする幅広い趣味の持ち主である。

「監視を続けろ」

某組織の司令官のようにコンソールに両肘を下ろし、両手を顔の前で組みながら善行が答える。

冷静沈着で、常に的確かつ迅速な指示を下す切れ者である彼は、なぜかいつも半ズボンだった。

くしっかしどうなってるんだろうな？>

通信機から2号機パイロットの滝川陽平の能天気な声が聞こえてくる。

幼いところからいわゆる『ヒーロー』にあこがれている彼は、なぜか思考が他の部隊員に比べて幼い。

くいったいどうなっているのだ？速水、何かわからんのか？>

きびきびした感じの若い女の声が無線から流れる。

声の主は芝村舞。

裏社会に精通し、世界経済を牛耳る芝村一族の一員であり、豊富な知識と壮絶なまでの行動力を持っている上にさまざまな技能をもっているだけではなく、かなりの美貌までももっている万能の天才である。

複座型である彼女の搭乗機3号機に同乗している速水厚志のことを想っているのは公然の秘密である。

ちなみに、某宇宙物アニメのヒロインと喋り方が似ているのは気のせいでは無いと思う。

く少なくとも、さっきまでいた前線じゃないことは確かだよね。あ

「あ、この様子だと明日のプールには行けそうも無いね」

ぼやんとした口調であるが、なぜかどこかに冷たい感じがする声で答えているのは噂の速水厚志である。

生存確率が比較的高いという安易な理由でこの部隊に入った彼は、心優しく、気が弱く、いつも幸せそうな顔をしている。

本人は意識していないが割と美形で、なぜか個性の強い、性格が歪んだ輩に好かれるという特性を持つ。

実戦に出始めて直ぐに持ち前の才能が開花し、初陣から僅か一ヶ月で撃墜数は三桁に届いていた。

あまたの勲章を授与し、週に数度はテレビに出ている彼の事を、部隊の同僚達は初めこそ怯えていたが、彼のお陰で生き残れているとプラス思考で考えだしてからは感謝するようになっていた。

「くばばば馬鹿者！そういうことを人前でいうでない！！」

舞の慌てふためく声が部隊全員に流れる。

「く不潔です！」

そこにすかさず突っ込みを入れるのは壬生屋未央、1号機パイロットである。

旧家の娘で古武術をたしなむ典型的な大和撫子の彼女は、極度の潔癖症のうえに世間知らずで、そのレベルは男女が話すだけでも『不潔です』といいだすほどである。

旧家の人間である事との関係があるのかどうかは知らないが、常に袴をはいている。

芝村一族を嫌悪しており、当然ながら舞のことも嫌っている。

「く未央ちゃん、舞ちゃんと喧嘩しちゃめーなの」

そこへ子供の声で仲裁が入る。

声の主は東原ののみ。オペレーターである。

部隊で1番幼く見える彼女は見た目的には小学生くらいなのだが、それは非道な人体実験の結果で成長できない体だからであり、実際にはもっと年齢は高い。

瀬戸口が彼女の事を好きなのは秘密。

「どうするんですか？」

瀬戸口が、今度は善行の方を見て尋ねる。

明らかに異常なこの事態に、善行の事を嫌う彼とは言え頼らずにはいられなかった。

「……ひとまず相手の部隊長と話してみます」

建物から太った軍服姿の男が出てくるのをモニター越しに見ながら善行が答える。

歴史の齒車が、確実に狂いだしていた…。

第五話『敵か味方か人型機動兵器』

「お前らの知り合い・・・じゃなさそうだな」

建物を出て直ぐのところにいた山口に佐藤大佐が言った。

山口達が小銃やパンツァーファースト?を構えて戦闘態勢に入っていたからである。

「お前らの敵か？」

自分も設けられた土嚢に身を隠して大佐が尋ねる。

「いえ、自分達の世界にはあんな形の戦車はありませんし、第一あんな人型の機動兵器なんて存在しておりません」

戦車砲ほどもある砲を構えてこちらを向いている人型を見ながら松永が答える。

「班長!どうするんですか!?発砲するんですか!?!」

完全に錯乱した坂田が言う。

元チンピラの彼にとって、相手に戦車がいるという状況は理性を失わせるのに十分だったらしい。

もっとも、山口達も錯乱一步手前であつたが……

「落ち着け坂田。まずは相手の動きを見ないと……」

上官としての威厳を保つため、ありったけの理性を総動員しつつ山口が静めようとする。

「相手の動きを見るってたって戦車がいるんだぜ!!それに戦闘へりも!先にやらなきゃやられるんだよ!!」

山口の制止を振り切って中村が発砲しようとする。

89式を構え、伏せていた場所から立ち上がる。

「あっ、この馬鹿っ!」

慌てて山口が立ち上がり止めようとする。

その様子を見ていた相手の戦車が砲塔をこちらに向ける。
人型が機関砲を構える。

BAKO!!

一気に状況が緊迫した瞬間、周囲に鈍い音が響き渡った

「このポケット!カスッ!現状が理解できんのか!?それに上官に対してあの態度はなんだ!!」

なんと、怒った佐藤大佐がその太った体でとび蹴りをかましたのだ。

自衛隊員とは思えない貧相な体型の中村は、まるでライフルで撃たれたように派手に吹っ飛んだ。

眼鏡が、89式が宙を舞う。

「……ゴホッ!ゲフ!!」

約一メートル先にわき腹から着地した中村は呼吸困難になつてむせた。

（一体何が起きたんだ？）

脳が事態を把握する前に、佐藤の放った第二波が彼を襲った。

「このタコがつっ!!」

手加減抜きのキックが彼のわき腹を、本気のパンチが顔面を襲う。見る見るうちに貧相な彼の顔は月面へと変化していった。

「か、勘弁してください……」

必死に頭を手でかばいつつ中村が懇願する。

その様子を唾然としながら見ていた坂田は思った。

（タメ語吐かないでよかった……）

佐藤による中村への制裁……指導のおかげで、緊張していた現場の雰囲気は幾分か紛れた。

そして、中央にあったコンテナの山の陰から、一台の装甲車がゆっくりと出てきた。

アンテナのところに白旗をくくり付けてある。

どうやら軍使のようだ。

「班長、どうします？」

中村が戦闘不能になったため副長を引き継いだ松永が山口に尋ねる。

「大佐殿、軍使を受け入れますか？」

幾分か不安そうに山口が尋ねる。

すると、大佐は中村小突きながら言った。

「当たり前だろ」

「・・・と、いうわけです」

説明を終えた善行が椅子に座る。

ここは、昨夜山口達が徹夜で会議をしていた会議室である。

軍使を乗せた装甲車から降り立ったのは、奇妙な服を着た男だった。

青年は、善行忠孝と名乗った。

「善行とかいったな」

上座に黙って座っていた佐藤が口を開いた。

「はい」

直属の上司であった芝村準竜師（中佐）よりも一つ階級が上の佐藤が相手なだけに、必要以上に緊張してしまう善行。

「こっちの山口ってやつな。連中も貴様の言う『平成とか言う未来』から来たらしいんだが、貴様の言う『幻獣』とかいう物は知らないそうだな。これは一体どういうことだ？」

傍らに座っている山口を見ながら大佐が言う。

大佐の疑問はもつともだ。

今自分の横に座っている山口三等陸曹とかいうやつは、ソ連が攻めてきた平成という未来の日本から来たという。

実際、持っている装備に使われている技術力などは佐藤達の時代で無い事は明白であり、十分信じるに値する。

しかし、もう一方の善行とかいう奴の話によると、平成の世界というのは全世界のほとんど全てが『幻獣』とかいう奴等に制圧されているらしい。

そして、『幻獣』との戦いは1945年からずっと続いているらしい。

彼らのもつ装備も当然ながら佐藤の時代で作り出す事は不可能であり、『平成とか言う未来』から来た事は本当らしい。

ところが、山口は『幻獣』を知らないという。

そして、善行は『極東ソ連軍による武力侵攻』を知らないという。全世界のほとんどを制圧するような連中を知らないなんて事はありえないし、それと同時に他国が攻め込んできている事を知らない国民なんていうのもいない。

とすると、考えられるのはどちらかが嘘をついているということだ。

だが持っている物はどちらも未来の物。

大佐はだんだん頭が痛くなってきた。

「誰か分かりやすく説明してくれ」

考えるのがダルくなった大佐は椅子に座って言った。

「松永、今回は説明できそうか？」

山口が自分の向かいに座っている松永に助けを求める。

「一応は」

「よしやれ」

すぐさまGOサインを出す山口。

彼も現状がわからずに困惑している一人だった。

「まず最初に、パラレルワールド、平行世界について説明させていただきます」

黒板の前に立った松永が言う。

チョークで黒板の真ん中に縦線を引く。

「これが大佐殿の世界の時間の流れだと仮定します」

左右に一本ずつ、平行線を引く。

「左が私たちの世界。右が善行さんの世界の時間の流れです。」

この図を見ていただくと分かりやすいと思うのですが、平行世界とは自分の世界から見たほかの時間の流れの世界の事です。

さて、大佐殿は我々と善行さんの話が食い違うとお思いになられませんでしたか？」

「思った」

即答する大佐。

「我々は『幻獣』を、善行さんは『極東ソ連軍による武力侵攻』を

お互いに知らない。

通常ならばこれはどちらかが嘘をついているということになります。ところが、平行世界の存在を考慮に入れると別の考え方ができるようになります」

「つまり、善行さんは別の世界から来たという事か？」

山口が結論を言う。

「そうです。しかし、我々もそうです」

「なんだって!？」

「こちらへ来てから私はずっと違和感に囚われていました。

そして、昨日私物のノートパソコンを見て気がつきました。

この世界は、似ているようで我々の過去とは微妙に違います。

例えば、我々の歴史だと八木アンテナは外国企業に特許を取られています。日本軍によるレーダーの本格的な開発は第二次世界大戦後からです。

そして、この間破壊したチハ型の試作機が作られたのは1937年ごろです。

ついでに言いますと、我々の世界ではここまで蒸気機関は異常に発達しておりません」

たまたま堀の外の街中を眺める機会を得た松永は、異常に蒸気機関が発達していることに気がついていていた。

道を走る車、さまざまな装置、その全てが蒸気機関で動いていた。それも、元いた世界だったならばイージス艦のエンジンにそのまま技術を転用してやりたいほどの性能である。

「……どういうことだ？」

いまいち飲み込めない大佐が尋ねる。

「つまり、大佐殿の世界と我々、そして善行さんの世界は全て別の物であるという事です」

「「!？」」

声にならない声を出す三人。

「本来、平行世界というものは混じりません。『平行』ですから。恐らく、何らかの力が働いてこのような事態が発生してしまったのでしょうか」

「何らかの？」

善行が言う。

「大体予想は付きます。

私たちの場合、攻撃機の爆弾の直撃。

そして、善行さんたちの場合は熊本城に集結した幻獣との決戦で発生したと想定されるエネルギーか何かだと思われます。

そして、時空の中をさまよっていたところで、電索の暴走に引き寄せられてここに現れた」

再び、雷鳴がとどろく。

表を見ると、かなりの土砂降りだ。

「ふえつくしゅ!!」

テントの前で歩哨をしている中村がくしゃみをする。

「畜生、あのデブめゝいつか殺してやる」

中村がそんなお約束をやっている時、会議室では今後の方針を決めていた。

既に、善行たち5121小隊は山口達と同じように銀座研究所に研究員として迎えられる事。

そして、整備班を動員して大介達の新兵器開発に協力し、大日本帝国に貢献する事がきまっていた。

「それでは、そちらの整備班の方たちと協力して、トランジスタやその他装備品の開発に全力を注ぎます」

呼ばれた長谷部が横にいる柴村に資料を渡しながら言った。

「聞くと、そちらの整備班の方々は女性らしいですからね、ウチの鏡花と話が合えばいいんですが」

「どうでしょう。個性的な人たちですからね」

善行の頭の中に整備班長、原素子の笑みが浮かんだ。

美人なのは良い事である。

嫉妬深いのも浮気性に比べればましである。

しかし、ほかの女性と仲良くしただけで刃傷沙汰というのはいた

だけない。

「まあ、気が合うといいですね」

「そう願います」

「そうあってほしいですな」

日ごろ個性的な部下に悩まされている中間管理職三人がため息をついた。

「ちょっと！長谷部技監！どういう意味よ！！」

臨席していた鏡花が怒鳴り声を上げるが、それはため息を増大させる効果しかなかった。

小隊に戻った善行は、直ちに部下達に現状を説明した。

他の平行世界に飛ばされたというにわか信じがたい話に小隊の誰もが混乱したが、年齢的には学生とはいえ軍人である。直ぐに平静を取り戻した。

「それで？私たちはこれからどうすればいいのかしら？」

整備班長であり、一時期は善行の恋人であった原 素子が腕組みをしたまま尋ねる。

同性や下級生に絶大な人気があり、そっち方面の噂もある。

スカウト（随伴歩兵）の若宮 康光が惚れていて、FCをやっている（現在会員一名）

「整備班の皆さんには、こちらの技術者の方々と共同で兵器開発に励んでいただきます。」

当分の間、士魂号を使用するような戦闘は予測されませんので、各機から担当者を一名ずつ、交代でローテーションを組んでください」

「了解しました」

敬礼する原に頷きながら、今度はパイロット達の方を見る善行。

「各パイロットは機体の整備を手伝ってあげてください。」

普段三人でやっている整備を二人にしてやっていたのでは、能率が低下する上に他に事故が起きる可能性がありますからね」

「「「分かりました!」「」」」

元氣よく敬礼するパイロット四人。

三機なのになぜ四人かと言うと、三号機だけは騎魂号といって二人乗りだからだ。

「あの…」

三号機操縦者の速水が善行に声をかける。

「なんですか？」

「電子装備や駆動系に関しては自分にも多少知識があります。お手伝いできる事があればしますけど」

「整備班長、どうしますか？」

原の方を見ずに善行が言う。

「あら、速水君なら大歓迎よ。ねえ森ちゃん？」

傍らにいた部下、森 精華に話を振る。

「えっ！い、いえ、その・・・まあ・・・」

赤くなって下を向く森。

それを見て愉快そうに笑う原と露骨に不機嫌そうな顔をする舞。

「話はきまったようですね、早速荷物の目録付けとテントの設営を始めてください。

あちらから人員を分けていただけの事になりました。必要ならば使ってください。それでは各自作業を開始」

直ぐに仮設格納庫の設営に掛かる小隊の面々。

その姿は若年とは言えども、さすがは軍人といえる。

「山口さん、でしたよね？」

離れたところで待機していた山口に善行が声をかける。

「そうです」

「早速ですがそちらの人員を分けていただけませんか？何しろこん

な巨大な物を三つも収容できる奴を作らないといけないので」

傍らにそびえる3機に目をやりながら言う。

「あっちのはどうするんです？」

着陸している2機の戦闘ヘリと、砲塔を下げている戦車を見やりながら山口が言う。

「あっちの方はこちらが終わり次第という事で」

「分かりました。それではウチの若い者を何人かお貸しします」

敬礼すると、後ろに並んでいる3人の部下達の方を向いた。

全員若い女がたくさんいるところに行きたくてうずうずしているようだ。

「坂田一士！松永一士！一步前へ！」

坂田と松永が前に出る。どちらもうれしそうだ。

一方、抽選からもれた中村は悔しそうだ。

「俺と一緒にテント設営を手伝え」

「はっ！」

「了解です！！」

かなり元気よく敬礼をする二人。

自衛隊に入ってから以来最高の敬礼であった。

「あ、そうそう中村三曹」

思い出したように山口が言う。

「なんででしょう？」

階級が同じなので別に敬語を使う必要は無いのだが、相手はベテランの上に隊長なので敬語を使う中村。

常識的に考えて隊長と副隊長は同じ階級ではいけないのだが、中村三曹は野戦昇進の上に戦場での任命だったためにこの班はこのような変則的編成となっていた。

「中村三曹は只今を持って伍長に階級を変更。以後は佐藤大佐の下につくように」

「ええっ！？マジですか！？」

ただでさえ悪い顔色が更に悪くなる。

「これは命令だ。駆け足で大佐の下へ行き指示を貰え。以上」

冷たく言い放つと、山口は坂田達を連れて5121小隊のほうへ行ってしまった。

残された中村は暫く呪詛を唱えていたが、やがてあきらめたように佐藤のいる建物へと向かった。

「山口三等り、あー伍長です。お手伝いできる事がありますか？」

善行がいなかったの、仮設整備棟の付近で1番偉そうな人物に声をかける。

整備班とパイロットの中で、1番偉そうに見える人は誰かと5121小隊員に尋ねると、たいていの人は三号機ガンナーの芝村舞か、整備班長の原素子の名をあげる。

今回舞はテントの敷設を手伝っていたので、声を掛けられたのは原であった。

「あら？ 貴方は確か山口さんでしたかしら？」

小首を少し傾けて、顎の所に手をやる独特のポーズをとりながら原が答える。

5121小隊の中で、もっともオトナの色気に近いものを持っている彼女に思わず下半身が反応してしまう坂田。
たまらず前かがみになる。

「し、しみる…」

どうやら彼は新人自衛官研修の時になったインキンが直っていなかったようだ。

ナニを抑えて涙目になっているその姿は、無様以外の何者でもない。

「彼はどうしたの？」

いきなり前かがみになった坂田を不思議そうに見る原。
その視線を遮るように坂田の前に回りこむ山口と松永。

「な、何でもありません！きっと具合でも悪いのでしょう！」

「き、きつとそうでしょう！」

「「わ、わははははは」」

二人してぎこちない笑い声を出す。

「……大丈夫……ですか？」

二人が必死になって原の注意を逸らしている時、いつのまにか坂田に近寄って声を掛けた女性がいた。

「き、君は？」

股間から這い上がってくるなんともいえない痒みや痛みと戦いながら坂田が尋ねる。

「……石津……萌、です」

やや俯きかけで暗めな彼女は黒魔術の使い手でありながら衛生官である（！？）

髪型とかを変えてみると意外と美少女だと思われるのだが、現状では少女漫画のいじめられ役である。

幸いな事に5121小隊ではそんな小さな事を気にする人間はいなかった。

ちなみに、5121小隊は年齢的にはほぼ全員が高校生である。

もしこれが我々の世界であつたら『子供の権利条約』などに引っ掛かるのだが、彼らの世界では1945年からずっと続く幻獣との

戦いのために、そんな条約もないし、戦争に子供を投入する事をいちいち反対するような人間もいなかった。

「山口伍長です。原整備主任に言われてお手伝いに参りました。何なりとお申し付けください」

パイロットが相手と聞いてやや緊張しながら山口が言う。

勿論敬礼しながらである。

その後ろには、実物のロボット兵器を前に緊張して敬礼する松永と、片手でナニを抑えながら敬礼する坂田がいる。

「それではテントの設営を手伝ってもらおう。厚志、手伝ってもらえ」

支柱のボルトを締めていた舞が顔も上げずに言う。

「それじゃあお願いしまーす！」

天井の部分に当たるところから速水が叫ぶ。

整備用の薄汚れたツナギに工具箱という姿だが、何をしても美少年は絵になるから羨ましい。

「そちらまで行けばいいんですね？」

山口がそれに答える。

その視線はジーンパンにバンダナ姿の三号機整備員森精華に注がれている。

ちなみに、視線が注がれている理由は、60%がそのスレンダーな体で、残りの40%は（いつの間にあそこまで行ったんだ？）という疑問だ。

「こわい、かゆい、さむい」

パイプにしがみつकिながら坂田が言う。
みっともないことこの上ない。

「そちらのかたどうしたんですか？ 具合でも悪いんですか？」

ボルトを締めつつ速水が言う。

「気にしないで下さい。仮病です」

こちらもボルトを締めつつ山口。
インキンだなんてみっともなくて言えやしない。

「へー、あの機関砲はそんな大きな口径を使用してるんですか！」

「そうなんです。おかげで整備の時は大変なんですよ。トリガーだけでもかなりの重さですから」

「そういえば、あの端っこの奴だけ背中が大きいですね。複座型ですか？」

「！！よく分かりましたね。あれは騎魂号と言って複座型の機体なんです。機動力の低下を電子装備やマイクロミサイルを搭載することによってカバーした奴なんです」

「へー、じゃあやっぱりパイロットとガンナーに別れてるんですか

「？」

「はい」

「なるほどなるほど」

松永は森との会話に熱中しているようだ。

二人ともボルトを締める手は数分前から止まっている。

「なあ、あの二人ほっというてええん？　まずいんとちゃう・・・って、あんた仕事せんかい！！」

指揮車運転手兼事務員の加藤祭が指揮車の整備を手伝っていたはずなのに、いつのまにか奇妙なダンスをしていた岩田裕にキレル。

加藤は事情を知らない人がしゃべると関西人と思われがちなのだが、実際には熊本育ちの熊本人（そんなのあるのかな？）である。

赤い髪と関西弁、そして明るさがトレードマークの女の子である。テロによって足がつかえなくなり、車椅子に乗りながらも整備員をやっている狩谷夏樹に恋心を寄せるも、相手方からは結構煙たがられている。

そして、彼女が頭に来ている相手——死体でさえもつとまじだと思える顔色に赤い塗料で奇抜なメイクをし、それはそれはステキなセンスの服を着込み、例えば自分が民間人であっても、道端で出会ったら逮捕せずにはいられない言動をとる男——は、岩田裕。通称はイワタマンらしい。

彼についてのコメントは、取扱説明書・・・小隊人事資料から抜粋したい。

『ギャグ大好きでつねに踊っている、アブナイ男』

どうやら、世の中の大人たちにはまだまだ見る目はあるらしい。もつとも、入隊を許可した時点で見る目はないと評するべきかもしれないが。

「フフフフフ、電波がきてますよう！」

全身をくねくねさせながら岩田が言う。
その姿は不気味の一言だ。

「てめえ、そのきもちわりい踊りは止めろって言ってるだろお！」

いきなり岩田の後頭部に拳がめり込む。

後頭部に叩き込まれた運動エネルギーを吸収しきれず、岩田の体が数メートル吹っ飛ばされる。

体を宙に浮かせたまま、停車している戦車に激突する。

岩田の激突した個所の直ぐ横で作業をしていた整備員遠坂圭吾が驚いて持っていたスパナを投げてしまう。

放たれたスパナは鋭い円を描きながら離れたところでテントの支柱にボルトを締めていた茜大介目掛けて飛んでいく。

「ふんっ」

飛んできたスパナを自慢の美脚で跳ね返すと彼は鼻を鳴らした。
茜大介。彼の名を尋ねると、たいていの者はこう言う。

「今度会ったらクロス」

はつきり言って彼の性格の悪さはギネス級である。

同小隊に所属する、温厚で有名なA・Hパイロット候補生（当時）はこう証言する。

「始めてあった時、まるで天使のようだと思ったんです。彼はそれほど整った素晴らしい顔立ちをしているんです。

ところが、その口から出てきたのは：今思い出しただけでも腹が立つ。十円くれてやるだど？間抜けな顔だど？ククク、いつかその言葉を後悔させてやろうと誓いましたね」

温厚なA・Hさんをしてこう言わしめるのだから、彼がどんな性格であるかがわかるであろう。

ちなみに、A・Hさんが誰か気になった方は、この前の話を見てください。多分分かると思います。

さて、茜が蹴り飛ばしたスパナがどこに行ったかというところ・・・

「・・・いたい」

薄幸なことで有名な整備員田辺真紀の後頭部を直撃していた。

茜の蹴りによって運動エネルギーが増大したスパナは、ブーメランのように回転しながら支柱や足場を避け、驚異的確率で彼女の後頭部を直撃したのだ。

着弾の衝撃で彼女の眼鏡は地面に落ちて割れてしまったのだが、日ごろから突然落ちてきたタライなどによって眼鏡が割れる事に慣れていた彼女は、すぐさま予備の眼鏡を装着していた。

さて、この騒ぎの発端となった岩田を殴り飛ばした人物の名前は

田代香織。

やはり整備員である。

茶髪に乱暴な言葉づかい、キツイ性格と一見どころか二見三見しても不良少女の彼女だが、腕っ節の強さと友情、仲間意識などの人情関係に関しては高い評価を得ている。

「な、なあ速水くん。オレの弁当・・・やるよ」

岩田の事は忘却の彼方に追いやった後らしい。

第六話『工場建設』

整備テントの方で騒ぎが起きていた頃、研究棟では長谷部を中心としたトランジスタ開発班が国産トランジスタ第一号を完成させていた。

製造法も原理も知っている長谷部と鏡花にとって、初歩的なトランジスタを作る事など造作もなかった。

手早く素材を揃え、さっさと第一号を完成させた長谷部達は、大介達に技術的な説明をした後に今後何をするかを説明していた。

「次に、今後何をするかですが」

大介が電索の説明に使った黒板に『技術力向上計画』と書くと、国産トランジスタ第一号を取り出す。

「ひとまずは、このトランジスタを量産できる体制を整えます。いつまでも手作業で作るわけにもいきませんから」

「質問」

岡村が手をあげる。

「量産すると言っても、具体的にはどうするんだ？俺達は三菱とかの連中とは違って、そういうことには疎いぞ」

「まず最初にやるのは、我々専用の工房を作る事です。

幸いな事に、ここ銀座研究所には意外と土地があまっていますからね、小規模な工場の一つや二つは作れるはずですよ。」

工場の建設と同時に、製作用の工作機械も購入します。また、工作機械一基に一つモーターを付けます」

「一基に一つ!？」

長谷部と鏡花を除く全員が素っ頓狂な声を出した。

現在、工作機械には一基に一つそれぞれモーターが設置されている。

だが、この時代の日本には、そのような贅沢をする余裕はなかったのだ。

結果として何をしたのかといえば、革命的発想に基づき、一つのモーターを最大限活用できるように、その動力を他の機械へ伝達できるように工夫したのだ。

足らぬ足らぬは工夫が足らぬとは後のこの帝國の標語であるが、その精神はこの時点で確かに根付いていた。

とはいえ、それをする事によって犠牲は発生する。

この場合の犠牲とは品質の均一さであり、生産速度であった。物づくりという視点で見れば致命傷だ。

長谷部は、国営であるのをいいことに、資金に糸目はつけずあえて一基に一つモーターを付けようと言うのだ。

「そ、そんな資金はありませんよ」

大介が言う。

佐藤大佐は、電索計画開始の時に指定の予算以外はびた一文出さないとはっきり言ったのを思い出したのである。

しかし、うろたえる大介を尻目に長谷部は自信満々だ。

「ご安心を。大佐殿は任務遂行のためには多少は資金を自由に使っても良いと仰っていましたから」

「ええっ！？あの大佐が！？」

まさにびっくり仰天の大介。

「はい。というわけで早速発注しましょう。工作機械やモーター、資材や工員など注文する物は幾らでもあります」

工房の建設資材や、工作機械の購入はすんなりと決まった。

佐藤大佐が手を回し、陸軍省の命令書を作らせたからである。

さすがに大日本帝國陸軍たつての依頼とあつては最優先で準備しないわけにはいかなかった。

関東全ての関連工場に本社から指示が回り、納品予定だった物全てが強制的に銀座研究所に送られた。

「いやゝ陸軍さんのごり押しは天下一品ですな」

あつという間に揃えられた資材を前にしながら長谷部が満足そうに呟く。

「民主主義だったら、例えば国家の一大事でもここまで強引には出来ないでしょうね。軍国主義様様といったところでしょうか」

その隣でクリップボードに挟んだリストにチェックをしながら鏡花が言う。

話しながらも手は次々と仕事をこなしている。

「どれくらいそろったんだい？」

「大体90%くらいですが、残りはトランジスタ用の原料ですから

問題ないと思います。

工房のほうはお任せください。それより、トランジスタレーダーの方はどうなんですか？」

「ああ、高橋博士を初めとしたこちらの技術団は思っていたよりも優秀だったらしい。既に試作一号は出来上がったよ。

ついでに、空いた時間を使って海軍工場の若手連中と面白い物を作ってみた」

チェックを付けていた鏡花の手が止まる。
嫌そうな顔をしながら長谷部の方を向く。

「長谷部技監。まさか、また技術者を煽って余剰予算で勝手なことを・・・」

「しっちゃった」

ウインクをしながら少し舌を出して長谷部が言う。

「今回は陸自で使ってる155mm榴弾砲の廉価版を三門作ってみました。

さすが大艦巨砲時代！現代の技術を知ってるだけ教えたら、この時代の冶金技術の許せる範囲内で最高の強度を持ちながらも極端な軽量化に成功しました。

射程や連射性能は現代の物より少し劣りますが、それでもこの時代のものよりは遥かに優れた物です」

「またそんな物を作って、前に技本（技術研究本部）でやって叩かれたのを忘れたんですか？」

あきれ果てた様子の鏡花。

長谷部は、技本の本部長に就任した年に若手の研究者十数名を煽り、所内で各研究で余って贈賄用に溜められていた資金を全て使用して新型の装甲車を勝手に開発したという前科があった。

使われた予算は本来存在してはいけない物の上に、幾つもの大学のさまざまな学科を主席で卒業したIQ230の万能研究者と国防装備開発の若手達を首にするわけにもいかず、かといって無かった事にするにはあまりに高性能なおかげで事なきを得たが、危うく解雇どころか逮捕されるところであった。

結局極秘裏に開発されていた事になったが、組織の枠を超えての活動に当時の政府からは散々叩かれた。

「大丈夫ですよ、佐藤大佐に見せたら大喜びしていましたから。

明々後日に陸軍の高級官僚を集めてお披露目をしてくれるそうです。もっとも、高級官僚とは言っても佐官だけだそうですが」

「それではそちらは長谷部技監にお任せします。工房のほうはお任せください」

「わかった」

長谷部の返事を聞いた鏡花は軽く頭を振りながら工員達に指示を出すために積み上げられた資材のほうへと歩いていった。

昭和元年4月18日 千葉県九十九里海岸某所 AM10:00

海岸に設けられた陣地に155mm砲三門が配置されている。

場所は電索の性能試験にも用いられた例の場所である。

「目標敵艦、距離15000!」

巨大な155mm砲に取り付いた砲兵達が照準器を操作し、砲弾と装薬を装填する。

ちなみに、装薬とは砲弾を飛ばすための火薬の事である。沖合いに浮かぶ敵艦に三門の照準が揃えられる。

「射撃用意! 照準良し!!」

「砲撃許可でした!」

無線機で許可を伝えられた兵士が叫ぶ。

「砲撃用意! 耳を塞げ! 射撃5秒前、4、3・・・」

班長が秒読みを始める。

その間に班長と照準手以外は耳を塞いで口を開く。口を開いているのは、射撃に伴う気圧の変化に対処するためである。

「・・・2、1、撃え!!」

発射レバーを引いた瞬間、巡洋艦の主砲ほどもある巨大な155mm砲三门が火を噴いた。

放たれた三つの155mm砲弾は、衝撃波でさざなみを立てながら15000メートル彼方の敵艦に突き刺さる。

真っ赤に輝く砲弾が吸い込まれると同時に、敵艦は十メートルクラスの水柱三つを立てて消し飛んだ。

水柱が収まる頃、敵艦は跡形もなくなっていた。

「…いかがですか閣下？」

現場から離れたところにある本部にいた米田帝国陸軍中將に佐藤大佐が声をかける。

「おう、結構な物作るじゃねえか」

「恐縮です」

一応頭を下げる大佐。

佐官同士の繋がりや個人的なルートから、目の前の貧相ながらも日露戦争の英雄である男の今の仕事を一部なりとも知っているのにも関わらず、他の将官に接する時と同じ態度である事はある意味立派ではある。

「時に、佐藤とかいったな」

椅子に座り、軍刀を地面につきたてながら米田が言う。

「はっ」

「どうやってあんな物をこしらえた？」

「ウチの研究員達の努力の賜物です」

隣のテントで実験の成功を喜んでいる研究員達を指差しながら大佐が言う。

彼は真面目に努力する自分の部下達に感謝していた。

少しパイプを生かして資金を調達したりするだけで軍内部での自

分の地位が上がるから。

「ほう、ずいぶんと立派な部下を持ってるようじゃねえか、結構結構」

満足そうに言いながら研究員達の方を見る米田。

早くも撤収の準備を始めている彼らの方を一人一人見ていく。

大介から順に見ていったその視線が長谷部に向く。

その瞬間、米田の目が細くなる。

「あいつは誰だ？」

佐藤大佐に尋ねる。

「あいつ、と申しますと？」

誰を指しているのかは大体想像がつくが、一応訪ねる佐藤。

「あそこの、綺麗なネーちゃん横に置いてる奴だよ」

指差す方を見してみる。

どうやら長谷部の事を言ってるらしい。

「ああ、彼はこの間新規採用した長谷部という研究員です」

「あいつ、ただの研究員じゃねえな」

自分達の世界の住人とは微妙に違う『何か』を感じ取った米田が言う。

「……おっしゃる意味が良く分かりませんが？」

穏やかな表情をしつつも内心はドキドキしながら佐藤。

「へっ、オメエも役者だなあ」

「はあ……」

困惑したような表情を浮かべ、あいまいな返事をしながらも、佐藤の頭の中では早速米田に対する作戦案が作られていく。

「さてと、用事が出来たんでな、これで帰らせてもらうぜ」

米田が立ち上がる。

「そうですか。それでは」

敬礼する佐藤。

退場する米田に気がついた他の佐官たちも立ち上がって敬礼をする。

「おう」

それに片手を挙げながら答えつつ退場していく米田。

それを見送りながら佐藤大佐は内心焦っていた。

（まずいな、よりにもよって米田に感づかれるとは。何か手を考えなければ…）

研究所に帰った大佐は、早速陸軍省に電話をかける。

「こちらは銀座研究所。佐藤大佐だ。陸軍参謀本部内線3416、小林少将。大至急だ」

暫くした後、かなりだるそうな男が電話に出る。

「何ごとだ大佐？」

「まずい事になりました少将閣下」

「今度はなんだ？」

「私の研究所の内情を、米田中將が探ろうとしているようです」

「わかった。それなりに手はまわしておく」

「ありがとうございます」

「あまり面倒事は起こさないでもらいたいな」

「努力します。それでは」

要件だけ済ませると、大佐は電話を切った。

翌日から水面下での諜報戦が開始された。

米田中將は陸軍内部での自分の発言力と手駒を最大限に利用して、

銀座研究所に関する全ての情報を集めようとする。

ところが、東京憲兵隊とも深いつながりがある小林少将の力は強く、会計局や工事に携わった業者達は一切口を開こうとはしなかった。

更に、新兵器の開発施設であると言う事と参謀本部直属である事から、施設や職員に関する情報もほとんどが部外秘扱いで手にいれることが出来なかった。

書類は手に入らず、関係者は口を閉ざす。

しかし、それであきらめる米田ではなかった。

連日銀座研究所を監視し、外部からの接触と内部の動きを探らせ、ちよつとした用事で中に入った者や、日用品の出入り業者を捕まえ、話を聞こうとした。

当然ながら小林少将も黙ってみていたわけではない、陸軍中野予備校卒業生を新規に大量配属して米田配下の物が情報を得られないように裏工作に奔走した。

関係者の口裏を合わせ、書類を隠蔽し、業者には多額の金を配って口封じをした。

永遠に続くと思われたこの諜報戦だが、小林少将が奥の手を使つた事により一挙に終結した。

参謀本部から、米田中将に対して命令書が来たのである。

銀座研究所に対する一切の諜報活動をやめるようにと。

さすがの米田中将も、これをやられてはどうしようもなかった。やむおえず部下達を撤退させ、銀座研究所を巡る諜報戦は終結した。

さて、そんな事は露知らず、長谷部達を中心とした近代兵器開発

班は順調にその任務をこなしていた。

鏡花の指揮のもと、工房ではトランジスタが次々と生産され、長谷部がそれを使った精度の高い工作機械を製造する。

その工作機械を使って、長谷部と鏡花がより安価な、高性能なモーターを作る。

その装置を大介達に解説する。

これの繰り返しによって、工房の工作機械はどんどん進化していった。

時に昭和元年5月20日、銀座研究所はついにICの製造に成功した。

ガラスによって仕切られ、そして無数のフィルターを設置した換気装置が唸りを上げる室内で、二人は飛び上がって喜びを表現していた。

「長谷部本部長、ついにやりましたね」

白衣姿の鏡花が言う。

「お疲れ様です。しかし、まさかこんな短期間でICまで漕ぎ着けるとは思いませんでしたよ」

椅子にだらしなく座りながら長谷部が答える。

「さすがは本部長ですね」

「いえいえ、鏡花さんがいてこそ出来たんですよ」

「早速レーダーに搭載しますか？」

「そうしよう。そういえば大介さん達は？」

「あちらで近接信管砲弾完成のパーティーをしています」

かなりにぎやかな研究棟を指差しながら鏡花が言う。

「それじゃあ早速ICで色々作ってみますか」

そういうと長谷部は陸上自衛隊で正式採用されている個人用通信機を取り出した。

「これくらいならば作れるでしょう」

「部品は一から作る事になりますけどね」

また工房の生産ラインを修正しなければならないのかと思うとうんざりする鏡花。

「そんな嫌そうな顔をしないで下さい。工房の生産ライン改正は当分ありませんよ。ICは当分ここでの製造となりますから」

「助かります。いちいち機械をそろえ直すのもいいかげん飽きてきましたから」

これでガン飛ばしてくる会計官とそう何度も会わなくてもいいのかと思うと救われた気持ちになる鏡花。

しかし、不意に疑問を覚える。

「それじゃあこれから電子機器はどうやって作るんです？」

「じつはね、こんな物を大佐から頂いたんだ」

懐から一枚の書類を出す。

「これは・・・工場の権利書！？」

「この間閉鎖された三菱の工場を政府が買い取ったんだけど、使用道がなくて困ってたんだって」

「しかし、これだけの工場を維持するとなるとかなりの資金がかかりますよ」

「そのためのICさ」

「というと？」

「もうすこし高集積化したICを使ってラジオを作るんだ」

「なるほど、それで得た資金を使って開発をするよ。」

しかし、トランジスタでも十分なのは・・・なるほど、真似をさせないため、ですね？」

「そう、相変わらず君は飲み込みが早いね」

うれしそうに長谷部。

本来ならば、トランジスタを強化していくだけで十分ことは足りるのである。

しかしながら、過去の技術を発展させただけのものでは、敵にい

つ応用されてしまうかわからない。

そのため、真空管↓トランジスタ↓ICという流れを理解できないように、ICを使った物を実用化するのだ。

万が一敵にそれが渡っても、真空管↓？↓謎の部品となり、それでは利用できない。

基礎部品の開発段階で敵に鹵獲されたときの事を考えるという、当時としては実に画期的な考え方であった。

「ありがとうございます。そうと決まれば早速始めましょう」

「うん」

天才肌の技術者二名にかかれば、ICの高集積化など造作もないことだった。

まあ、天才肌であるだけではなく原理を知り尽くしていると言うのもあったが。

それはとにかくとして、ICラジオの製作は快調であった。

高集積化ICの製造がはじまってから一週間後には第一号が、その翌週には量産型の増産が開始された。

しかし、規模が小さいためにそれほど数が揃えられるわけではない。

にもかかわらず、長谷部は販売を開始した。

発売から一ヶ月、朝日新聞の第一面はこうであった。

『帝國陸軍正式採用ラジオ、品薄のために更に値段高騰』

『全國に広がる販売を求む声』

政府が正式に採用した物を民間に売り出し、わざと品薄にして大衆をじらす長谷部の商法は大当たりした。

大日本重工業と名づけられた長谷部の工場の電話は連日鳴り続け、商品を求む各地の国民の声を伝えた。

初期と第二次・第三次出荷版の利益で量産したIC用工作機械をそろえた長谷部は、ようやく大規模な増産を開始した。

連日工場に材料を満載したトラックが入っていき、完成品を載せて日本各地に向かっていった。

ICラジオがそこまで大衆に受けた理由。

それはICを使用しているために従来のラジオに比べて遥かに高くなっている性能と、大量生産、流れ作業化などによるコスト削減、そして研究開発費の上乗せがなかったためである。

基本的に、先端技術という物とはにかくお金がかかる。そのため、その設備投資は初期製品の価格に上乗せされる。

そして、費用の回収とともに次第に値段は下がっていく。

ソ○ーのプレス○を見てもらえれば分かりやすいであろう。

この開発費が上乗せされないと言う事は、プレ○テが初めから20000円でデュアル○ヨックが付いているということなのだ。

売れないはずがない。

長谷部の下には莫大な額の資金が転がり込んだ。

その資金を元手に、長谷部は次の商売を考え付いた。

新型レーダーの販売である。

帝国陸軍銀座研究所との強いコネを活かし（強いも何も長谷部は銀座研究所の研究員である）新型レーダーの発注を一挙に請け負ったのだ。

このため、従来よりも12%安い値段でレーダーを開発する事が

出来、陸軍各基地に次々とリーダー設備が設けられた。

リーダーの配備と同時に、電索担当士官要請校も創設し、国からの補助金を受けつつ優秀なリーダー技師の育成に努めた。

ここまで短期間で大きな業績を納められたのは、鏡花の活躍があったからである。

経済学と経営学、心理学などで博士号を持っている彼女は、いかに労働者に負担を感じさせずにコストを削減できるかを必死に考えた。

そして、極度の自動化とそれを管理運営するための熟練工の育成に力を注いだのだ。

工業系の大学を出た学士達のエリート意識をうまく利用し、能力給で学習意欲を煽った彼女の戦略は見事に成功したのだった。

昭和元年7月11日 大日本帝国陸軍銀座研究所

さて、長谷部達が大活躍をしていた間、大介達は何をしていたのか？

当然ながら遊んでいたのではない。

長谷部から教わったICの技術を自分達で見直し、それをいかに兵器に盛り込むかを話し合っていたのだ。

「それじゃあ会議を始めるぞ」

白衣姿の大介が黒板に『電子兵器草案提議会』と書く。

「例の電索は陸軍各基地で大好評であった。今回はこれを上回る物の開発だ。各員の活発な議論を期待する」

「提案」

いきなり岡村が手をあげる。

「長谷部さんの言っていたCIWSとか言う奴を砲に転用するのはどうでしょう？」

「なるほど、レーダー連動砲か。いけそうだな、じゃあ君はその担当な」

「わかりました」

「次、自分です」

今度は斎藤が手をあげる。

「どうぞ」

「例の5121小隊のヘリコプターとか言う奴に使われている航空機用エンジン、あれの量産化をやってみたいです。」

あれくらい高性能なエンジンを使う事が出来れば、時速700キロくらいは軽く出すことが出来ますし、重装甲で大量の爆弾を積んだ爆撃機を作る事も出来ます」

「よし、任せる。俺は詳しくはわからないので、あちらさんと共同でうまい事やってくれ」

「はい」

「それじゃあ俺ですね」

柴田が立ち上がる。

「俺はトラックや戦車に使われているエンジンをやってみようと思っ
ています。あれを量産できれば、従来の戦車の数十倍もの性能を
もつ戦車が作れるかもしれません」

「任せる」

「小隊長はどうするんで？」

早くも長谷部から借りた専門書を調べ始めた岡村が尋ねる。

「俺は長谷部さん達の持っている89式とか言う小銃をどうやって
量産するかを調べてみる事にするよ」

「とかなんとか言っちゃって、もう試作第二号に入っちゃってるく
せに」

黒板を消していた柴田が茶々を入れる。

「ははは、やっぱばれてた？」

頭を掻きながら大介。

「夜中に人の宿舎に押しかけて、無理やり祝杯上げたの誰ですか？」

ジト目の柴田。

一昨日、廉価版89式小銃の試作に成功した大介は、89式とお

酒を持って夜中に柴田の部屋を強襲していたのだ。

下戸だからやめてくれと懇願する柴田に無理やり酒を飲ませた大介は、そのことをすっかり忘れていたらしい。

「そ、そんなことあったっけか？」

滝のような汗を流す大介。

「ま、いいですけどね。それより、試作第二号はどうなんですか？例の三点射撃とか言う奴は出来そうなんですか？」

三点射撃とは、その名の通り弾を三発ずつ発射する機構である。三発ずつしか出ないため、弾薬の浪費を抑える事が出来るが、その代わり機構の複雑化をまねいてしまう。

精密さを求めるあまり、値段が高騰してしまういかにも自衛隊らしい機構である。

「出来るには出来るが、あれだと整備がきつそうなんだな、連射に変えた。試作二号からは安全装置・単発・連射の、ア・タ・レでいくことにした」

「小銃だけに当たれですか。いいですね」

「でしょ？」

にこやかに大介。

89式小銃の前任者、64式小銃のことを知る自衛隊員たちが聞いたら、その偶然に啞然としていたであろう。

なぜなら、64式小銃も安全装置・単発・連射のアタレとなっていたからである。

「あれ？ 5. 56mm弾は出来たんですか？」

不思議そうに斎藤が言う。

それを聞いた研究員達があきれたような目で彼を見る。

「先週できたってみんなで飲みにいったろ？」

岡村が言う。

「そうでしたっけ？」

あれ？という感じで斎藤が言う。

「さて諸君！研究に取り掛かりましょう！！」

「了解！！」

ボケた斎藤を置いて、研究員達は各々の仕事に取り掛かった。

兵器開発が順調に進んでいる事を祝福するかのように夏の日差しが降り注ぐ空港に、一組の夫婦が降り立った。

青年の方は帝國海軍の正装に身を包み、女性の方は青を基調とした薄手のワンピースを着ていた。

「ここが貴公の生まれ育った国、日本か」

女性が、実に感慨深そうに言う。

「ブルーメール家を捨てて、本当に良かったのかい？」

青年が不安そうに言う。

「何を言うか！・・・それとも、貴公は私と共にいるのが嫌なのか？」

女性が潤んだ瞳を青年に向ける。

首を振った拍子に、豪華な金髪がふわりと揺れる。

「そんな事はないさ！ただ、君がなんとなく不安そうだったから、つい、な」

必死の形相でそれを否定する青年。

海軍士官らしい、実に歯切れの良い発音と、実直そうな顔立ちのおかげで、それは一点の疑いも持てそうにないものだった。

「不安？不安であるはずがなろう」

当然のように言い切る女性。

欧州人らしい、実にくつきりとした顔立ちと、妙に気品のある振る舞いが、女性の言葉を更に強調させる。

「本当に？」

「ああ・・・」

そこで女性の声音は一気に小さく、そして優しくなる。
一拍置いた後、彼女は言った。

「貴公が、いるからな」

下を向き、真っ赤になる。

二人の間に沈黙が流れるが、次の瞬間、二人はお互いの名を呼びながら抱き合った。

「グリシーヌ！」 「大神！！」

改めて愛を確認した二人を祝福するかのようになり、太陽が空に輝いていた。

第七話『大日本重工業』

昭和元年8月20日八王子郊外 大日本重工業本社

5月20日にICの製造に成功して以来、銀座研究所はICを利用した電子兵器開発に加え、戦車と航空機用エンジンの開発にも着手した。

いくら長谷部が万能とはいえ、さすがにエンジンまでは専門外だった為の開発初期はまったく方向性が定まらなかった新型エンジン開発計画だが、5121小隊整備班や一緒に来ていた戦車兵やヘリ隊員の協力を得てからはとんとん拍子に進みだした。

現在所有している戦車のエンジンに使われている材料を作り出すのに10日。

エンジン各部品用専用電子制御式工作機械の試作型製造に17日かかった。

原主任を中心とした5121小隊整備班は、実に良く働いた。

陸軍中から集められた若手の設計技師達に連日交代で原理の説明を行い、現代の技術を伝えるという難解な任務をこなし続けた。

馬力を出すためにはどうしたら効率が良いか？高圧に耐えうるエンジン材質とはどんな物か？燃費を節約しつつ高出力を出す事が出来るエンジンを作るには？

学校で習った事、整備を通して学んだ事、知ってる限りの知識を惜しげなく披露する原達に感銘を受けた設計技師達は、その全てを記憶すると言う方法でそれに答えた。

平成と昭和の技術者達による時代を超えた二人三脚の努力は、試作の工作機械完成から5日経った7月1日、大日本重工業第一工作

機械試験場で実を結んだ。

「空冷2サイクル10気筒ディーゼル、720馬力。我が帝國が世界に誇る事が出来るエンジンです」

エンジンが轟音を立てている試験室からガラスを隔てたところにある見学室に訪れた陸軍佐官達を前に、柴田が誇らしげに説明をしている。

「現在世界に存在するありとあらゆるエンジンの遙か上を行く性能でありながら、新機軸をふんだんに盛り込んでいるために燃費も良好です。」

また、35t前後の戦車でも、最高時速50km前後を出す事も出来ます」

その言葉にどよめきが生まれる。

この時代、時速50kmをだす乗り物といったら、何もない直線道路で全力疾走をした自動車か機関車くらいである。

もし、戦場を時速50kmで戦車が疾走したらどうなるか？
ましてや35tのが、である。

野砲ですら涼しい顔で跳ね返しながら野砲並の主砲を撃ち、搭載した数門の機関銃で敵兵をなぎ倒す……

考えただけでも武者震いが起きる。

「資金や材料調達ならば可能な限り協力させていただきます！」

若い少佐が叫ぶ。

その言葉の裏には、開発に貢献した自分達にそれを優先的に回して欲しいと言う本音が隠されている。

壁際に立ってその様子を見ていた佐藤大佐は、にやりと笑い「協

力に感謝する」と言う。

その様子に触発された他の中佐が叫ぶ。

「こちらも資金を出します！材料は製鉄所から良質の鉄をまわしてもらえるように交渉します！」

「悪いな」

再びニヤリと笑いながら大佐が言う。

「私達も資金ならば！」

首都を預かる第一師団の青年将校が叫ぶ。

「材料ならばお任せを！」

「資金ならば幾らでも！！！」

たちまち見学室の中は協力を申し出る佐官達の声で満たされた。

見学室での一件以来、柴田主導による『新型エンジン開発計画』は『新型戦車開発計画』に姿を変えた。

計画の指導者は柴田から長谷部に移り、ノートパソコンから取り出した74式戦車の設計図を元に、74式改め零式重戦車の設計手直しと試作が開始された。

設計図があることから、試作はすぐさま行われた。

先を見越した長谷部の指示により既に準備されていた74式のパーツが次々と銀座研究所に運び込まれ、横浜の造船所から派遣され

た一流の溶接技師達によって組み立てが始まった。

「見事な物ですなあ」

主砲である105mm砲が取り付けられようとしている零式重戦車を見ながら佐藤大佐が言う。

「ありがとうございます。これもひとえに大佐殿のお力があってこそです」

大佐の横に立っていた長谷部が言う。

「それもあるがな、貴様の能力がなければここまではいかんだろう？」

「まあ、それもないわけではありませんがね。ところで大佐、朝から岡村さんと斎藤さんを見ないんですか・・・」

「ああ、あいつらなら確かどこかに行くとか言ってたぞ、どこだったか忘れたが、俺の部屋に外出許可書がある、探させるか？」

「いえ、用事があるのなら仕方ありません」

「貴様も用事があるんじゃないのか？」

「いえ、こっちの研究が一段落したので、どちらかのお手伝いでもしようかと思ひまして」

「結構なことだ、まあ帰ってきてからにでもしろ」

「はい」

そこで急に大佐は笑顔になって言う。

「時に長谷部くん」

「はい」

「酒はのめるかね？」

「まあたしなむ程度なら、ですが」

「よし、それでは早速飲みにいこう！ウォッカとかいうアメリカの酒が手に入ってな、これが結構いけるんだ！！」

「わかりました、早速行きましょう！」

それはロシアのじゃないのか？と心の中で指摘しつつも喜んで答える長谷部。

たしなむ程度と言いつつ、彼は重度のアルコール好きであった。

「よし、せっかくだから他の研究員も参加させよう、長谷部くん、至急全員を会議室へ」

「了解しました」

「あ、衛兵司令も連れて来い。あいつが酔っ払ったところも見てみたい」

「はっ」

こうして、研究員達は憲兵隊長も連れて会議室へと消えていき、この研究所から責任者と呼べるものはいなくなった。

そして、そんな時に限り、厄介ごとは発生するのである。

全ての研究員と〇〇長と付く人間が会議室で酒宴を行っているころ、帰国した大神中尉は米田中將の付き人として銀座研究所を目指していた。

先日行われた佐官級による会合で広まった35t戦車の真意を探るためである。

公用車には大神と運転手の少尉、そして米田が乗っていた。

「本当に時速50kmで爆走する35t戦車なんていうものが作れるんでしょうか？」

後部座席に座っている米田中將に大神が言う。

「理屈の上じゃ出来るらしいと紅蘭が言っていたぞ。もっとも、そのためには700馬力以上出せないといかんらしいがな」

米田が答える。

今日の格好は155mm砲の試射を見学した時と同じ中將の正装である。

「と言う事は、彼らはそれだけの馬力を出せるエンジンを開発したということになりますね」

「ああ、だがよお大神」

「はい」

「それだけの出力を出せるエンジンとなると、小型化にもそれ相応の技術が必要だ。しかし紅蘭はそんな技術は帝國どころか世界のどこにもないっていいやがる」

そこで米田は声のトーンを落とす。

「少なくとも、この世界には」

「どういう意味で・・・」

「どういう意味です？　というとした大神の前に一枚の写真が突き出される。」

「これは？」

「見てみな」

渡された写真を見してみる。

そこには、上部に天幕が張られた状態で整備されている巨大な戦車と上にプロペラがついた見たこともない物が写っていた。

「これはなんなんですか？」

不審げな顔をしながら大神が言う。

「加山の奴に写真を撮って来いといったらな、こいつを送ってきた。戦車の横にあるのは『せんとうへり』という物らしい。どういう

物かまでは分からなかったらしいが『たいせんしゃみさい』とやらが主兵装らしい。

フランスでこういったものについて聞いたことはあるか？」

「いいえ、残念ながら」

写真に写る『せんとうへり』を見ながら大神が答える。

航空機開発がようやく成長期に入ろうとしているこの時代にヘリコプターなどというものは概念すら存在していない。

「だろうな……ここから先は独り言になる」

つまり、大神は米田の独り言を偶然聞いたのであって、決して米田が故意に大神に教えたのではない、ということである。

古くから上官が信頼する部下に軍機を漏らす常套手段となっている手法である。

「もう暫くになるが、九十九里で銀座研究所が作ったという大型砲の試射があった」

「銀座研究所というと、今から向かう先の？」

「そうだ。偶然日露戦争の時の部下が誘ってきてな、行く事になったんだ。

着いてみると、陸軍の各師団や旅団、大隊なんかから佐官が集まっててよ、俺が着くと早速試射が始まったんだ」

「どんな砲だったんです？」

砲に興味がわいた大神が尋ねる。

「確か155mmだ」

「ひゃ、155mm！？またずいぶんどでかいですね」

「ああ、結果は大成功。三門の砲から放たれた砲弾は、正確に標的の廃棄漁船を捉えて粉碎した。こいつはそのとき現場にいた研究員だ」

次の写真を大神に渡す米田。

そこには何かを嫌がるような表情の鏡花に見られている長谷部が写っていた。

「この人は？」

「長谷部とかいう研究員だそうだ」

「だそうだって、違うんですか？」

「銀座研究所の佐藤大佐が言うにはそうらしい。だが、詳細は不明だ」

「詳細は不明って、人事部に行けば……」

「おめえが帰国したころな、いろいろと探らせてはいたんだが、全て失敗に終わっていたんだよ。」

何しろ、銀座研究所に関係したものは、一兵卒や業者の家族さえもが口をつぐみ、書類に到っては近くの商店の領収書さえもが軍機になっていたからな。

しまいにや参謀本部から命令書が来た。これ以上銀座研究所に無

用の警戒心を抱き、いたずらに軍内部の秩序を乱さぬようにな」

「それは・・・怪しすぎますね」

左手で写真を持ち、右手で顎をなぞりながら大神が唸る。

そこまで過剰な防諜体制と、あからさまな警告を行う理由がわからない。

「そこで直接訪問を？」

「そうだ、幾らなんでも俺の直接の訪問を追い返すほどの度胸はあるまい」

にやりとしながら米田。

「考えましたね支配人」

「まあな」

二人がニヤニヤしていると、運転手が告げた。

「見えてきました、銀座研究所です」

大神達の乗る公用車が銀座研究所に近づいてきたころ、朝から出かけていた岡村と斎藤は完成した零式重戦車の前にいた。

近くでは仕事を終えた溶接技師達がタバコを吸っている。

「たいしたもんだな」

黒光りする105mm砲を見ながら岡村が言う。

この時代に最新型野砲にも匹敵する主砲は見るものに多大な威圧感を与える。

「これだけの大きさ、これだけの重量にも関わらず時速50kmも出るって言うんだから驚きですよね」

装甲をなでながら斎藤。

「しかも105mm砲を余裕で跳ね返すって代物らしいじゃないか。これが一個師団分揃えばどこの国にでも勝てるぞ」

「そうですね」

「これと155mm砲、それに今作ってる零戦一型が出来れば、皇国の勝利は疑い無いな」

「そんなに強いのかい、この戦車は？」

突然後ろから声がする。

「誰だ!？」

聞きなれない声に振り向くと、そこには大神と米田、運転手兼雑用の少尉が立っていた。

「あんた達誰だ?どこから…….けっ、敬礼!!!」

問いただそうとして、米田の服装に気がついた岡村が慌てて敬礼

をする。

それに気がついた斎藤も敬礼をする。

「ちゅ、中将閣下。本日はどういったご用向きで？」

「視察だよ、こいつの質問に答えてやってくれ」

反応の変化を楽しみつつ米田が説明を促す。

「し、しかしこれは軍機でして・・・」

防諜規則を思い出しながら斎藤が言う。

「規則を守って俺に首にされるのと、秘密厳守を約束する俺に説明するのとどっちがいい？」

首は真っ平だが、規則を破っても良いわけが無い。

規則や法律に例外はあってはならない。相手が例え中将閣下であってもだ。

しかし、職を失うわけにはいかない。

実際には、人事部に対する米田の発言力などたかが知れているし、小林少将や佐藤大佐がそんなことは絶対にさせないのだが、一介の研究者である斎藤や岡村にはそんな事は分からない。

分かるのは、目の前にいる中将を怒らせるのは、防諜規則を破る事よりも恐ろしいかもしれないと言う事だ。

規則を破った事はばれないかもしれない。米田中将やその隣にいる少尉、海軍軍人から漏れなければ。

だが、ひとたび中将を怒らせたならそこまでだ。下手をすれば『行方不明』にもなりかねない。

結局、気を利かせた工員達の退去も手伝って、岡村達は零式重戦

車の説明を始めた。

「この零式重戦車は、主砲として105mm砲を搭載しています。最高時速は・・・」

「105mm砲だって!？」

説明を始めた岡村を少尉が遮る。

かなり不快そうな顔で少尉を睨む岡村と斎藤。

ほとんど脅迫されての説明であるのに、よりによって出だしから邪魔をされたのがよっぽど頭に來たらしい。

「あ、す、すいません」

場に流れた険悪すぎるムードに気がついた少尉が謝る。

「説明を続けます。」

最高時速は約50km。総重量はおよそ39t。

同軸機銃一門、更に対空用として12.7mm機関銃一門を搭載しています。

105mm砲の直撃に耐えうる装甲を持ち、水深2m以上の渡河能力と自動発射式の煙幕弾六発も搭載しています。

通信機も当然ながら載せている我が軍の次期主力戦車です」

「その性能、どこまで本当なんだ？」

研究者の前では禁句といってもいい言葉を少尉が言う。

信じられないのも無理は無い、そんなもの作れるはずがない。

苦笑しつつ「実際のところは……」と言い出すのを待っていた米

田御一行は、怒りをあらわにした斎藤と岡村をみて押し黙った。

「失礼を承知で申し上げます」

少尉を睨み付けながら斎藤が言う。

「こちらの話を聞くつもりが無いのでしたら、即刻この研究所から退去してください」

明らかに怒っているその口調からこれ以上の情報は得られないと判断した米田は撤退を指示した。

「大神、ここは一度帰ろう」

「そうですね」

ひとまず考えなしの少尉を追い出して、誰かもっとましな人物を連れてこようと思いつきながら大神が答える。

「分かりました」

そ知らぬ顔で少尉言々と、三人は車の方へと引き返していった。

「あいつら、ふざけてるのにもほどがある」

走り去っていく公用車を睨みつけながら岡村が言う。

「しかしいいんですかね？あそこまで露骨な態度を示して」

不安そうに斎藤。

「いいんだよ」

いつのまにか現れた佐藤大佐が言う。
めちやくちや酒くさい。

「大佐、いつのまに？」

「今来た」

「大丈夫なんですか？ 相手は中将ですよ？」

斎藤の不安はなかなか消えない。

「あの失礼な少尉のおかげで、米田のジジイはこれからここへ来づらくなる」

酔っている割には真面目な顔をして大佐が言う。

「確かに・・・・・・・・まさか！」

頷いた斎藤が、はっと顔を上げ、佐藤の方を見る。

「そう、あの失礼な少尉は俺の部下だ」

「なるほど、中将の来訪を予測して、先手を打ったわけですね」

「ああ」

手にもったウォッカを飲みながら大佐が答える。

「よし、納得したところで酒だあ！」

ビンを振り上げた大佐が叫んだ。

数日後、大日本重工八王子本社の長谷部の卓上電話が鳴る。

「はい長谷部です」

「私だ」

「あ、これは大佐殿。どうしました？」

「発注していた小銃はどうなった？」

大日本重工は、従来のICラジオと軍用レーザー本体や部品に加えて、5.56mm弾や零式小銃（廉価版89式小銃）を製造しました。

これにより資金的余裕が出来た長谷部は、現在ある工場の隣に更に大きな第二工場を作らせていた。

「銃弾は、第一師団各部隊に配備する分は来週中には出来ます。

小銃の方なのですが、現在工作機械の量産に入りましたので、来週末か再来週の頭には生産数を倍に出来ます。どちらも納期には必ず間に合いますので、ご安心下さい」

「任せる」

「はい」

「戦車の製造は、第二工場が出来てからだよね？」

「はい。さすがに戦車は専用工場で無いと作れませんから」

「まあ、そこら辺も任せる」

「はい」

「ところで、今日電話したのは確認のためだけじゃない。実はな、ウチの研究員達が工場の一部を使わせて欲しいらしい。何とかならんか？」

「工場の一部ですか？いいですよ」

一瞬の間もおかずに答える長谷部。

それを聞いた鏡花は、工場の東側にかなり空きスペースがあるのを思い出す。

新型の工作機械が出来たらそこを使うのであろうと思っていた鏡花は、あらかじめこうなる事をわかってこういう配置にしたことを悟り、やはり長谷部は凄いと思う。

「悪いな」

「いえいえ、偶然工場に空きがあっただけですよ。それで、大介さん達は明日にでも来られるんですか？」

「ああ、明日朝一番でそちらに向かわせる事になっている。ナント

カ連動砲がどうか言っていたな、わかるか？」

「はい、大体予想はつきました。それではまだ整理しなくてはいいけない書類があるのでこれで」

「ああ」

翌朝、大介達が持ってきたレーダー連動砲や1200馬力航空機用エンジンの設計図を見た長谷部は、自分達の行った事が予想以上の成果をあげていることに大いに喜んだ。

長谷部達による日本の技術力底上げは、予想外の急成長を見せ始めていた・・・・・・

第八話『零式戦闘機』

米田中将たちが佐藤大佐の策略によって銀座研究所を追いつけられ、それから数日後、長谷部の元を訪れた斎藤と岡村は、それぞれが考案した開発プランを携えていた。

岡村は海上自衛隊で使われていたCIWSをヒントにした『レーダー連動式対空高射砲』。

斎藤は製造だけは決定されている『零式戦闘機』用の発動機『誉一型（1200馬力）』である。

挨拶もそこそこに長谷部に自分達の開発プランを見せ、是非を問う。

二枚同時に設計図を渡された長谷部は、まず最初に斎藤のプランを見た。

「却下」

タイトルを見た長谷部は、いきなりそう言い放った。

「な、何ですか？」

あまりの素っ気無さに驚きながら斎藤が詰め寄る。

「三日も徹夜して書き上げた自信作です。1200馬力を問題なく出せる上に燃費や強度も問題ありません！更に丸一日かかって再計算や見直しを行いましたから、ミスがあるとも思えません！！」

しかし、長谷部は斎藤の主張を黙って聞いているだけだ。

「一体どこに問題があるんだ？」

横から見ている岡村が口を挟む。

「出力不足です」

再び、長谷部が口を開く。

またしても素っ気無い。

「出力不足、ですか？1200馬力もあるのに？」

「はい、せめてあと200・・・いや、300馬力は必要です」

「ま、待ってくださいよ。あと300馬力っていったら1500馬力ですよ？そこまで高出力な物となると、かなりの大きさになってしまいます。

それに実戦に耐えうる強度を持たせるとなると・・・」

文句を言おうとする斎藤を、長谷部は手で制した。

「斎藤さん、無理なことを可能にするのが我々技術者の仕事です」

斎藤が反論する。

「それは分かっています。ですが、技術者といえども魔法使いではありません。不可能な事は出来ません」

「もっともです。しかし、我々の世界では現に出来ています」

「それは未来だから・・・」

「柴田さんは、強固で大出力、かつ燃費に優れながらも小型で軽量の戦車用エンジンの開発に成功しました。

それに未来といわれましたが、貴方も技術指導は受けている筈です」

「それはそうですが・・・」

「それならば頑張ってください」

これ以上話す事は無いというように設計図を斎藤に戻す長谷部。受け取った斎藤は何か言いたげであったが、あきらめたように引き下がった。

「次に岡村さん。レーザー連動砲についてですが、問題ありません。早速連動高射砲の試作に入ってください。施設はウチの第弐工場の余剰スペースをどうぞ」

「ありがとうございます」

「それではお二方とも頑張ってください」

長谷部がそう言うと、入り口付近に席がある鏡花が扉を開く。早い話が出て行けということだ。

「斎藤さん」

斎藤が退室しようとする、長谷部が声を掛けた。

「なんででしょう？」

少し不満げな口調で斎藤が答える。

さすがに自分の案があっさり没になるといふのは技術者として納得がいかなかったようだ。

「一つ、覚えておいてください」

「何をですか？」

かなり乱暴な発音で尋ねた斎藤に、長谷部は静かに答えた。

「我々技術者が一つ妥協をするという事は、その分戦場で大勢の兵士が死んでいく、という事をです。兵器開発を行う上で、この事は、常に忘れないで下さい」

つまり、コスト面から装甲を削る、あるいは時間的制約から馬力を減らすなど、何かしら妥協を行うという事は、その妥協によって生まれた弱点によって兵士が余計に傷つくということだ。

最も、それは兵器開発に限らず、何かを作る上で一番の基本である。

常に十分な時間と予算が用意されるわけではないにしても、与えられた条件の中でこれ以上は無いものを作るのが技術者の仕事であり、使命である。

「・・・わかりました」

それだけいうと、斎藤達は部屋を出た。

後日、斎藤から出された第二案は『1800馬力航空機用発動機』であった。

それをみた長谷部は笑顔でGOサインを出した。

昭和2年1月1日 大日本重工八王子本社

政府の資金援助を受け、八王子郊外の山間に設けられた大日本重工業八王子本社。

数十ヘクタールを誇る広大な敷地の中には、電子機器を中心に製造する第壱工場、零式重戦車及び零式小銃など、兵器を中心に製造する第貳工場。

そして、完成した兵器を一時的に収納するための倉庫群や、それらを管理する管理棟などが存在している。

管理棟前には、建設時に作業員が寝泊りしたバラックや資材置き場などを撤去したために出来た広い空き地があるのだが、今そこには、25両の零式重戦車が並べられている。

「人間やれば出来るもんですなあ」

第貳工場と第壱工場の間にある管理棟の窓からそれを見下ろしつつ山口が言う。

「まあ、『人間やって出来ない事は無い』と言いますからね」

元旦だというのに、白衣姿でなにやら難しい計算をしている長谷部が答える。

ガラスで仕切られた向こう側のオフィスでは、大介をはじめとした研究者達が忙しそうに走り回っている。

どうやら、ここには元旦を楽しもうという人間はいないらしい。

「そういえば、以前からここを警備していた憲兵隊の一部が帰還し

て、かわりに山口さんたちが来る事になったそうじゃないですか」

「そうなんですよ、長谷部さんや5121小隊の人たちがこっちに移ったのに、我々だけがここに残る必要は無いだろうって大佐が手を回してくれました」

「厄介払いかもしれませんね」

コーヒーを持ってきた鏡花が会話に参加する。

コーヒーを二人に渡すと、部屋の入口の近くにある自分の席に座る。

「長谷部技監。昨年から続けていたパソコン開発の件ですが、以前報告したCDに加え、ブラウン管の小型化に成功しました。」

またCPUを初めとした精密部品の限定製造を始めます。

当面は精度向上に時間を割かれると思われますが、遅くとも今年の夏までにはペンティアム？に匹敵する物を用意できると思います」

「ご苦労様です。OSはどうです？」

「技監のノートパソコンに搭載されていたのをそのまま流用という形になりそうです。ワードやエクセルなどもです」

「まあいいでしょう、ミスターゲイツの部下がこの時代まで追いかけてくるはずが無いですからね」

言いつつコーヒーを飲む。

一口飲むと同時に、口の中にコーヒーの香りが流れ込んでくる。

「うーん、やっぱり鏡花くんのコーヒーはおいしいね」

満足そうに微笑みながら長谷部が言う。

「技監にそう言って頂けると光栄です」

本当にうれしそうに鏡花が言う。

こうして見ていると、外見にあった『女の子』なんだがなあ、と、鏡花には聞こえないように呟く。

「技監、何か言いました？」

「いいえ？」

おもいっきりすつとぼけた顔をする長谷部。

それを見た山口は、長谷部が28歳という若さで技本の本部長に抜擢されてもおかしくは無いなと変なところで納得する。

「それと、昨年より行っているゼロ戦開発計画ですが、すでに試作一号機がロールアウトしました。」

陸軍航空隊より譲渡された基地航空隊三名及び整備班を早速専属に指定し、詳細なデータの収集に当たります。恐らくは今月末には小規模な増産体勢に移れるはずです」

「ご苦労様です。ゼロ戦開発計画は、我々日本人の意地がかかっています。最大限の努力をするように厳命しておいてください」

「わかりました」

「あと、人形峠の件なのですが、純度の高い物を生成しだい第八倉庫に輸送させています。ご命令があればいつでも製造できますが・・

・
」

「それに関しては、もう少し電子関連技術が向上してからにしましょう。どうせならば可能な限り高性能な物を使いたいですから」

「分かりました」

「ところで、厄介払いといいますと？」

地名以外は具体的な名前を一切出さない報告に自分の分を越えた物を微妙に感じ取った山口が話題を変える。

「我々を巡って米田という中将と佐藤大佐がもめていたのは前にお話しましたよね？」

「ああ」

「参謀本部に頼み込んで出してもらった命令書によって、中将はいったんあきらめたんですが、どうも最近また始めたみたいなんです」

コーヒーを飲みながら長谷部。

「昨年12月の警備報告によると、非常扉8箇所、明り取り窓3箇所で鍵の破損が発見されました。明らかに人為的なものだそうです。それと、資料荒らしの痕跡が何度か確認されています。それなりに技能のある人間の仕業と見て間違えありません」

「それと、こちらの世界の兵器の資料がいくつか紛失しています。ま、こんなものいくら盗まれても困りませんけどね」

試作の自分用パソコンを起動させながら鏡花。

「研究成果は私と長谷部技監がパソコンに記録していますから技術資料が流れる恐れはありません。」

銀座研究所との交信に使っている無線はデジタルなので盗聴の恐れはありませんし、電話では重要な話題は話しませんから外部への機密の流出は起こりえません」

「なるほど、それなら防諜に関しての懸念は無いわけですね？」

「はい。ここの研究者の皆さんは非常に協力的ですから、情報の横流しなどという事は起こらないでしょうし、そうならないように、防諜の専門家を十数名配置しています」

「それならば問題は無いですね。しかしパソコンですか、我々の装備が調達できるようになるのも近いですね」

腰に下げた九mm機関拳銃をさすりながら山口が言う。

「5. 56mm NATO弾や89式小銃、74式戦車なんかは既に生産ラインが確立するまでになっているんですがね、さすがに電子装備を用いる兵器となりますとね。」

一から用意してやらないといけないですからどうしても時間がかかってしまいますね。

ま、焦らずじっくり行きましょう。既に高集積ICやクリーンルームの初歩などは出来上がっているんです、直ぐに平成と変わらぬ物をご用意しますよ」

「期待してますよ技監殿。さて、私は憲兵隊の皆さんに夜間歩哨の基礎でも教えてきますよ」

「お願いします。不審者は直ぐに無線で報告し、ばれないように包囲するよう、厳命して置いてくださいね」

「わかってますよ。ああそう、暗視ゴーグルの開発も忘れずにしておいてくださいよ」

「わかっていますよ」

にこやかに言う長谷部に手を振りながら山口は部屋を出て行った。

昭和2年2月にはいると、新型の航空機用エンジンである『誉一型』を装備した最新鋭戦闘機『零式戦闘機』は試作段階を終えて小規模な増産体勢に移っていた。

増加する航空機を運用するために、専用の格納庫や管制室、滑走路などが新たに建設された。

また、各地の陸軍航空隊から新たに大量の要員を獲得し、来るべき全国一斉配備に備えさせた。

「これが零式戦闘機です」

格納庫に収納されているゼロ戦の写真を見せるスーツ姿の男。照明を弱めている室内は、夕方である事も手伝って非常に薄暗い。

「全長は9.1m。全幅は12mあります」

「馬力は？」

執務デスクに陣取った男が尋ねる。

「1800馬力です」

「1800！？そんな高出力が出せるのか！その『誉一型』とかいう発動機は」

「そのようで」

「どれくれえ遠くまで飛べるんだこいつは？」

「およそ2500kmです。両翼に落下式増槽を付けた場合の航続距離は5000kmだとか」

「な、ななせんにひゃく・・・」

あまりに信じられない数値に思考がついていけない。

「しかし落下式増槽などというものまで開発するとは・・・どうも大日本重工は怪しいですな」

執務デスクの男が未だに再起動に苦戦している事に気がつかないスーツの男。

「武装は12.7mm機銃二門です・・・って聞いてます？」

なにやら考え込んだ様子のデスクの男に、スーツの男が尋ねる。

「こいつは一体なんだ？」

指差された写真には、輸送用トレーラーから整備テントに移動しようとしている士魂号が映っていた。

「さあ？どの作業員に聞いても知らない上に、正体がばれそうになったもので、写真を撮るのが精一杯でした」

「そうか・・・こいつ、脇侍や降魔とは似てもつかねえが、なんかひっかかるな。いちゃもんつけてひっぱってけねえか？」

写真を見ながらぼそりと呟く。

「・・・よし、第一師団から何個小隊か借りていく。早速準備に取り掛かる。大神達も用意させてくれ」

「わかりました」

スーツの男は一礼すると、部屋を出て行った。

第九話『零式重戦車』

昭和2年1月2日 AM2…40 大日本重工業八王子本社正門

正門横の詰め所で若い憲兵達が談話している。

全員自衛隊採用の迷彩服に身を包み、零式小銃と9mm機関拳銃を身につけている。

8畳ほどの部屋の中は3つの電灯によって明るく照らされ、常に受信状態にしてある通信機が低い音を出している。

「お前あの新型戦車みたか？」

ここの責任者である若い憲兵中尉が椅子に座りながら言う。

「ええと、零式重戦車ですよね？」

机を挟んで反対側に座っていた兵士が答える。

「そう、それぞれ。

いやゝ試験運用課の連中に頼んで乗せてもらったんだけどよ、凄いのなんのって、時速50kmは伊達じゃないな。

それにあの主砲！105mmだぜ？陸軍で使ってる野砲よりでかいってんだから驚きだよ」

「羨ましいです、自分も乗りたいであります」

「そのうち頼んでやるよ」

「ありがとうございます」

憲兵が頭を下げると同時に無線機が受信を知らせる。
直ちに近くにいたほかの憲兵が受話器を取る。

「正門横詰め所であります」

<私だ>

相手は佐藤大佐であった。

「たっ大佐殿!!」

思わず直立不動の姿勢をとる憲兵。

<まもなく“お客”が見える。抵抗せずに大人しく入場させろ>

「はっ！わかりました!!」

<以上だ>

用件だけ伝えると、大佐はさっさと通信を切ってしまった。

「どうした？」

通信を受けた憲兵に中尉が尋ねる。

「佐藤大佐殿です。まもなく“お客”が来るが抵抗はせずに入場させるようにとのことであります」

「そうか、それでは一応臨戦態勢だけはとっておこう。総員配置につけ！」

「はっ!!」

中尉が命令を出すと、憲兵達は各々の持ち場へと駆け足で走っていった。

「まもなく正門ですが、どうしますか？強行しますか？」

助手席で拳銃に弾が入っていることを確認しながら中年の中隊長が尋ねる。

「まあまて、相手方の出方を見るほうが先だ。それに、強行したところはこちらに勝ち目は薄いぞ。なにせ相手には戦車が腐るほどあるんだからな」

正装に身を包んだ米田帝國陸軍中將が静かに言う。

「はっ」

「見えてきました、正門で・・・」

運転手が正門が見えたことを告げようとした瞬間、詰め所の上にある監視塔からサーチライトが当てられた。

あまりの眩しさに運転手が車を止めると、後続の輸送車も次々に停車した。

＜こちらは東京憲兵隊だ。そちらの所属と目的を知らせよ＞

拡声器で増幅された憲兵の声があたりに響き渡る。

眩しさに目を細めながら正門をみると、頑丈そうな門はしっかりと閉じられ、随所に土嚢が詰まれた上に明らかに頑丈に作られている詰め所の窓からこちらを狙っている憲兵達の姿が見える。

「中将閣下、いかがいたしますか？」

不安そうに中隊長が尋ねる。

「兵はまだ降車させるな。ここで銃撃戦を起こしても意味が無い。俺が向こうの憲兵と話をつけてくるからそこで待ってな」

そういつて車から降りる。

「い、いえ、自分もお供させていただきます」

幾らなんでも中将を一人で行かせるわけにもいかないので、中隊長も一緒に降りる。

その間に詰め所の横まで歩いていった米田は、年季を感じさせる大声を張り上げた。

「帝國陸軍中将米田だ！！この施設に帝都の平穩を脅かす恐れのあるものが隠されているという情報を得た。ただいまより強制捜査に入る！！」

中隊長に向かって兵を降ろすようにジェスチャーをする。

「総員降車！！整列！！」

トラックから次々に兵士達が下車し、中隊長の後ろで整列する。

「邪魔立てする奴は容赦しねえぞ！！」

更に気迫を込めて米田が叫ぶ。

実際には米田の独断で勝手に押しにかけているだけなのだが、年季を感じさせる気迫で叫ばれると正規の命令に基づくものなのかと思ってしまう。

「直ぐに門をあけねえか！！」

「分かりました」

あっさりと了承する中尉。

「へ？」

予想外の展開に目が点になる米田。

「大佐から話は通っています。どうぞお通り下さい」

「お、おう。わりいな」

首をかしげながら車に戻る米田。

中隊長に直ぐに部隊を車に乗せるように言う。

「しかしいいんですしょうか？」

管理棟へ向けて走り去っていく米田達一行を見送りながら若い憲兵が言う。

「大佐殿が通せて言うんだからいいんだよ」

詰め所に戻りながら中尉が答える。

「俺達の仕事は命令どおりに働く事だ。大佐殿は大佐殿の思惑があってご命令を下されたわけなのだから、貴様ごときがいちいち考えんでもいい」

「はっ！失礼致しました」

敬礼をする若い憲兵。

「わかったら本部に連絡しろ」

「はっ」

連絡を受け取った本部は直ちに警戒態勢へと移行した。

管理棟正面玄関前に零式重戦車が2両停車し、主砲に砲弾を装填する。

管理棟屋上にある機関銃座に兵士達が飛びつき、12.7mm機銃に弾倉を装着する。

サーチライトが次々と灯され、第壹第式工場と管理棟の周辺を明るく照らしだす。

「大佐殿、総員戦闘配置につきました」

憲兵隊長が椅子にふんぞり返っている佐藤大佐に報告する。

「よし、来ても撃たないように言っておけ。中村ア！」

佐藤が叫ぶと、中村伍長が慌てて横にやってくる。

中村が横にきたのを見ると、佐藤は高そうな葉巻を取り出した。

「・・・このボケェ！！」

一瞬の間の後、佐藤はいきなり中村を殴り飛ばした。

殴り飛ばされた中村は、何が起きたのかを察知する暇も無く床に倒れ伏す。

「い、いてえ、大佐殿！ いったいなにを・・・」

口答えしようとした中村の後頭部を大佐のブーツが押さえつける。

「俺が葉巻を出したら直ぐに火を出せと云っただろうが！！ まだわからんのか！？」

言いながらも中村の後頭部を踏みつける。

「大佐殿、“お客”はまもなく正面玄関前に到着する模様です」

通信士が言う。

「よし、ライトを当てて威嚇するように言え。だが、絶対に発砲させるな」

「はっ」

「か、閣下！戦車です！戦車があります！！」

正面玄関前に展開している零式重戦車2両を発見した中隊長が騒ぐ。

「落ち着け！いいからそのまま前進しろ。どうせ撃ってはこない！」

鋭く一喝する米田。

陸軍中将の自分が指揮する部隊目掛けての砲撃など、威嚇であってもするはずがない。

「は、はい！」

戦車に怯えつつも、米田の鋭い一喝に勇気づけられた一等兵がアクセルを踏み、いったん減速した先頭車両はそのまま正面玄関前に布陣している戦車の前まで進んでいった。

玄関前で停車すると、直ぐに後続のトラックから兵士達が下車し、正門の時と同じように整列する。

「一体これは何の騒ぎなんですか？」

自分のオフィスから表の騒ぎを目撃した長谷部が玄関から飛び出してくる。

その横には、いつのまにか迷彩服を身につけている鏡花もいる。

「おめえは確か長谷部研究員だな」

先頭車両から降りつつ米田が言う。

「貴方は確か帝國陸軍の米田中将閣下ですね？」

さりげなく腰につけたホルスターに手をやりながら鏡花が言う。

「中将？将官殿がこんな夜更けに何のようなんですか？」

研究所に対する一連のスパイ行為の親玉と思われる人物を前に長谷部も緊張する。

「ご存知の通り、ここは皇軍に兵器を卸させて頂いている民間の企業です。わざわざこのような事をせずとも・・・」

「能書きはいい」

長谷部の言葉を遮る米田。

「ここに帝都の安全を脅かす兵器が隠されているという情報が入った。今から俺の部下達がここを調べる。邪魔立てする気なら逮捕する。」

さあ、これがあるところまで案内してもらおうか？」

米田は、キャリアーから整備テントに移される土魂号が映っている例の写真を長谷部に手渡した。

それを見た長谷部の顔色が微妙に変わる。

「どうした？案内せんのか？　しないならこちらで強制的にやってもいいぞ」

「分かりました。こちらへどうぞ」

倉庫群へと続く長い通用路を長谷部と鏡花が並んで歩いている。その後ろには完全武装の兵士5名と、技術士官と思われる小柄な兵士1人を従えた米田が歩いている。

「どうして案内なんかするって言ったんですか？」

後ろに聞こえないように鏡花が長谷部を責める。

「しょうがないでしょう。下手に強制捜査とかやられて、試作品を破壊されたり第8倉庫に防護服無しで立ち入られたりしたら大変な事になるんですから」

「そう言われてみるとそうですね」

「それに、警備室で鍵を取らずに行けば、向こうについてから鍵を取りに行く時間が出来ます。それまでに大佐が何とかしてくれま
よ」

「なるほど」

だが、鍵をわざと取りに行かないという長谷部の時間稼ぎは失敗した。

なぜならば、現在士魂号が収容されている倉庫では5121小隊による定時整備が行われていたからである。

「いいですか？土魂号というのは、ただ歩いただけでもどこかが故障する兵器なんです。日々の定時点検を怠るわけにはいけないんですよ」

鏡花に詰め寄られた三号機整備士の森は懨然としてそう答えた。

「だからって、あなた達のところにも警報は行っただけだよ」

「来ましたよ。ですけど、警報が発令されたからっていきなりやめられるわけじゃないんですよ！」

「それにしたってねえあなた！」

米田達は口喧嘩を始めた鏡花と森の事は無視して調査を始めた。

まず、武装した兵士2名が倉庫の外へ歩哨として立ち、残りの3名が要所所で監視の目を光らす。

次に、小柄な技術士官と米田が土魂号の足元へ行き、なにやら密談を始める。

初めは土魂号の足をぺたぺたとさわり、写真を撮ったりしていたのだが、次第に周辺へと関心が移ったらしく、積み上げられているコンテナや各所のハッチが開けられて整備されている装甲車の写真も撮りだした。

何枚か写真を撮ると、5121に専属でついている憲兵隊員の小銃に気づいた技術士官がなにやら米田と話し始める。

「長谷部とかいったな、ちょっとこいや」

技術士官と話していた米田が長谷部に手招きする。
直ぐに鏡花を従えて長谷部がやってくる。

「なんですか？」

「おまえさんたちは確か零戦とか言う新しい飛行機を作ってたよな？」

「そこまで調べたんですか・・・ええ、作ってますよ」

機密情報が駄々漏れの現状に呆れつつ長谷部が答える。

いくら参謀本部が厳命し、憲兵隊が随所に立とうと、相手が人間である以上はある程度の情報漏洩は避けられない。

分かってはいるが、いざその証拠を突きつけられると、覚悟していたとはいえショックは隠せない。

「名前は零戦でいいんだよな？」

米田が念を押す。

「そうですよ。正式名称は零式戦闘機ですが、それが何か？」

怪訝そうな顔の長谷部が言葉を返す。

「一つ聞きてえんだがよ、なんで零式なんだ？俺の持ってる情報が正しければ、零戦の名称決定は皇紀2584年（昭和元年）のはずなんだが」

米田の疑問はもつともである。

帝國軍の慣習に合わせるならば、零戦の名称は皇紀2584年の84を取って八四式戦闘機、もしくは4を取って四式戦闘機でなければならぬ。

仮にも軍の兵器開発者である長谷部がそんな事を知らない筈がな

い。

「あと、ここの憲兵達が使っている小銃や表の重戦車。あれも確か零式だよな?」

「はい」

内心しまったと思いながら長谷部。

まさか（日本の戦闘機はゼロ戦でなければ格好がつかない）なんて変なこだわりを持っていたからなんていうわけにもいかず、途方にくれる。

「あ、あのですねえ……」

冷や汗を流しつつ必死の弁解を試みる。

「零戦の名称が決定したのは昭和元年じゃないですか、だから元年にちなんで零戦と……」

「おい、それじゃおかしいぞ? 昭和元年っていったら昭和一年ってことじゃないか。そしたら名称は一式戦闘機だろ?」

いきなり墓穴を掘る長谷部。

再び作戦案を練り始めた彼に代わって、鏡花がその質問に答えた。

「それがですね、一式戦闘機だと略した場合に一式戦になっちゃうじゃないですか、それはなんとなく響きが悪すぎたので零戦と呼ぶことにしたんです」

周りで緊張しつつ聞き耳を立てていた5121小隊員や憲兵達が

（ナイスフォロー！！）と心の中で賞賛する。

「ふーん、なるほどねえ・・・あそこに積み上げられてるでかい箱は何だ？」

長谷部の態度に納得できない点を残しつつ質問を変える米田。

「コンテナです。中身は修理部品などです」

今度の質問には長谷部のよどみなく答えられた。

「特に見ても面白い物はありませんが、拝見され・・・・・・・・ちょっとまった！！どこへ行く気です！？」

他の倉庫へ向かおうとする小柄な技術士官に長谷部が声を張り上げる。

周囲には鉛の防護服を着ないと確実に死亡する倉庫や、電子部品の一時収納庫などもあるのだ。勝手に動き回られては困る。

長谷部の大声に驚いたのか一瞬動きを止める技術士官。

次の瞬間、技術士官から飛び出した声は長谷部たちの予想を大きく裏切る物だった。

「そんなに大きな声出さんと聞こえとるわ、ちょっと隣の倉庫をみしてもらおうかと思っただけや、そんなにカリカリしなさんなって」

特徴のある訛りを持つ声でそう言うと、振り向いて帽子を取る技術士官。

帽子の下から現れたのは、中華系の顔をしたそれなりに綺麗な女性だった。

「中華系？まさか共産党のスパイ！？中将！どういふことです！？」

驚いた長谷部が米田に詰め寄る。

平成では、既に中国は完全な共産主義に移行していたので長谷部が共産党と思うのも無理は無いが、第二次世界大戦の頃の中国では、それなりに資本主義者もいたのだ。

どっちにしろ、今の長谷部の思考は短絡的過ぎる。

「中華系というだけで共産主義者と決め付けるんじゃないやねえよ」

あっさり米田に叱られる。

「彼女は俺の身内だ」

「はあ、それにしても勝手に敷地内をうろつく事は止めてください。憲兵に射殺されますよ」

軽率な行動を取らないように釘をさす長谷部。

「隣の倉庫を見たいのならばそう言ってください。別に隠したりはしませんから」

鏡花が言う。

「それでは隣へどうぞ」

いつまでもこの倉庫を調査されては困る長谷部が、一行に表に出るように促す。

「技監、次はどこへ行くんです？」

さきほどと同じように米田達の少し前を歩きながら相談をする鏡花と長谷部。

「向こうは真面目に調査する気ですからね。一秒でも多く無駄な時間をすごしてもらうために、完成した兵器を貯蔵する倉庫をひたすら案内します。」

最低でも15分は稼げる筈です。あとは我らの大佐殿が彼らを追い出す何らかの手段を実行してくれる事を祈るしかありません」

隣にあるだけあり、少し密談をするだけで到着する。

入り口の衛兵に鍵を開けさせ、米田たちの方に向きを変える。

「さあどうぞ」

頑丈そうな扉を開く長谷部。

倉庫の中は照明がついておらず、天窓から月光が多少差し込む程度の明かりしかないために中の様子がわからない。

かすかに臭う油や金属の匂いから、ここが何らかの兵器を収容しているところだということは分かる。

「いったいここはなんなんだ？」

扉に首を突っ込んだ米田が言う。

多少月明かりがあるとは言え、真夜中の屋内だけあって、そこに何があるのかはわからない。

「ここは製造された零式重戦車の格納庫です」

扉の横に設けられた電灯のスイッチを入れながら長谷部。

スイッチが入れると、天井に設置されている強力な電灯が次々と灯り、巨大な倉庫の中を照らしていく。

「こ、こいつは・・・」

電灯が灯るたびに闇の中から浮かび上がってくる重戦車の群れに言葉を失う米田。

この時代の常識を遥かに超えた巨大な戦車の群れは、停車しているだけでも凄まじい威圧感を与える。

「以前銀座研究所でこれについての説明は受けた物と思われますので説明は省きますが・・・」

倉庫についての説明を始めようと長谷部が口を開いた途端、壁に設置されている警報装置が鳴り出し、いたるところに設置されている赤色回転灯が赤い輝きを放ちだす。

事態を把握しようと電話に飛びつく長谷部。

「こちら第一格納庫、長谷部です。本部の佐藤大佐をお願いします」

「少々お待ちを・・・どうぞ」

「佐藤だ。厄介な事になった。直ぐにお客を連れて管理棟に來い」

いつに無く声が緊張している。

「どうしたんですか？」

表情を引き締めながら長谷部。

「先ほど、施設北側の警備をしていた憲兵隊が所属不明の敵軍と接触した。別働隊がいる危険性もある。直ぐに戻ってこい」

「わかりました」

第十話『敵襲!』

独断で動かした一個中隊を率いて大日本重工の強制捜査に踏み切った米田。

将官の位を最大限に利用した結果、施設内に収容されている士魂号の強制査察に成功する。

5121小隊の誇る士魂号や整備中の装甲車を写真に収めた後、零式戦闘機命名を巡って長谷部の言動に妙な点を発見する米田。

皇紀2584年で昭和元年（一年）であるのに『零式』であるのは何故だと問われ、長谷部は答えることが出来ない。

まさか長谷部個人の趣味でゼロ戦がいいからなどと言う訳にはいかないからだ。

鏡花の機転のおかげでその場は潜り抜けることに成功した長谷部は完成品の倉庫などを適当に巡って時間を潰し、佐藤大佐が追い出すのを待とうと企む。

ところが、事態は予想外の展開を見せた。

完成した零式重戦車の格納庫を査察している時、基地中に警報が鳴り響いたのだ。

電話で演習ではない事を確かめた長谷部は、万が一に備えるために戦車を守りを固める管理棟へと戻る事にした。

「ああっ！お待ちしておりました!!」

管理棟にたどり着くと、例によって痣だらけの中村が一行を迎えた。

先頭を歩く長谷部の前で立ち止まると敬礼をする。

「長谷部さん、大佐殿が直ぐに本部へ来るようにとのことです」

「分かった。現状は？」

答礼しながら長谷部が尋ねる。

「最初に接触した憲兵達は手持ちの弾薬が減ったために後退したそうです。現在、周辺の憲兵をかき集めて西側倉庫街で交戦中です」

「敵は何者なんだ？」

「わかりません。かなり情報が乱れ飛んでまして。最初の報告では巨大な人型兵器と言っていました」

「巨大な人型兵器？巨大って言うのと士魂号くらいか？」

「さあ？まあ混乱していた上に今は夜中ですからね。具体的な大きさなどは不明です」

それを聞くと、長谷部はしばらく考える顔をした。

「まあいいや、車両は出すのか？」

「はい、間もなくトラック3台と零式重戦車3両がここから現地へ向かう筈です」

中村がそういった途端、管理棟の向かいにある倉庫から大型の兵員輸送トラックが3台、その隣の倉庫からは零式重戦車が3両、共にディーゼルの唸り声をあげながら出てきて長谷部たちの近くに停

車した。

すると、管理棟の中から完全武装の憲兵達が次々と踊り出て、トラックに乗り込んでいく。

「急げ急げ急げ！！もたつくんじゃない！！」

指揮棒を振り回し、唾を飛ばしながら兵士達に指示を出しているのは山口伍長だ。

僅か1分半で搭乗を完了すると、部隊は直ちに前線へと向かっていった。

「ずいぶんと訓練されているじゃねえか」

感心した米田が褒める。

「恐れ入ります」

いつのまにか中村の後ろに立っていた佐藤大佐が頭を下げる。

「たっ大佐！いつの間に！？」

驚く中村。

「たった今来たところだよ。中将閣下、ここは危険です。直ぐに管理棟へお入りください」

「わかった。大佐、私の部下の大神中尉を本部とやらの置いてやってくれ。若いわりに有能だ。きっと役に立つだろう」

「・・・わかりました。それではこちらへ」

昭和2年1月2日A M 3…28 大日本重工管理棟内 総合警備室
通称『本部』

<こちら村田！増援は、増援はまだですか！？手持ちの弾薬が少なくなってきました！このままでは戦線を支えきれません！！>

絶え間なく鳴り響く銃声をB G Mに、若い憲兵の声が劣勢を伝える。

「先ほど増援部隊が出動しました。まもなくそちらへ到着する筈です！」

<了解、なんとか頑張ってみます。通信終わり！>

「施設内各所の警備も強化させろ！訓練を受けた事がある作業員にも銃を持たせるんだ！」

オペレーターや先任士官の怒号が乱れ飛ぶ本部に佐藤大佐たちが到着する。

「現状は！？」

「はっ！現在戦車3両を主軸とする増援部隊が現場へ急行しております。まもなく到着するはずです」

敬礼をしつつ答える先任。

「5121小隊は？」

「既に実働体勢に移っています。現在三号機が出動し・・・」

DOM! DOM! DOM!

頑丈な壁に囲まれた室内に、戦車砲の砲声が響いてくる。

一瞬にして本部内の全員が黙る。

あの強力な零式重戦車が必要になるような敵が、すぐそこに出現したと言う事実を再認識したからである。

「どうやら増援が到着したようだ。見に行くか？」

大佐がにやりとしながら大神に言う。

「見せていただけるのでありますか？」

部屋中にあるさまざまな電子機器を興味深そうに見ていた大神が尋ねる。

「ああ、直ぐに用意させる。第二波と一緒に言って来い。中村ア！」

「はっ！」

いつのまにか完全武装になって大神の横にいた中村が慌てて敬礼する。

「第二波と一緒に大神中尉も連れて行け」

「わかりました。中尉殿、こちらへ」

直ぐに大神を正面玄関へ連れて行く中村。

そこには既にエンジンをかけて兵士達を満載した輸送トラックが待機していた。

そのトラックは、今までのとは違いやけに巨大だった。

「お疲れ様です中村三曹殿。直ぐに出せます」

息を弾ませた中村が助手席側のドアを開けると、ハンドルを握った坂田が笑顔で待っていた。

ちなみに、自衛隊員たちは自分達しかないときには基本的に元の階級で呼び合うことにしている。

「伍長だ。佐藤大佐の命令で大神中尉殿も同乗する、直ぐに出せ」

素早く訂正した中村は、大神を引っ張り上げながら乗り込む。

「直ぐに出せ」

「わかってます」

アクセルを踏み込む坂田。

「3時の方向に目標、撃え!!!」

戦車長が号令を出すと同時に105mm砲が砲弾を発射する。砲弾発射に伴う閃光が暗闇を切り裂いて周囲にあるものを映し出

す。

この時代に存在するありとあらゆる車両を確実に打ち抜くことが出来る105mm砲弾は、倉庫の影から出てきたばかりの機関砲を構えた敵人型兵器の上半身を吹き飛ばし、一瞬で戦闘不能にする。

「目標撃破！！次弾装填！！」

「装填完了です！」

既に砲弾を装填していた装填手が叫ぶ。
それに頷きながら戦車長が命令する。

「方位そのまま、撃え！！」

再び辺りを閃光が照らす。

着弾した敵人型兵器が爆散するのが見える。

「戦車隊に遅れをとるな！撃て！！」

日々指導を受けている憲兵達から『鬼の山口』とあだ名されている山口が叫ぶと、歩兵部隊による一斉射撃が始まった。

山口と一緒に出動した第一陣は、三種類の武装を持った兵士達で構成されていた。

戦車を盾にしつつ最前列にいるのが零式小銃を構えた小銃部隊。
その後方にある倉庫の陰から敵を狙う試作の式式対戦車砲を装備した対戦車部隊。

そして、対戦車部隊から少しはなれた空き地で筒状の装備を次々と準備しつつ敵が倉庫街の外まで押し出された時に備えて待機している最新型の81mm迫撃砲を装備した迫撃砲部隊である。

3段構えの布陣ではあるが、個々の部隊の人数は最低限以下の定員割れ状態であり、彼ら憲兵隊があくまで警備の為に駐屯していたのが分かる。

もちろん、それだけしかないのには理由がある。

数十ヘクタールもある大日本重工防衛の為に駐屯しているのであれば、最低でも4から5個中隊がローテーションを組みつついなければならぬ。

しかし、憲兵隊からそれだけの戦力を割くわけにはいかないのだ。そのため、現在の大日本重工には重要施設の重点警備の為に3個中隊がいるだけとなっている。

さて、出現した敵の名前は脇侍乙型。

人型の上に機関砲を装備している厄介な奴である。

個々の戦闘力ならば零式重戦車には遠く及ばないのだが、なにしろ数が違う。

なんと、その数40機。

いかに優秀な兵器を持とうと、これだけの戦力差は覆しづらい。

おまけに倉庫に被害を出すわけにはいかないので、こちらは敵が倉庫から離れたところを撃つしかないのだが、相手はそんな事構いなしに機関砲を乱射してくるのだ。

しかも、倉庫街を舞台にしたいいわゆる市街戦のために巨大な戦車では小回りが効かず、ちょこちょこ動き回る脇侍の動きに対処しきれない。

そのための歩兵部隊なのだが、式式対戦車砲は確実な一撃を与えられるのだが、試作品を引っ張り出してきただけあって数が少ない。81mm迫撃砲は倉庫街で使うような物では無いし、当然の事ながら零式小銃は牽制程度の役にしか立たない。

かといって相手もこちらへ決定打を与えるほどの火力は持っていない。携行している機関砲はせいぜいが零式重戦車の装甲をへこませるくらいだ。

と、いうわけで、憲兵隊は相手に少しずつ損害を与えつつも大打撃は与えられず、かといって敵はこちらに対してたいした損害を与えずにしながらその戦力をじわじわと削られるという、なんとも見えてイライラする状況になっていた。

そんなところへ大神を連れた第二陣が到着したのは、午前4時を回った頃であった。

「総員下車！先任の山口伍長の指示に従え！！」

後部への覗き窓から中村が叫ぶ。

命令を受けた憲兵達は、武器を構えながら次々と下車して戦闘を続ける第一陣へと参加していく。

「やるもんですね」

被弾率を下げるために身を屈めているのにもかかわらず、瞬く間に倉庫や戦車の陰に展開を完了する憲兵達を見て大神が賞賛する。

本来は陸戦が主任務では無いのに、ベテランの兵士と比べてそれほど遜色のない動きを行っているからだ。

「ありがとうございます。このトラックの中でご見学ください。一応、窓は防弾になっているので。坂田、行くぞ」

小銃に装填しながら中村が言う。

「了解です」

運転席のドアを開けながら坂田が答える。

同行を申し出ようとして、自分が正装である事に気がつく大神。

「現状はどうなってるんです!？」

次々と機関銃弾が着弾する戦車の陰に飛び込んだ中村が山口に叫ぶ。

「完全に膠着している! 敵の数が多すぎる! 今若い奴等に倉庫の上へ登らせている!」

敵部隊が一番多くいると思われる正面にある倉庫を指差す。
倉庫の屋根の上を数名の憲兵達がよじ登っているのが見える。

「上から手榴弾の雨ということですか？」

「そうだ………っておい、どうして海軍がこんなところにいる?」

「へ?」

間抜けな声を出して坂田が振り向くと、いつのまにか後ろには大神が来ていた。

「あ、あんたいつの間に」

「すみません」

「まあここまできちゃったら追い返すわけにもいかないでしょうがないですけど」

あたりかまわず着弾する銃弾の嵐を見ながら中村が言う。

<こちら杉浦。山口伍長へ。配置完了。いつでも出来ます>

そばにあった携帯式の個人用通信機からいきなり雑音の極めて少ない声が聞こえてきた。

「!!」

デジタル通信技術の事など当然知らない大神が仰天する。

「よし！五分後に始めろ！」

通信機に飛びついた山口が叫ぶ。

<はっ！>

「全員に告ぐ、今から五分後に総攻撃を開始する。対戦車部隊は前へ。攻撃と同時に戦車隊も前進させる。これでけりをつけるぞ」

<了解!!!>

「なあ中村伍長」

大神が中村を呼ぶ。

「なんですか？」

戦車の陰から相手を伺いながら中村が答える。

「あの通信機なんだが、一体どういう・・・」

「申し訳ありません大神中尉殿。技術的な質問には答えられません。自分は一介の兵士なので」

あらかじめ決められている答えを返す中村。

「それは分からないからか？それとも答えてはいけないからか？」

「自分には機械に関する知識は無いからであります」

「そうか」

当たり前といえば当たり前の答えを返されて黙る大神。
もっとも、隠す気があるうとなかろうと中村はデジタル通信の原理を知らない。

「誰かこれについて詳しく知っているものは・・・」

「中尉殿！」

通信機について大神が尋ねようとした時、山口が非難の声を上げた。

「銃撃が収まっているとはいえ現在は戦闘中です。その手の講義を受けたければ戦闘終了後に長谷部さんにでも思う存分受けてください」

「あ、ああ、すまない」

自分のあまりの緊張感の無さを恥じる大神。
どうやら、幸せな家庭生活というものを少し送るだけでも人間と
いうものは変われるらしい。

「いいんですか？あとで大佐に怒られても知りませよ」

山口のそばに寄ってきた中村が小声で言う。

「安心しろ。どうせ殴られるのはお前だ」

にやりとして言葉を返す山口。

「ほれ、戦闘が始まるぞ。さっさと持ち場に就け」

小銃で中村のわき腹を突つつく。

「畜生、いつか殺してやる」

同日AM4…30

「始めろ」

山口が指示を出すのと同時に倉庫の上に潜んでいた憲兵達が手榴
弾を次々と落とす。

牽制の為に放たれる戦車砲や機銃の為に身動きが取れない脇侍た
ちは次々と爆風に飲まれていく。

「やった!!」

「万歳!!」

歓声を上げる兵士達。

しかし、彼らは忘れていたのだ。敵が人間ではない事を。

「戦車前進! ロケット砲前へ!!」

戦車の陰から小銃を乱射しながら山口が叫ぶ。

直ちに戦車3両がその巨体を震わせながら敵集団へと進んでいく。

「装填しだい発砲! 倉庫に当てるなよ!」

「わかってる!!」

そんな事を口走りながら対戦車砲を構えた兵士達が飛び出し、手ごろなところにしゃがみこむ。

素早く後ろに回りこんだ相方がロケット弾を筒に装填し、発射筒を構えている兵士の後頭部を叩く。

装填完了の合図である。

合図を受けた兵士は、倉庫と倉庫の間を慎重に狙って発射する。

「おおっ!」

次々に放たれるロケットの光を見た大神が驚きの声を洩らす

誘導装置など当然付いていないロケットは、可能な限り真っ直ぐ突き進み、敵がいると思われる爆煙に突き刺さる。

次の瞬間、戦車砲に匹敵する爆発が連続して起きる。

「ざまあ見やがれ!!」

1番敵の近くにいた戦車の影から一人の兵士が飛び出し、煙に向かって叫ぶ。

「おい貴様!死にたいのか!もどれ!!」

顔色を変えた山口が叫ぶ。

「だいじょうぶですよ伍長殿、あの爆は……」

彼はそこまでしか喋れなかった。

いきなり煙の中から飛び出してきた機関砲弾によってバラバラに引き裂かれたからだ。

「……おい、嘘だろ」

煙の中から次々と出てくる敵機を見た山口は思わずそう洩らした。徐々に煙が薄くなったのはつきりと見えたのだ。

最前列の不運な数機の残骸を乗り越えて次々と敵機がこちらへ向かってくる姿が。

「は、班長?どうするんですか?」

早くもパニックになる中村。

相変わらず非常時には役に立たない。

「小銃は効かない。手榴弾も駄目。ロケットとやらも効果は薄い。戦車砲では限界がある。どうするんだ?」

大神が冷静に尋ねる。

「くそ、一体どうすれば・・・・・・・・ん？」

不意に地面が揺れている感じがした山口が黙る。

「地震か？」

再び起きた揺れに、大神も黙る。

微震は数度続き、唐突に止んだ。

「収まったようだが、一体何なんだ？」

山口がそう呟いた次の瞬間、一時的に砲撃を中止していた憲兵隊と敵の間に、巨大な人型兵器が1機、倉庫の間からジャンプで飛び出してきた。

その人型は、何が起きたのか山口達が認識する前に、腕に持っていた凶悪なまでに大口径な機関砲を乱射し始めた。

直線状にいた敵機を全てスクラップに変えると、その人型は大きさに合わないスピードで走っていき、倉庫と倉庫の間に潜む残的の掃討を始めた。

近距離すぎて使えない機関砲を投げ捨てると、巨大な右手を振り上げ、凄まじい速度で敵機へと叩きつける。

殴られた敵機は、反動で後ろの仲間達を巻き込みながら吹き飛ばされていく。

素早く他の敵機が機関砲を構えるが、続けざまに放たれた左足のローキックが下半身を吹き飛ばす。

そのまま上体だけをひねり、再び右手でパンチを放つ。

人型の出現からきっかり1分後、30数機いた敵機は1機残さずスクラップと化した。

同日AM6..30

「どうした？浮かない顔をして」

バックミラーに映った大神の顔に気づいた米田が声を掛ける。

「いえ、少し考え事を」

「・・・まあ、あんまり考えすぎんようにな。来週からは海軍軍人としての仕事が待ってんだからな」

「はい」

「ま、早くグリシーヌさんだったかな？のところに帰ってやることだ」

「はい」

返事をしつつも大神は戦闘中に見た人型兵器のことを思い出していた。

（あれだけ大量の脇侍が何故あそこに？それと、途中で現れた味方の人型。あんなに冷たい感じがしたのは久しぶりだ・・・一体、奴等はあそこで何をやっているんだ？）

考え事続ける内に、彼の意識はどんどん自身の内側へと入り込んでいく。

知らず知らずのうちに、彼は、居眠りをしていた。

「大神！」

「はっ、はい！」

米田の大声に慌てて返事をする、いつのまにか車は大神の自宅の前に来ていた。

「何時まで寝ている気だ？早く降りろ」

呆れ顔の米田が言う。

「も、申し訳ありません」

「いいから降りろ。かみさんが呆れてるぞ」

「え？は、はい。すいません」

慌てて車から降りる。

大神を降ろすと、車はさっさと行ってしまった。

「大神、車から降りずにぼーっとしているなんて、どうしたんだ？」

心配そうにグリシーヌが尋ねてくる。

ちなみに、今日は着物姿である。

いつも本国と同じ服を着ているのも芸がないといって買ってきたものである。

しかし、着物ともなると当然ながら体のラインが結構出てしまうわけで、目のやり場に困ってしまうわけなのである。

「具合でも悪いのか？」

「い、いや、寝不足なだけさ。少し寝れば治るよ。それよりおなかですいたな」

「そうか、すぐに用意する」

「うん」

二人肩を並べて家に入っていく。

「これが、今回襲撃してきた敵の残骸です」

回収された敵機の残骸を調査していた長谷部が、資料とかかれた箱に入れられていた金属片を佐藤大佐に渡す。

渡された大佐は暫く金属片をいじっていたが、やがて興味を失ったのか箱に戻した。

「戦力増強の件は許可が下りた。第一師団から新たに三個中隊が編入される。これで文句なからう？」

「はい。例の中将閣下と中尉ですが」

「ああ、あの二人は少しまずいんだ」

「政治的な問題でも？」

「ある意味な。米田は日露戦争の英雄なんだ。当然ながら信望者は多い。」

もう一人の海軍中尉は帝都と巴里を救った英雄だ。単純に圧力を掛けようとしただけでは無理だ。どこかで妨害される」

「しかし、これ以上ちよっかいを出されたのでは・・・」

不満を口に出そうとした長谷部を手で制す大佐。

「分かってる。安心しろ。中将の手駒である中尉殿は今週一杯は休暇だ。」

そして、来週からは海軍に新設される『先進技術研究局』に飛ばされる。当分は設立の準備や挨拶回りで何も出来ないはずだ」

「なるほど、それで中将殿は？」

「あいつは無理だ。少なくとも俺が中将か大将になるまではな。狐と狸の化かしあいをしようにも、相手に獵師がついてるんじゃ勝負にならないからな」

「小林准将閣下は？」

「あいつには統合幕僚会議開設の準備をしてもらってる。余計な仕事は増やしたくない」

「なるほど、確かに仕方ありませんな」

「ま、警備強化とかいって施設への出入りは全面禁止にさせておく。」

それでよかろう？」

「はい。いつもありがとうございます」

頭を下げる長谷部。

「時に長谷部君、君は以前対中国戦において有効かつ効果的な戦略があると言わなかったかな？」

「この間酒を飲んだ時ですね。ええ、言いましたよ」

「詳しく、話してくれないかな？」

第十一話『一晩明けて』

謎の武装組織による集団家庭訪問から数時間後。

ようやく昇った太陽と完全武装の陸軍が見守る中、大日本重工本社敷地内では撃破された敵機の回収作業と破壊された施設の復旧作業が急ピッチで行われていた。

出荷予定の弾薬にまで手をつけての大規模な戦闘の結果、戦闘が開始された北側倉庫街から決着がついた西側倉庫街にかけてかなりの規模で被害が出ており、破損した商品や倒壊した倉庫などの修理にかかる費用を算出するために会計課は大騒ぎとなっている。

そんな騒ぎの中、米田対策で大佐の元を訪れた長谷部は、以前酒の席で大佐に語った『対中国戦における有効かつ効果的な戦略』についての詳しい説明を求められた。

「いずれそれについての説明を求められるであろうとは思っていました」

言いながら白衣の胸ポケットから一枚の紙を取り出す長谷部。

「これをご覧ください」

机の上に置かれたその紙は、平成九年発行のユーラシア極東地域の拡大図であった。

中国東北部のターチンと北樺太のオハに赤丸がつけられている。

「これは？」

視線は地図から上げずに大佐が尋ねる。

「私達の時代の地図です。これからこれを使って説明を行います、内容は、大佐殿が信用する人物以外には絶対に話さないで下さい」

「わかった」

「さて、いまから五年後の中国では国を二分しての大規模な内戦が行われています。片方は現在も北伐を行っている蒋介石率いる中国国民政府、もう片方は南部へと逃れた共産党が江西省瑞金に作った毛沢東率いる中華ソヴィエト共和国臨時政府です」

「おいおい、待ってくれ。国民党と共産党は仲がいいんじゃないのか？」

「それは今だけです。今年の4月、大地主や資本家の支持の元、蒋介石は上海クーデターと呼ばれる共産党への弾圧を行います。これにより国共合作は失敗、中国は長い戦乱の世へと突入していくのです」

「それとお前の言う戦略は関係があるんだよな」

「勿論です。この戦略のページ目は、来年起きる関東軍による張作霖爆殺の阻止から始まります。いえ、より正確には阻止はしないのです……」

「もったいぶらないで早く話せ」

少しイライラした様子の大佐が先を促す。

「関東軍による爆破は行います。しかし、それは我々がやったように見えてはいけません。取れる限りの手段を駆使して共産党の仕業に見立てます」

「張作霖はどうする？」

「彼には直前で我が軍の憲兵にでも降ろしてもらいます。

重要なのはここなのですが、彼を救出したのは我が軍、鉄道を爆破したのは共産党。という構図をここで張作霖に信じ込ませるのです。

まあ、細かい事は私どもの知恵の及ぶところでは無いので大佐殿にお任せします」

「なるほどな、それで奴をこちらに引き込めということか……よし、その工作は任せろ」

「はい、これによって張作霖と蒋介石は共産党という共通の敵を持ちます」

「そこに我が国が協力を申し出れば、両者を仲間にできると？」

いち早く長谷部の言わんとしている事に気づいた大佐が長谷部の言葉を奪う。

「その通りです。さらに、満州国で作られた兵器を『友好価格』で売りつける事を条件に……」

「満州の独立を認めさせる、か」

「この地図にも書いてある通り、満州には豊富すぎる天然資源が埋

まっています。これを有効に利用すれば輸出用の兵器など簡単に作る事ができます」

「ふむ……よし、この作戦はいけるぞ、大陸進出派も反対派も万人が納得する案だ。更に世界の目も気にしなくてすむ。長谷部君、君は天才だ」

満面の笑みを浮かべた大佐が手放して長谷部を褒める。

実際、長谷部の案は賞賛に値する。

まず、共産党と国民党の国共合作が行われなくなる。その上、張作霖も死なずにすむ。

工業化に力を注ぐという事は、それだけ日本と満州の発展に繋がる。

するとどうなるか？

満州が発展し、そこが住み良くなると言う事は中国国民がそこに流れ込むという事だ。

安価な労働力はコストの削減に繋がる。それは現在の日本企業が世界中で証明している。

コストの削減は大量生産と単価の引き下げを可能にする。

日中両国に大量に輸出される兵器は満州と日本、そして結果的には経費が多少なりとも浮くという形で中国すらも潤す。

小銃一つとっても日中朝満全軍の全ての小銃を交換するのだ。更にそれに伴う同じ口径の弾薬、弾倉、ベルトなどの付属品……空前の規模の需要が生まれる事となる。

商品が売れるという事は、売ただけ利益が発生するという事だ。生み出された利益で朝鮮や満州及び日本全土を高度に近代化し、公共機関を完備し、教育を行き届かせる。

公共事業による現地民の雇用の促進は収入の安定を意味する。

雇用が促進され収入が安定すれば治安は良くなる。

すると人々の購買意欲や勤労意欲は増し、それに惹かれた外国企業は集まってくる。

外国企業が集まってくると、満州にある企業と外国企業の間競争が生まれる。

競争が行われるという事は、より高性能な、より安価な物が作られるという事だ。

こうして満州のみならず、日本、中国、朝鮮など周辺国家の経済状態まで向上させようというのが長谷部の戦略である。

さらに、この戦略でいくと中国国民党は未来を知る参謀と超近代的で安価な兵器を武器に戦えるという事になる。

勝利は疑いないだろう。

中国の政情安定に大きく貢献できるという事は、お互いの信頼に繋がる。

それは長谷部の目指す上下関係のない真の友人関係を築く上でもっとも大切な物だ。

日中朝満連合は極東地域に生まれた一大勢力として、白人社会と戦う事ができる最強最大の組織となる事だろう。

「いえ、そんな……それより、この案は可能な限り素早く準備する必要があります」

「ああ、まかせろ。それより、これ以外に何かいい案は無いか？」

「そうですね……」

長谷部が史実を資料に元の世界でも考えていた戦略を次々と伝えていく。

大佐はそれを一言も漏らすまいと記憶していく。

もつとも、さすがに記憶力の限界を感じたのか後日書類を作成するように命じたが。

同時刻 銀座某所

「うーっーん、分からん!!」

机の上にばらされているのは大日本重工製ラジヲであり、ばらしているのは米田の命令により大日本重工の製品を調べるように命じられた李紅蘭だ。

「こいつらをばらして、その基本原理を調べてくれ」

大きな執務机の上に所狭しと並べられた大日本重工の製品――中には零式小銃や九mm機関拳銃まで混ざっている――を前にした米田がそういったのは数時間前である。

幼少の頃からさまざまな機械を分解し、その全ての原理を知り尽くしている紅蘭にとってそんな事は暇つぶし程度のことはずだった。

だが・・・

「分からん!なんでや!?なんでウチがわからんのや!?」

憤ってみたところで分かるわけではない。

しかし、憤らずにはられない。

少しくらいでこずった事は今までにもある、だが、まったくわからなかった事なんて今までに一度も無いからだ。

内部にある真空管がどこにも繋がっていないのに気づいたのが3

0分前、よく分からない部品が中枢を勤めているようだという事に気づいたのが15分前、それから彼女の作業は完全に滞っていた。分からなくて当たり前だ、相手は50年以上も先の技術である。わかるほうがどうかしている。

「こっちはこっちで分からん」

零式小銃や九mm機関拳銃を見て呟く。

これだけ優れた武器なのに、未だに大日本重工以外どこの部隊にも配備されていないからだ。

米田によると、零式重戦車や155mm砲も試射会などに参加したメンバー以外は詳細を知らないらしい。

誰が聞いても不可解な話だ。

これだけの武器を開発しておきながらいつまで経っても売らないなんていうことは通常ありえないからだ。

普通ならば兵器の製造を一手に握るチャンスなのだから、誰かがまねをする前にさっさと販売権を握るのが常識である。

「わからんなあ」

基盤から取れてしまったICを指先でつまみながら紅蘭が呟く。

都内某所 薄暗い部屋

「……………それでは統合幕僚会議開設はできるんですね？」

小林准将が尋ねる。

「ああ、君の言う『有能かつ強力な意思決定機構の確立』を陸軍の連中に説明するのは大変だったがな」

帝國陸軍大将齋藤三弥がコーヒーを飲みながらいう。

「私が最高権力の座に立ち、彼らにはそれなりのポストを与えると
いう事で過半数以上は納得した。明後日に陛下に開設のお許しを頂
く予定だ」

「そうになると大本営は解散ですね」

「まあ仕方あるまい。全軍を束ねる物が二つも三つもあったのでは
兵達に無用な混乱を与える事になる」

「海軍の連中は納得するんですかね？」

「従来までの非効率的な指揮系統の改善と陸海軍の相互協力の為と
言ったら山本閣下は納得してくれたようだ。海軍の連中はあの人に
任せようと思う」

「海軍の事はさすがの私もわかりませんからな、お任せします。と
ころで、米田中将とその部下の海軍中尉なのですが」

「分かってる。しかしな、あの男だけはどうも駄目なんだ。」

何しろ日露戦争の英雄である上に華撃団の司令官だ。政財界への
パイプも太いし、諸外国の特務機関などとの親交も深い。

おまけに外務省などのお役人とも仲がいい。あればかりは私の力
をもってしてもなんともできん。

せいぜいが手駒の中尉を見せしめとして新設部門へ飛ばすくらい
が限界だ」

「先進技術研究局でしたかな？しかし実態は・・・」

「そう、海軍工廠のお荷物連中を集めたゴミ捨て場だ」

「第二の銀座研究所にはならないでしような？」

不安そうに小林准将。

万が一にでもそんな事になったら、彼の持つ銀座研究所というカードの価値が薄くなってしまう。

「まずないな、銀座の場合は目利きで知られる佐藤大佐が直々に探し出した人間を集めたが、海軍のほうは適正も考えずに各部門から要らない人間を集めたと聞いたからな。大神中尉の苦労たるや相당한もののはずだ」

「しかしどうやって海軍の人事に口を挟んだんです？海軍の連中の陸軍嫌いは相当な物のはずなのに」

「やりかたは幾らでもあるんだよ」

「はあ」

果てしなく暗い笑みを浮かべる斉藤に、今後のパワーゲームに備えて『やりかた』を尋ねようとした小林は、気の抜けた声を出すことしかできなかった。

昭和2年1月4日、斎藤三弥統合幕僚議長を中心とする統合幕僚

会議が発足した。

これ以降全軍の作戦立案や指揮は全て統合幕僚会議を通じて行われることとなる。

また、統幕会議発足と同時に今まで存在していた大本営は消滅する事となった。

これにより、統幕議長派でないものが中枢からかなり排除され、佐藤大佐率いる銀座研究所は未来の知識を元に以前よりも戦略に口を挟めるようになる。

昭和2年3月1日 大日本重工特別会議室

ここは大日本重工本社管理棟の地下にある特別会議室である。

会議室と言っても、窓一つない地下室に大きな円卓があり、鉄製の扉の両脇には小銃を構えた憲兵が立っているという作戦室とでも呼ぶべき物である。

今この部屋には8人の人間がいた。

説明係としての長谷部と鏡花、責任者としての佐藤大佐と小林准将、そして、今後の鍵を握る人物だからと統幕議長と一緒に来てもらった井上幾太郎大將、板垣征四郎大佐、石原莞爾少佐である。

「お集まりの皆様、本日はお忙しい中こんな辺境の地まで来ていただきまことにありがとうございます」

部屋のおくにある巨大な黒板の前に立った長谷部が頭を下げる。

「挨拶はいい」

腕組みをしたまま井上大將が言う。

「それでは早速本題に入らせていただきます」

長谷部がチョークを持つ。

「銀座研究所が本格的に稼動を始めてから、我々はさまざまな兵器を開発してきました。

零式重戦車、零式小銃、零式戦闘機、155mm砲などなど、個々の兵器の優秀さは長年軍務につけてきた皆様が1番お分かりでしょう」

「君らが作った兵器が優秀なのは分かる」

井上大将が言う。

「帝國陸軍での航空機関連の中心人物である彼は、大日本重工に試験目的で配属された航空隊からの定期報告を常に読んでおり、そこに描かれたまるで仮想戦記のような運用結果に大変気をよくしていた。

井上は大正時代に一度空軍の創設を提案したのだが、陸海軍の思惑の違いなどが邪魔をして廃案に終わったという過去があった。

そのため、高出力エンジンを次々に開発し、超高性能戦闘機や各種攻撃機や爆撃機などを開発している大日本重工や銀座研究所に常に気を配っていた。

「ありがとうございます大將閣下。さて、料理は出来上がりました。お次は器と盛り付け方です」

「待て！一介の技術者が軍の運用方法に口を挟む気か？」

今度は板垣が立ち上がって声を張り上げる。

「板垣大佐、君は人の話を聞く事も出来んのか？」

統幕議長が怒りを抑えた声で言う。

「も、申し訳ありません。しかし・・・」

「大佐、君の言いたい事はわかる。だが、今は長谷部君の言う事を聞いておけ」

「はっ」

大人しく席に座る板垣。

「当たり前の話ですが、我々技術者が軍の運用方法に口を挟んでも仕方ありません。

『餅は餅屋』というように専門分野はそれに準じた能力を持ったものが人間がやるべきです。

我々は作戦運用などに口を挟むつもりはありません。そんな事をしたところで無用な混乱をまねいて銃殺になるのがオチです」

「じゃあ何がいたいんだ？」

石原が苛立った様子で言う。

「しかしながら我々は口を挟みたい。いや、挟まなければならない」

「何故だ？もったいぶるのはやめて早く言え」

長谷部の独特の話し方に苛立ちを覚えた井上が言う。

「我々が、未来から来たからです」

長谷部がそう答えた瞬間、板垣が爆笑した。

「ははははは！！貴様頭でもおかしいのでは無いか？」

「まったくですな。統幕議長閣下、このようなものを研究者として雇っていて良いのですか？」

笑う前に呆れてしまっている石原。

それには答えずに井上を見る統幕議長。

大笑いしたり呆れたりしている2人の佐官とは違い、井上はなにやら考える顔をして腕組みをしている。

板垣や石原のようにバカにしない理由は、今まで長谷部達が開発してきた兵器にある。

1800馬力も出す事ができる『誉一型』発動機や、大した雑音も無しに会話する事ができる軽量通信機、それらを載せた超高性能戦闘機『零戦』。

その零戦ですら余裕で撃墜する事ができるという電索誘導式高射砲。従来の戦車など何台集まろうと相手にならない零式重戦車・・・

どれも従来の技術で簡単にできるとは思えない。いや、簡単とか難しいとか以前に恐らく不可能である。

夢物語の中にしか存在しないような兵器を実用化するには、同様の技術が必要だ。

それを持っているという事を考えると、目の前の長谷部という男の言葉に偽りは無いという結論に達する。

「井上大将はどう思われますか？」

統幕議長が井上に話を振る。

「私は、彼の言う事を信じる」

「閣下!？」

二人の佐官が慌てて井上を見る。

「ありがとうございます大将閣下」

頭を下げる長谷部。

「一体何故なのでありますか閣下!？何故にこのような与太話をお信じになられるのでありますか？」

驚きのあまり文法の変な日本語を話す石原。

「石原少佐殿が信じられないのも無理はありません。私が逆の立場でも同じような事を申したでしょう。」

「そうですな。ああ、丁度いい。今月の14日に片岡蔵相が衆議院予算委員会で失言をします。そして、その影響で日本を金融恐慌が襲う事となります」

「なるほど、未来から来たのならはこの先の出来事を知っていてもおかしくは無いという事か」

石原が言う。

「その通りです。信じるのはそれからでもかまいません」

「貴様らもそれならば信じられるな？」

石原と板垣を見ながら井上が言う。

「はい」

声を揃えて答える二人。

「よかろう。統幕議長、それではまた後日集まるという事でいいですかな？」

「そうですね。お互いの考えが違うのに会議をしたところでまともな成果は得られないでしょうからな」

こうして、ほとんど何も話し合わずに第一回の開合は幕を閉じた。

昭和2年3月14日PM11…30 大日本重工特別会議室

会議室の中には前回と同じメンバーが揃っていた。

「君の言うとおり衆議院予算委員会で片岡蔵相が失言をした。これで我が国が金融恐慌に襲われるのは間違いない。我々三人は君が未来人であるという主張を信じよう」

略装姿の井上が言う。

「ありがとうございます。それではこの間話せなかった本題に入らせてもらいます」

黒板にさまざまな言葉や図を書き始める長谷部。

「私や私の部下達は、歴史を元にかにして帝國の敗北を勝利に変えるかを研究してきました」

「敗北？我々が誰に負けるといふのだ？」

第二次世界大戦の存在すら知らない井上が不思議そうに聞く。

「あ、井上閣下や板垣さんたちにはまだお話していませんでしたね。我々の世界において大日本帝國は1941年12月8日にアメリカの真珠湾を奇襲攻撃し、米英を相手に宣戦を布告します」

「なんだって!？」

驚いた井上が叫ぶ。

板垣と石原は驚きのあまり声も出ない。

「その前に行われていた日中戦争によって国力が疲弊していた事もあります、当然ながら我が国が勝てる筈がありません。

不可侵条約を一方的に破棄したソ連軍や連日空襲を行う米軍に完全に打ちのめされた帝國は、最終的に軍人民間人合わせて数百万人の死者を出し、帝都を含めた主要都市のほぼ全てを焼き尽くされて無条件降伏することになります」

「「……………」」

あまりの衝撃で固まってしまふ3人。

既に聞かされている統幕議長や小林准将、佐藤大佐も固い表情で黙っている。

「無条件降伏の後、極東軍事裁判というものが開かれ、実に1000人以上もの元軍人が戦犯として裁かれました。

その後、日本はアメリカの半植民地として歩む事となるのです」

アメリカの半植民地という言葉で思考が停止していた3人がようやく再起動する。

「帝國が、植民地になるのか？」

顔色の悪い井上が尋ねる。

「はい、一応独立国にはなっていますが、アメリカの属国のような存在になります」

「信じられん・・・いや、信じなければならんな」

せっかく絶望的ながらも未来を教えてもらったというのに全てを否定したところで何の意味もない、知った以上は絶望的であっても未来と向き合っていくしかないと腹をくくった石原が言う。

「なあ、わざわざこのメンバーを揃えたという事は、我々は歴史の上で大きな役割を果たすのだろうか？」

板垣が言う。

「その通りです」

「教えてくれ、我々はどうしたらいい？どうすれば最善の道を進む事ができる？」

陸軍軍人としてではなく、帝国臣民の一人として、未来を知る事になった一人として、長谷部に教えを乞う。

「それを話し合うためにこうして集まったのです。どうかご安心を。太平洋戦争終結から約半世紀、我々には考える時間がありました」

重くなった空気をはらうかのように長谷部が言う。

「話してくれ、我々の権限が許す限りどんな事でも協力する」

井上が力を込めた口調で言う。

「はい……それではどうすれば二次大戦に勝利する事ができるか？何故このメンバーを集めたのか？皆さんに何をしていただきたいか？」

全部ひっくるめて、説明させていただきます」

第十二話『所属不明艦』

片岡蔵相が予算委員会で失言するという予言を見事に的中させ、井上、板垣、石原の3人を新たに引き込んだ長谷部。

この先帝國を待ち受ける絶望的な未来を教えられた3人にどうすれば最善の道を歩む事ができるか尋ねられる。

「それでは、どのようにすれば来るべき第二次世界大戦と日中戦争、そして大東亜戦争を乗り切れるかを説明させていただきます」

「大東亜戦争ってなんだ？」

井上が不思議そうな顔で尋ねる。

「あ」

しまったという顔をする長谷部。

これは間違える人が余りにも多いのだが、第二次世界大戦というのはポーランドに侵攻したドイツ軍に撤退を要求して拒絶された英仏両国が宣戦布告して始まった戦争である。

大東亜戦争とは1941年12月8日に発生した真珠湾奇襲攻撃によって始まった戦争であり、当然ながら両者は別物である。

ちなみに、現在は大東亜戦争の事を太平洋戦争と呼んでいるが、それは戦後言われるようになった呼び方であり、戦時中は大東亜戦争と呼ばれていた。

「すいません。前にご説明した第二次世界大戦と大東亜戦争は違いました。第二次世界大戦とは……………」

慌てて事実を説明しなおし、自分が間違えた事を詫げる。

「ふむ、つまり帝國は独逸と伊太利亜を盟友に世界を相手にしなければならぬという事か」

長谷部の説明を聞き終えた井上が言う。

「いいえ、私達が考え出した案では、独逸や伊太利亜との同盟はありません」

長谷部の発言に啞然となる井上達3人。

「一国で世界を相手にしろと？」

啞然とした表情のまま石原。

「人の話は最後まで聞いてください」

長谷部が注意する。

「我々が手を結ぶべきと判断した相手は我が国に近い三国、つまり朝鮮、満州・・・そして中国です」

「中国？あんな政情不安な国と盟約を結んでどうする？
だいたい、あの国は大小さまざまな勢力が利権をめぐって日夜激戦を繰り広げているようなところだぞ、盟約を結ぼうにも相手が」

「いるんです」

「国民党、か？」

資料を読んでいた井上が言う。

「どうしてわかったんです？」

「資料の年表に国民党は共産党の弾圧をすると書いてあったからな」
それを聞いた石原と板垣が慌てて資料を見直し始める。

「正解です。私達を選んだ盟友は、蒋介石率いる中国国民党です」

「長谷部君」

資料を見直していた石原が長谷部に尋ねる。

「国民党と同盟を結ぶといってもどうするのだ？」

「まずはですね・・・」

長谷部は数日前に佐藤大佐に語ったプランを井上達に話した。
最初は胡散臭げな視線を向けていた一同だったが、長谷部の話が
進むにつれ、その表情は真剣になり、深く腰掛けていたはずが、い
つの間にか腰を浮かすまでになっていく。

「凄いいじゃないか長谷部君。恐らく君の案ならば帝國は中国と満州、
朝鮮を同盟国にできるだろう」

井上が長谷部の案を褒める。

「本当ですよ！ いやはや、一介の研究者にしておくのが惜しいですな」

若干興奮気味になっている板垣が言う。

「私もこの案は非常に気に入りましたよ」

石原が言う。

「恐縮です。それでは、皆様この案にご賛同いただけますね？」

当然という表情で三人が頷く。

「それでは続きまして皆様にさせていただきたい事をご説明したいと思います。まずは井上閣下から」

「ああ」

思わず居住まいを正す井上。

「閣下は以前空軍の創設を目指していた時期がございましたよね？」

「ああ、昔の話だが、それをもう一度やれと？」

「はい。もちろんそれなりの条件作りはこちらで致します」

「具体的には？」

長谷部の提示する案がどんなものなのかに興味を覚えた井上が思わず身を乗り出す。

「空軍を構成するのは高性能な航空機とそれを運用できる高度に訓練された軍人です」

「まさか各基地の稼働率を落としてまで人員をここで研修させている理由は…」

「その通りです閣下。」

電索を使用した早期警戒体制の確立、特殊通信機を使用した通信の確保及びそれを使用した連携攻撃の訓練、次々と開発されていく攻撃機や試作爆撃機。

全ては来るべき空軍創設のための布石です」

「そうだったのか・・・よし、可能な限りの力を投入して空軍創設を実現させよう」

空軍創設と言う大きな目標を持ったからなのか、井上の言葉には力が満ち溢れていた。

「私の協力が必要な時はいつでも言ってくれ。圧力でも根回しでも何でもしよう」

統幕議長が言う。

「はっ、ありがとうございます」

頭を下げる井上。

「裏金でも運転資金でも、金に関することならば私どもにお任せください」

長谷部が言う。

「すまない」

「「佐官連中はお任せを」」

佐藤大佐と板垣大佐、そして石原少佐が口を揃えて言う。

「わるいな」

「いえ、とんでもないです」

恐縮する三人。

大将閣下に礼を言われるなど生きていてそうそうあるものではない。
い。

「それでは続きましては板垣大佐と石原少佐殿ですが、お二人には満州国建国と中国問題を担当していただこうと思います」

「具体的には？」

資料をめくりながら石原。

年表や解説に自分の名前がないか探しているのである。

「お二人は昭和6年9月18日に奉天北部にある柳条湖付近の満州鉄道を爆破、それを中国軍の仕業として攻撃し、かなりの長期にわたって行われる事となる日中戦争の原因の一つである柳条湖事件を引き起こしています。」

しかし、これはまずいのです」

「あった、これか」

ようやく年表に自分の名前を発見する。

しかし、解説や資料を見た感じではあまり良い事ではなかったらしい。

「我々はどうしたら良いのだ？」

板垣が尋ねる。

「まずは満鉄爆破のやり方を変えるところからいききたいのですが、その前にもっと重大な問題があるのです」

「なんだ？」

重大な問題と聞いて今度は井上が身を乗り出す。

「実はですね・・・」

長谷部は独特の口調で近いうちに起きるある事件の事を話し出した。

『南京事件』、蒋介石率いる北伐軍が南京に入城した際に、200名以上の武装した兵士が日本領事館へ突入し、内部に保護されていた非武装の居留民達に対して略奪や暴行を行った事件のことである。

長谷部は、このような日中関係樹立を妨害するような事件はそれなりの手段を用いて絶対に起こしてはならないと決めていたのだ。

そこで日本軍から伝令を派遣し、事件発生前に蒋介石へ事件を伝え、好印象を与えると同時に恩を売っておくという策略を考え付い

た。

策を思いついた後の彼らの行動は実に早く、完璧だった。任務に必要な戸籍をでっち上げ、必要な物資や人員を裏金で用意し、往復用の足を確保する。

驚くべき事に、着手から二日後には全ての準備を整えた部隊が密かに日本海上を進むまでに至る。

昭和2年3月24日 南京日本領事館

早朝の領事館周辺に、中国国民党軍の格好をした兵士達が大勢集まっていた。

完全武装しているところから、市内観光をしているようには見えない。

兵士達が領事館を包囲するように展開を終了してから暫くすると、偵察に出ていた兵士が指揮官の所にやってきた。

「やつらは朝飯の支度をしているようです。煙突から煙が出ています」

「そうか、五分後に攻撃する。全員へ連絡をしろ」

「はっ」

敬礼をして伝令に出て行く兵士。

それを見送りながら指揮官は傍らの副官に言った。

「日本人の奴等、見張りも立てずにのんきに朝食とはたるみきつてるな」

「そうですね。まあ、たるんでくれた方がやりやすいですけどね」

「まったくだ。さて、攻撃の用意をするか」

荷車においてある小銃を取りに行く二人。

「突撃！！」

破壊された門の上で小銃を撃ちながら指揮官が叫ぶ。

直ちに兵士達が雄叫びを上げながら領事館の中に飛び込んでいく。兵士達は、日本人に対する虐殺や略奪、陵辱などおよそ戦争犯罪と呼ばれるような事は全て許可されており、その士気の高さは異常とも呼べるほどのものだった。

たちまち領事館各所から銃声や物が破壊される音が聞こえ始める。しかし、いつまで経っても日本人の悲鳴が聞こえてこない。

「何をしているか！？日本人はどこだ！！」

正門の残骸に仁王立ちした指揮官が叫ぶ。

「こっちだよ」

振り向いた先には、いつのまにか現れた大部隊がいた。

こちらへ銃を向けているところを見ると、味方では無いらしい。

指揮官は、自分の目の前が真っ暗になったような絶望感を覚えた。

「クソッ」

顔をゆがめながら忌々しそうに呟いたのは、中国国民党の指導者蒋介石である。

南京に入城した蒋介石は、直ぐに面会を求めてきた石原少佐から事のあらましを聞き、慌てて信用の置ける部隊を引き連れてここへやってきたのだ。

「いかがですか蒋介石閣下、共産党軍の連中はこのような姑息な手を使ってでも閣下を陥れたいのです。」

我々が事前に情報を手に入れたから良いものの、もし万が一我々が情報を手に入れていなかったら、閣下は世界中からいわれのない罪を問われる事になっていたでしょう」

蒋介石の隣に立っている石原少佐が言う。

今回は極秘の任務なので私服姿をしている。

「なるほどな、協力に感謝する」

少佐の方は見ずに蒋介石。

「全員捕まえろ！はむかう奴は殺してかまわん！！」

蒋介石が叫ぶと同時に、大使館を包囲していた部隊が一斉に内部へ突入し、既に観念して武装を放棄した共産党の手下達を捕らえていく。

「しかし分からね。なぜこの情報を私に知らせた？知らせなければ、私を悪人にして堂々と宣戦布告ができるのに」

「それはですね。帝國は閣下を中国の支配者として認め、あなたが国家主席の座に着くまで支援すると決めたからですよ」

先日の会議でしか決まっていけない事を、まるで国策として決定している事であるかのように少佐が言う。

「なにっ！？帝國が？……ふふふ、そうか、帝國が私を認めたか」

「そうです閣下。そこで、二つほどお願いがあるのですが」

「言ってみろ。しかし、北伐をやめろというのは無しだぞ」

「はい、そもそも帝國は北伐によって閣下に害意を抱く連中が一掃され、それによって閣下を中心とする中国国民党政府が国内唯一の正当な政府として確立される事を強く望んでいるのです。反対する理由など微塵ありません」

相手をいい気にさせるためにひたすら蒋介石を褒めた後、すかさずこちらの要望を言う少佐。

「実はですね、満州を帝國に譲っていただきたいのです」

「満州を？」

「勿論ただでは申しません。

承認の条件として。先ほど閣下にお見せした零式小銃を初めとした帝國の兵器を市場価格の半額でほぼ恒久的に提供させていただきます。

また、統幕議長直轄部隊秘匿名『鷹』部隊を閣下の支援に回し、対共産党任務に付けさせます」

秘匿名『鷹』部隊とは、陸軍中野予備校出身の兵士の中から、特に戦闘能力などに長けた人員を集めて作られた特務部隊である。その任務は破壊活動や暗殺といった物から、後方かく乱、強行偵察、空挺降下誘導、撃墜された友軍機操縦士の救出など幅が広い。

「帝國の兵器、か・・・」

従来では考えられないような高性能を誇る零式小銃や今自分が持っている九mm機関拳銃を思い出す。

確かに、これだけの性能をもつ兵器を帝國から安価で購入できれば、この先の共産党との戦いはかなり優位に進むだろう。

だからと言ってフーシュン炭田などがある満州をみすみす渡すと言うのではさすがに計算が合わない。

「ほかに何か条件は無いのか？今のままではどうやっても飲めん」

「そうですねあ・・・分かりました。帝國陸軍より治安部隊を出しましょう」

つまり、帝國陸軍が占領地域の防衛を勤めるので、国民党は拠点防衛の戦力も前線に投入し、心置きなく戦えと言う事だ。

「時間はかかるかもしれませんが、航空機による空襲などでもできるように手配させます。」

また、輸送艦を手配できるようにさせましょう。そうすれば、敵軍の後背よりの強襲上陸などでもできるようになりますからな」

早い話、帝國陸軍は国民党を全面的にバックアップすると言う事だ。

しかし、これには新型兵器の実地試験を行うという他に、陸軍が

新型兵器を有効に運用できるかどうかを試すという裏もある。

「なるほどな、そこまでして貰えるのに首を縦に振らなかったら私は希代の大馬鹿者と言う事になってしまふな」

「では！」

「ああ、満州を帝國に譲渡しよう。いや、むしろこちらからお願いしたいくらいだ」

大佐に握手を求める蒋介石。

それに笑顔で答えながら大佐も手を差し出す。

二人が握手を交わした瞬間、満州が帝國に譲渡される事は決定した。

「ありがとうございます閣下」

「いやいや、礼を言いたいのはこちらだよ。しかし、満州方面を治めているのは張作霖だ。奴は私が満州を譲れと言っても絶対に譲らないぞ」

「はい、そこでもう一つお願いなのです」

「もう一つの願いとは？」

「近いうちに、張作霖の乗る列車が爆破されます」

「ほう」

蒋介石の眉が動く。

「張作霖は我が軍の憲兵によって救出されます」

「そして調査の結果、爆破したのは共産党と言う事か」

「はい」

「それで？」

「救出した後の彼の身柄を閣下に委ねたいのですが・・・」

「消してくれと言う事か」

「そちらの好きなようにしてやってください」

「よかろう」

「ありがとうございます」

当初の長谷部の案では、張作霖は死なないと言う方向だったのに消すのは何故か？

それを説明するのには日本と張作霖の関係から説明しなければならぬ。

日本は日露戦争の時に南満州鉄道の権益を手に入れたのだが、その権益を守るために利用していたのが当時の満州を支配していた張作霖なのである。

しかし、初めは親日だった張作霖は次第に反日になっていき、とうとうアメリカの資本援助の元、条約を破って満鉄と利益がぶつかる『併行線』を建設してしまうのだ。

おまけに満鉄への営業妨害など排日運動を推進する。

当然ながらこんな人物を野放しにするわけにはいかない。そこで、張作霖の排除が決まったのである。

しかし、排除するとはいっても、以前のように明らかに日本の仕業と分かるようなやり方では世界が納得しない。

そこで、わざわざこんなややこしいやり方で彼を消す事にしたのである。

実は、張作霖を消すのにはもう一つ理由がある。

それは、税収のほとんどを軍事費に回し、国民をひたすら搾取する張作霖という独裁者を間接的ながらも帝國によって排除し、民衆を味方につけるためである。

昭和2年4月12日、上海において資本家などの支持を得た国民党が、共産党の弾圧を開始するという事件が起きた。

『上海クーデター』である。

国共合作は崩壊し、国民党は中国正当政府になるために共産党殲滅を開始した。

帝國陸軍の主流である統幕議長派は、国民党に対し全面支援をすることを決定。緊急で開かれた御前会議で陛下のお許しを頂き、国民党支援を開始した。

昭和2年4月16日、武器の友好価格での提供を条件として、蔣介石は非公式ながら張作霖亡き後の満州全域を帝國へ譲渡する事を正式に了承。

日中両国は、この日を境に急速に接近していった・・・

昭和2年4月30日 日本海上 帝國陸軍所属新造輸送艦『満州丸』

満州譲渡の条件として提示された友好価格での武器の提供品の第一陣と破壊された領事館修復のための技術者達を載せた満州丸が日本海上を進んでいる。

軍民から選ばれた技術者や作業員などに混じって、昇進したばかりの海軍省先進技術研究局開発部長、大神一郎大尉の姿があった。どこからか入手した搭乗員リストに長谷部達の名前を見つけた米田が、ある筋を通じて手を回したのである。

「一連の統幕議長派の動きは不自然すぎる。まるで事が起こる事を知っていたとしか思えねえ。

大神、嫁さんには悪いが中国へ行って連中が何をしたいのか現地で見てきてくれ」

出発の数日前に米田に言われた言葉を思い出しながら潮風に当たる大神。

ふと上を見てみると、艦橋の上に見慣れない装置が置かれているのが見えた。

それは現在の船には全て基本装備として設置が義務付けられている水上レーダーである。

それも、巨大な八木アンテナがぐるぐる回るタイプではなく、性能は現代に多少劣るにしてもこの時代では十分オーバーテクノロジーと呼べるサイズに抑えられたタイプの物である。

「すみません」

手短な船員に声をかける大神。

「なんででしょう？」

「操舵室の上にある装置はなんですか？」

水上レーダーを指差して尋ねる大神。

「さあ？この間、統幕会議から来た人たちが付けてったんです」

「そうですか」

涼しい顔でそう答えつつ、頭の中ではどうやってあの装置を調査、あるいは奪うかを計算している。

しかし手持ちの兵力が少ない事、海軍士官として陸軍の船に乗船しているという事を考え、今回は偵察のみで自重する事を決める。

「そういえば、操舵室にも何か付けてましたよ」

「本当ですか？」

「ええ、でも・・・」

船員の言葉を最後まで待たずに大神は操舵室へ向けて走り出した。

「まずいな、操舵室は立ち入り禁止になってるのになあ・・・まあ、いつか」

そんなやり取りがされている時、操舵室では緊迫した空気が流れていた。

5分前に、突如として不明艦二隻が船団8時の方向に出現したからである。

「所属不明艦は二隻ともこちらの通信に応答しません！」

通信士が叫ぶ。

「不明艦二隻は初期の地点から動いていません」

電索監視員が言う。

「どうなってるんだ？こいつらはどこの艦なんだ？」

第一陣責任者の板垣大佐が言う。

しかし、当然ながら誰も答えられない。

「板垣大佐、他の艦の電索にも映っているのかどうか尋ねてみませんか？」

帝國陸軍技術顧問団長に就任した長谷部が提案する。

「そうだな。通信士、すぐに他の艦へ通信を」

「はっ」

通信士が他の艦へ連絡を入れる。

「こちら満州丸。各艦8時の方向に二隻ほど艦船の反応はないか？」

＜こちら第二満州丸。反応ありました＞

＜こちら第三満州丸。反応あります＞

船団各艦から応答がある。

「どうやら機器の故障では無いらしい。」

「民間船舶の可能性は無いですな」

長谷部が言う。

「それは間違いない。民間船舶ならば我が軍の呼びかけを無視するはずがない」

考え込みながら板垣が答える。

「軍艦の可能性は？」

「それもありえませんな。応答しない理由が無い」

「ということは遭難船舶ですかね」

「だとしたら答えは一つしかないな」

彼らの頭の中に、答えは一つしかなかった。

困っている人間がいるのなら、そして自分たちが作戦行動中ではないのなら、それを助けられないわけにはいかない。

「船団の進路を8時に取れ」

「了解」

第十三話『満州丸にて』

大日本重工地下にある特別会議室で決まった方針を、巧みな話術と絶大な権力で国策にする事に成功した統幕議長派。

中国に関しても、南京事件を未然に防ぎ、更にあることないこと言いふらして蒋介石をその気にさせ満州譲渡を承認させる。

新造輸送艦『満州丸』を筆頭に現代の技術を可能な限り盛り込んだ新造輸送艦3隻からなる船団は、国民党と結んだ『日中武器友好価格提供条約』の第一陣を積載し、ついでに艦載レーダーを初めとした新装備の点検なども行いつつ日本海を一路満州へと進んでいた。その進路上に忽然と現れた2隻の不明船。

無線応答が無い事から遭難船舶だと推定した板垣大佐は、船団の進路を不明艦へ取るよう命じた。

昭和2年4月30日 日本海上 海上自衛隊所属LCA C搭載輸送艦『おおすみ』

「島二尉!!」

甲板でなにやら考える顔をしていた島和武二等陸尉のところに三等陸曹が報告に走ってくる。

「どうだった？」

「はっ、海自の方は機関要員と体調不良で休んでいた通信士の有利海士長を含む43名以外は全員行方不明です。」

陸自のほうは先程の点呼の結果118名の所在が判明しています」

敬礼しながら陸曹がはきはきと答える。

「隣の『みうら』の方はどうだ？」

「あちらも状態は似たような物だそうです。115名の定員のうち、現在所在が確認されているのは機関要員とリーダー監視員のみ、残りは陸自隊員だけだそうです」

「分かった、これより状況報告を行うので全員を甲板に集めてくれ」

「了解！」

敬礼をした陸曹は来た時と同じように走っていた。

すると今度は、島の補佐役を務めることになった三尉が小走りで行ってきた。

「通信はどうだ？」

僅かな期待を込めて島が言う。

「駄目ですね。装置がともに機能しているのは確かなんです。チェックルーチンも問題なく機能します。GPSの方も同様です。ですが……」

当然ながらおおすみには通信機が搭載されている。

島はそれを使って海上自衛隊に救援を要請するように命じたのだが、GPS、通信機共に発信はできても返信が無かった。

一瞬で日本全土が壊滅したのか？

いや、仮に100歩譲ってそんな事態が起きたとしても、GPS

の応答が無い理由が見つからない。

「まずいな、これから状況報告を行う予定なんだが・・・」

「言わない方がいいですね。隊員達にこれ以上不安を与えたのでは何が起こるかわかりません」

「船の動力の方はどうだ？」

「機関要員がいるので『おおすみ』も『みうら』も問題ありません。しかし、艦長や操舵手が行方不明なので、航行するとなると大変そうです」

「ということは動力源は確保できたんだな？」

「はい」

「しかたない、通信機たちには死んだふりをしてもらおう。このことを知っている隊員には誰にも話さないように厳命しておいてくれ」

「はっ」

「陸自180名！海自80名！うち負傷者16名、いずれも軽傷！」

補佐役の三尉が叫ぶ。

「自分は中隊補佐役の島和武二尉だ！いろいろと混乱するような事態が起きているため、現在にいたるまでを確認する。」

本日0705時、北朝鮮の発射した核ミサイルを迎撃するために、艦隊が対空ミサイルを発射したのは諸君らも覚えていると思う。現在、核兵器の影響と思われる通信機器やGPSの異常のため、本艦は航行不能となっている。併走する輸送艦みうらも同様だ。行方不明になった海自隊員や藤原中隊長殿の身柄を探しつつこの場で救援を待つ！なお、艦内設備は問題なく動くので安心して欲しい。以上だ！」

「敬礼！解散！！」

再び三尉が号令をかける。

敬礼をすると、隊員達はあらかじめ決められた分担場所に駆け足で走っていった。

「島二尉！！」

まるで状況報告が終わるのを待っていたかのようなタイミングで携帯無線機が叫ぶ。

「どうした？」

「至急艦橋へ！」

「わかった」

答えた島は大急ぎで艦橋に向かった。

ラッタルを駆け上り、開きっぱなしのハッチに飛び込む。

艦橋は、先ほどの異常事態を髣髴とさせる騒ぎっぷりとなっている。

「こちらです!!」

説明書と格闘しながらレーダースコープにかじりついている海自隊員が叫ぶ。

「なんだ？」

「これです、2時の方向」

隊員が指差したところには、接近しつつある3隻の艦船が映っていた。

そう、長谷部たちの船団を、彼らのレーダーが捉えたのである。

「長谷部技監・・・」

双眼鏡を覗いていた山口が長谷部を呼ぶ。
その声音は妙に低い。

「なんですか？」

「これを見てください・・・」

「?？」

やけに無表情な山口が双眼鏡を渡す。

受け取って、前方に見える不明艦2隻を見つめる。

片方は軽空母と思われる全通甲板を持っていて、もう片方は中くらの輸送艦と思われる。

国旗などを見てどここの海軍か確かめようとした長谷部は、信じられない事実を3つほど発見した。

一つ目は、軽空母もどきの方にCIWSに非常に酷似した物がついていること。

二つ目は、艦舷に白いペンキで書いてある艦番号が4001と、4151である事。

これは2隻が海上自衛隊に所属しているLCC搭載輸送艦『おすすめ』と輸送艦『みうら』であることを示している。

三つ目は、全通甲板の上に載せてある車両が、89式戦闘装甲車や73式トラック、すなわち陸上自衛隊で使われている兵器にしか見えないという事である。

「・・・・・・・・」

3つの発見から導かれる答えに言葉が出ない長谷部。

「自分の目が正しければ、あれは海上自衛隊の『おすすめ』と『みうら』です」

訓練などで乗船した事がある山口が言う。

「直ぐにコンタクトを取りましょう！」

早くも通信士のところに向かいながら長谷部。

「<こちらは技術研究本部長の長谷部技監です。おすすめ応答願います>

いきなり入った通信に、おおすみ艦橋は大騒ぎとなる。

「し、島二尉！」

突然の入電に驚いた通信士が慌てて島を呼ぶ。

「わかってる」

レシーバーを受け取り、マイクを口元へ持っていく。

「こちらはおおすみです。

現在艦長以下艦橋要員が行方不明の為に、同乗していた陸上自衛隊の中隊補佐役である自分が臨時で責任者を勤めております」

＜そちらは航行可能なんですか？＞

「機関は問題なく動くのですが、操舵手などがいない為に航行は不可能であります」

＜了解、その問題はこちらで何とかしましょう。現状にて待機してください＞

「了解」

＜通信終了＞

通信を終えた長谷部は、板垣大佐に頼んで輸送船団の中から操舵手として使う事ができる人間などを2隻分用意させ、それに加えて

陸自の人間との橋渡し役として山口を連れて行く事にした。

「後どのくらいですか？」

長谷部が輸送艦の艦長に尋ねる。

「そうですね、こいつに付いてる新型機関ならばあと40分って所ですかね」

「わかりました。以後はあちらの艦の移る予定なので、楽しい船の旅も残すところ40分と言う事ですな」

「いやいや長谷部さんの『通商破壊に対する対策』ってのは勉強になりましたわ。またご縁がありましたらお聞かせ願いたいですな」

「内地に戻ったらいつでもどうぞ。大日本重工八王子本社に来ていただければ、用事が無い限りはいつでもお会いしますよ」

「そうですか。それじゃあそのうちお話をお伺いにも行きますわ」

「はい」

おおすみと満州丸が日本海上にて合流したのは、それからきっかり40分後であった。

ちなみに、意気込んで操舵室に突入しようとした大神は、あっさりと警備兵に押し戻されていた。

「島和武二等陸尉であります」

「技術研究本部長の長谷部です」

「山口三曹であります」

おおすみの甲板上でお互いに敬礼しながら自己紹介をする3人。

「早速ですが現状を説明します」

艦橋へ向かう通路を進みながら長谷部が言う。

「いきなり結論から言わせて頂くと、現在は昭和2年です」

「!？」

さすがに驚きを隠せない島。

機器に異常が無いのにもかかわらず無線やGPSに応答が無いところから何かしら異常事態が起こっているのはわかっていたのだが、よりにもよってタイムスリップという答えが返ってくるとは思わなかったからだ。

「信じられないでしょうな。しかし、これが事実です」

「し、しかしですな・・・」

「一瞬にして世界中と全てのGPS衛星が壊滅して、生き残りが冗談を言いにくるというのよりは説得力があると思いますよ」

「まあ、そうりゃそうですけどね」

島は未だに納得がいかないようだ。

「まあ、全ては満州に着けば分かりますよ」

「ま、満州ですか？」

「満州です。あ、そうそう、そちらに施設科がいるようでしたら貸していただけますか？満州に入ったらいろいろと建設したりしなきゃいけないものがあるんで」

「は、はあ」

早くも長谷部のペースに飲み込まれつつある島。

それを見ながら、やっぱり長谷部は凄いと思う山口だった。

長谷部たち一行は手早く指揮系統の掌握と目録の確認を行い、次いで内地に連絡を取って島たちの身柄を確保するための諸手続きを佐藤に依頼する。

あれこれとあったが他には特に問題もなく航海は進み、長谷部たちは遂に中国へと上陸した。

先に現地入りしていた部隊と合流し、車両その他に簡単な偽装を行った後、彼らは『おおすみ』や『みうら』に搭載されていた一部の車両や施設科を引き連れて大陸の中へと消えていった。

「大神大尉殿」

南京領事館修復作業を見守っていた大神のところへ、海軍の下士官がやってきた。

「なんだ？」

「申し訳ありません。連中の所在は未だに掴めません」

「そうか」

「もてる限りの手段を駆使してはおりますが、憲兵隊が連中に賛同する動きを見せていますので・・・」

「まあ仕方が無い。統幕議長派の力は強大だからな。ところで米田支配、ああ、閣下からの伝言は？」

「いましばらく大陸に残って事が起こるのを待てとのことですよ」

「わかった」

「それでは失礼します」

敬礼をして走り去っていく下士官。

「長谷部一派は一体どこへ行ったんだ？」

思わず疑問が口に出る大神。

彼の疑問に回答が得られるのは暫く後のことである。

昭和2年6月10日、領事館修復現場警備の名目で強引に大陸へ居座っていた大神は、海軍省からの命令により内地へと戻される事となった。

先進技術研究局開発部長としての任務を全うするためだ。

「!？」

内地へ帰還して直ぐに元の職場を訪れた大神は驚いた。

以前のやる気の無い兵士達の姿はどこかへ消え去り、見た事も無い士官や兵士達が忙しそうに働いていたからである。

「大神大尉殿でありますか？」

見慣れない軍曹が大神に敬礼する。

「そうだが君は？」

「切目軍曹であります。前任者に続いて大尉殿の補佐役を勤めさせていただきます」

「そうか」

前任者の顔を思い出そうとするが、名前も姿も浮かんでこない。まあ、やる気も能力も無い部下だったので気にする必要もないかと割り切る。

「しばらく任務で離れているうちにずいぶんと大幅な人事異動があったみたいだな」

「はい大尉殿、私の知る限り、前任者達はほぼ全員が辺境基地などに飛ばされたようです」

「そうか、ところでなにやら忙しいようだがどうしたんだ？」

それを聞いた切目は目を丸くしたが、相手が内地に帰還したばかりだと言う事を思い出す。

「申し訳ありませんでした大尉殿。海軍省からの命令書をお見せしていませんでしたね」

「ああ、到着しだい受け取るように言われたが、君が持っているのか？」

「はい大尉殿、こちらであります」

大神に1枚の命令書を渡す切目。

そこには『陸軍からの提供技術に基づく防空・水上電波索敵装置の開発』と書かれていた。

「なにも言わんでやってください。電索に関する技術は陸軍と大日本重工しか持っておらんです」

書類を見ている大神の表情を見た切目が言う。

「よく分かったな」

驚いた表情の大神が言う。

「いえ、上官の考えていることを多少は読めるようでないと補佐役は勤められませんから」

涼しい顔で流す切目。

20代後半と見えるが、かなりのやり手のようだ。

「ん？確か八木アンテナは三菱の特許じゃなかったか？」

古い記憶を呼び戻す大神。

「いえ、去年大日本重工が立ち上がると同時に同社に移動しています」

「本当か？」

「はい」

「・・・まあいい、それで？陸軍の連中から貰った兵器というのは？」

「こちらです、ご案内します」

大神の前に立って軍曹が案内する。

銀座研究所と比べると手狭に感じるが、それでも歩いて移動するには広すぎる。

夏の暑い陽射しが降り注ぐ中、二人は汗一つも流さずに歩き続けた。

「こちらです」

その倉庫は、研究局の狭い敷地の外れにあった。

隣接して設置されている物置のような研究室に入ると、むせ返るような熱気が大神達を迎えた。

「大神大尉殿である！敬礼！！」

切目が叫ぶと、暑さでダレかけていた研究員達が慌てて立ち上がり敬礼する。

「あ、切目君。そんなに硬くしないでいいから」

「はっ！わかりました。休めえ！！」

切目が再び命令すると研究員達は休めの姿勢をとった。
どうやら大神の言いたい事を理解していないらしい。

「電索の研究はどうだい？」

手短な研究員に尋ねる大神。

「はっ、現在陸軍の連中から受け取った資料を元に試作機を製造しているところであります」

大尉という雲の上の人物に声を掛けられ、思わず答える声が1オクターブほど高くなる研究員。

その言葉に机の上を見てみると、確かに海軍の物とは書式が違う書類がちらほら見える。

「進んでいるのかい？」

「はい。陸軍の連中とんでもない真空管を作ったみたいなのです。
これを使えば既存の装置も今までの数倍の性能が出せる事間違いないです」

「そうか、みんな暑いと思うけど、頑張ってくれ。今日は忙しそう

なんで帰るけど、またそのうち来るよ」

「大神大尉殿に敬礼！！」

大神が部屋を出ようとしている事に気づいた切目が号令をかける。

「いかがでありますか？」

ガラスの仕切りで総務室と仕切られた技術部長室に戻って椅子に座ると、待っていたように切目が尋ねた。

「みんな張り切ってるじゃないか」

「はい」

切目はやや浮かない表情をしている。

「なにか問題でもあるのか？」

切目の表情に気づいた大神が尋ねる。

「どうやら銀座研究所の連中は、陸軍の新造輸送艦に実用化段階に達している艦載電索などを搭載しているようです」

「それは本当か！？」

既に現物を見ているが、あえて知らなかったかのように大声を出してみせる。

ガラス越しに聞こえた大声に反応した総務課員達が一斉に視線を伏せる。

なにやらまずい事態が発生したと判断したからだ。

「あ、すまん・・・その話の出所は？」

「大急ぎで陸軍の輸送艦にそれを設置した工員の一人です。どうやらあまりに急だったために、十分な防諜措置が取れなかったのでしょう」

「そうか、この話は研究員達には？」

「しましたよ」

さらっと答える切目。

「なぜだ？そんなことを言って・・・」

「そんな事でやる気をなくするような奴がいるとしたら、そんな奴は必要ありません。」

我々は海軍軍人です。

陸軍の連中が作った技術を基礎原理すら理解せずに学校のようにただ教わるだけなど納得がいきません。

それに、こう言う事は黙っているよりあえて教えた方が役に立ちます」

「しかしだね・・・」

「陸軍の連中とて馬鹿ではないのです。必要になればきちんと然るべき処置をとるでしょう。」

そのときにウチの研究員達は何も知らされずに蚊帳の外に置かれていたと知ったら、そっちの方が傷つきます」

「言われてみるとそうだな。すまない」

「いえ、しかし・・・」

答えると同時に何かを言いかける切目。

「しかし？」

「電索の搬出やなにやらで銀座研究所に出入りする事が多かったためなのか、時々自分は思うのです。

我々が劣っているのではなくて、陸軍の連中が『異常』なのではないかと」

「・・・・・・」

「あ、いえ、くだらない事でした。失礼します」

敬礼をすると慌てて部屋を出て行く切目。

残された大神はそれに気づかず、なにやら難しい顔をして考え込んでいた。

第十四話『61式開発計画』

二隻の輸送艦とそれに満載された陸上自衛隊を新たに仲間に入れた長谷部たちは、陰謀渦巻く中国大陆へと消えていった。

長谷部たちの輸送艦に同乗して動向を探ろうとした大神であったが、現地での協力者の確保に失敗したために長谷部たちの行方を掴む事ができない。

一ヶ月以上も大陸に居座るが、大神本来の役職である先進技術研究局部長としての任務を海軍省から与えられ、急遽内地に戻される。大神の新しい補佐役である切目軍曹から命令書を渡された大神は、自分達に与えられた課題を知る。

『陸軍からの提供技術に基づく防空・水上電波索敵装置の開発』
電索の研究が、ついに海軍でも始まったのである。

「高橋主任、いけますかね」

物陰から大介の動きを見守っていた柴田が斎藤に言う。

その声は低く、そして小さい。

実はこの日一日、彼らは圧倒的に強力な『敵』と戦い続けており、疲弊しきっているのだ。

「どうだろう？しかし、ここで失敗したらこの部屋から脱出できなくなるかも」

「ええ、ぜひとも成功してもらいたいところです・・・お、覚悟を

決めたようですよ」

大介が意を決してボタンを押す。

PON!

軽快な電子音が鳴り響き、書類を映していたモニターにメッセージが現れる。

『一般保護エラーです』

「ああゝ!!」

ディスプレイに例のあの音と共に表示されたウインドウを見た大介が悲鳴を上げる。

「あゝもう高橋主任!なんでそんなにできないんですかあっ!?!」

キレた鏡花が叫ぶ。

「どうして文章保存で失敗するんですか!?!もう他の研究員の方々は表計算に入ってるんですよ?」

大陸派遣隊が戻るまでに皆さんに最低でも一通りの書類を自力で作成できるようにしてもらわなければいけないというのに・・・

「す、すいません」

申し訳なさそうに大介。

彼がパソコンを使いこなせるようになるには、しばらく時間がか

かりそうである。

時は流れて同年6月、御前会議にて空軍創設の御聖断が下された。その背景には佐藤大佐の暗躍や統幕議長の尽力などもあったが、最大の後押しとなったのは、航空機が兵器として十分な能力を持ったという認識を陛下がお持ちになられたことである。

井上大將はニコニコしつつ空軍の最高位に着き、統幕議長の庇護の下、これはという人間を手当たり次第に配下へと迎え入れ始めた。彼の暴走はそれだけにとどまらず、パイロット採用を前提とした一般人からの募集（徴兵ではなく募集）、民間企業を招いての飛行および整備体験など、通常の軍隊とは思えない行動を取り続けた。陸海軍からはかなり嫌な目で見られている結果となったが、結果として新設の軍とは思えない勢いで空軍の機能拡張は推し進められていった。

6月も末になった25日、長谷部率いる大陸派遣隊が途中で合流した陸上自衛隊を連れて帰還した。

陸揚げされた装備は大日本重工本社に收容される事になったのだが、米田配下の者との接触を極力避けるために、輸送は深夜に人目を忍んで強行された。

昭和2年6月27日 大日本重工八王子本社

「89式小銃が実用化できるようになっていたとは驚きました」

会議室で今までのいきさつを説明された島は、部屋の隅で書記が使っているワープロを横目で見ながら言った。

「ええ、思ったより鉄鋼技術の向上や工作機器の精度向上がスムーズに進んでくれたお陰です」

エアコンの調節温度を下げながら長谷部が答える。

CPUを初めとした精密電子機器の生産が本格化したために武器以外のさまざまな装備や設備にも目を向けてみた結果である。

「しかし昭和2年でエアコンにパソコンですか、日本が自前でイージス艦なんかを揃えるのもそう遠い日じゃないようですね」

「そこまでいけたらいいんですがねえ、なにしろフェイズドアレイレーダーってのはとにかくわけのわからんとこだらけでして、まあ気長にやってはみますが」

「しかし、現時点で74式戦車があるという事は、少なくとも第二次大戦は余裕で乗り切れるのではないですか？」

「この時代で74式を作れるという事は確かに大した事ですが、それは目標の一つでしかありません」

「というと？」

「74式はあくまで『大日本重工』という企業が平成の知識を元に作ったものです。

他の企業は当然ながら我々の世界での昭和2年と大して変わらないようなものを作っています。

まあ、蒸気機関が異様に発達しているのでまったく同じとは言いませんが・・・」

「ようするに、日本中の技術力を軒並み向上させたいのですね」

島は思ったより理解力があるようだ。

「あなたが相手だと話は早いですね。その通り、それが私の目的です」

「しかし、基礎技術力を上げるとは言っても、具体的にはどうするんですか？」

「とりあえず現時点で我々が行っているのは、安価で誰でも使えるような高精度工作機械の開発です」

「つまり、今まで手作業で行われていた作業を機械で行うようにして精度の向上を行うと？」

「まさにその通りです」

嬉しそうな顔で長谷部が言う。

「勿論ながら安価で高性能な物を作るわけですから、そうそううまくはいかないですが、まあそれは時間が解決してくれるでしょう。」

この時代の人たちは、思っていたよりも優秀ですから」

「しかし優秀すぎて困る者もいると？」

島の鋭い突っ込みに長谷部が目を丸くする。

「やれやれ、そこまで気づいていましたか」

首を振りながら長谷部。

「気づきますよ。わざわざ深夜に列島横断なんかさせられれば」

「他の隊員の皆さんはその事は？」

「気づいていないはずですよ。それより昭和に来てしまった事の方が重大問題ですからね」

「それは良かった。」

簡単に言って、現在陸軍内部は大まかに分けて二つに分かれています。

一つは陸軍の主流となりつつある統幕議長派、もう一つは日露戦争の英雄の米田中将を中心とする米田派です」

「我々はどっちなのですか？」

「我々は統幕議長派の権力の庇護の元、比較的やりたい放題をしています」

「米田派はそれが気に食わないと？」

「いいえ。聞いた話以外に判断材料がないので断定はできませんが、それを話半分に聞いたとしても米田中将は立派な人間です。

人間としても軍人としてもかなり優秀な部類に入るといえます。くだらない権力闘争や好き嫌いなどで問題を起こすような人物ではないでしょう」

「それでは何故？」

「まあ、人間として当然の行為をしているというところですかね」

「????」

「例えば、ある日突然現れた謎の集団が、行動の是非はともかくとして自衛隊内部を掌握していったら・・・あなただったらどうします?」

「警戒心を抱きますね・・・なるほど」

「そういうことです」

「しかし何故米田中将をこちらへ引き込まないのですか?」

「まあいろいろあるんですよ」

「はあ」

「それに主流が味方についた今、わざわざ無理に仲間を増やす暇があったら、民間に力を入れたほうがよいとも思いました」

「なるほど」

「それにしても貴方方が来てくれて助かりましたよ。お陰でディーゼル機関やガスタービン機関についての研究がやりやすくなった上に、建設業界なんかでも機械化がより早く推進されそうですから」

「施設科のお陰ですね」

「ええ」

73式ダンプや資材運搬車、75式ドーザ、そして最新鋭の施設作業車。

現代では当たり前のように日本中に配備されているこれらの建機は、輸送船団に乗っていた建築関係者を魅了した。

場合によっては従来の半分以下の工期でも建設が可能な建機の特許を取るために、神崎重工や三菱重工などを初めとした多くの企業が水面下で行動を開始したが、彼らはそれらの特許は全て大日本重工の物である事を知らなかった。

「長谷部社長。三菱重工の鈴木様が応接室にいらっしゃってますが？」

社長室にある大きな窓から眼下に広がる敷地を眺めている長谷部に鏡花が声をかける。

「ん？ああ、今行くよ」

ぼーっとしていたのかやけにのほほんとした声で答える長谷部。

執務机に散らばった書類の中から三菱重工の提案書を探し出すと、椅子にかけてあった背広を着て応接室へ向かう。

「遅れて申し訳ありません」

頭を下げながら応接室に入る。

「これは長谷部社長。お元気そうで何よりです」

慌てて立ち上がって挨拶をする三菱の社員。

「あ、そんなお座りください」

自分も座りながら相手にも座るように促す。

「はい・・・単刀直入になってしまいましたが、我が社の提案はいかがでしょうか？前にもお話したように、決してそちらに不利益が生じるような物ではないと思うのですが」

「ええ、ざっと見た通りではそのようですね」

「それでは・・・」

「まあ待ってください。前回の時もしましたが、業務提携を持ちかけているのは貴方方だけではないのです」

「ですから他社が提示した条件を上回る物を出せる用意がこちらにはあると言っているじゃないですか」

「そう熱くならないで下さい。貴方方と同様の申し出をするところがある一つあるのですから、こちらとしては簡単に決めるわけにはいかないのです」

「それはどこなんですか？」

「天下の三菱さんと競えるところなんて一つしか無いでしょう？」

「・・・・・・神崎重工、ですか」

「そうです」

神崎重工とは、陸海軍に配備されている一部の兵器を製造しているだけではなく、蒸気汽船による海運や蒸気自動車の製造など数多くの部門を持つ巨大企業である。

現在の社長は神崎すみれ。

元帝國歌劇団のスターであり未だに独身の彼女のファンは多い。

「またあそこか」

苦々しげに呟く鈴木。

「そう言えば三菱さんとはいつも揉めていましたね」

「ええ、事あるごとにウチに突っかかってくるので、困っているのですよ」

苦笑しながら鈴木が答える。

「お互い大企業ですからね。対抗意識に燃えているのでは無いですかね？」

それを聞くと鈴木は恐ろしく嫌そうな顔をした。

「勘弁してくださいよ。あっちは新興の成金ですよ？いくら財力が拮抗し始めようと伝統も格式もある我が社と同列に置かれては困ります」

「ああ、それはすいません」

苦笑を浮かべながら長谷部が言う。

しかしその心の中では『ウチも新興の成金だよ』とやや怒り気味である。

「確かに技術力の高さは認めますけどね。それだけですよ」

「はあ」

あいまいな返事をしつつも『ウチも技術だけだよ』と心の中で呟く。

「あそこの社長は今日も来るんですか？」

鈴木が尋ねる。

「いえ、今日は来ないです。しかしあそこは限度と言うものを知らないのですかね？」

月に十回以上会談の申し込みをしてくる神崎重工の応対に疲れ果てていた鏡花が頷きながらコーヒーを出す。

「どもども、ありがとうございます」

頭を下げつつコーヒーをすすする。

「うーん、鏡花さんのコーヒーはいつ飲んでもおいしいですなあ。

長谷部社長が羨ましいですよ」

笑いながら鏡花のコーヒーを褒める鈴木。

「ありがとうございます鈴木様」

嬉しそうに鏡花。

「しかしですね、それはまあ仕方がないといえるでしょう。

貴社が特許を抑えている建設用重機関連の製造許可さえ頂ければ、この不況で徐々に悪化し始めた業績を当分の間抑える事ができますからね」

「なるほど、確かに言われてみればそうですねえ」

「あの、長谷部社長。そろそろ軍部の方々が見える時間なのですが・・・」

恐縮した感じの鏡花が声を掛ける。

「おや、もうこんな時間ですか。それでは長谷部社長、よい返事がいただけることを祈っております」

「ははは、善処はします。それでは鏡花君、鈴木様をお送りして」

「かしこまりました。鈴木様、こちらへどうぞ」

「では」

鈴木が出て行くのを確認すると、長谷部は自分の執務室へと戻った。

鍵のかかる引き出しを開けてノートパソコンを取り出すと、手早く今の会談の内容を記入する。

書類やメモに残しておく、万が一盗まれた際に非常に厄介な事

になるからである。

昭和2年7月上旬、蒋介石率いる北伐軍は史実よりも一ヶ月早く山東省付近まで進撃していた。

安価で高性能な零式兵器群の大量供給と、占領地を日本軍が固めてくれるために補給や後方警備の為に兵力分散が必要なかった事が主な理由である。

史実では、ここに多くいる日本人居留民保護の為に陸軍が派遣され中国との関係悪化に一役買ったのだが、この世界では国民党との関係が非常に良好なためにそのような意見は出なかった。

何しろ国民党は日本との間で結ばれた『占領地治安維持部隊』が日本から到着する一週間後までの間、一個大隊を共産党軍を初めとした敵対勢力からの居留民防衛部隊として供出してくれたのだ。

その背景には日中両国間の強固な友好関係があった。

誠実で有能な日本軍輸送部隊は、銃弾が飛び交う最前線にも確実に言ったとおりの日時に要求された量の物資を届けてくれたし、辺境地域出身の兵士の家族への軍事郵便も受け持ってくれた。

時には少し多めに武器弾薬を持ってきたりすることもあったし、余裕があるときには酒なども届けてくれた（ちなみにその酒は不況にあえぐ日本の酒造から買い上げたものである）陸海軍から派遣された軍医官達は進んで最前線での野戦病院勤務を望み、もてる限りの知識を利用して多くの国民党将兵を救った。

厳選なる審査の後に回されてきた陸軍治安維持部隊は『博愛・公平・潔癖』をモットーに、二重の内部監査機構の監視のもと、公平かつ人道的な治安維持を実行した。

跳梁する馬賊の徹底弾圧。各村への分隊規模での駐屯と無線所の設置、現地警察への憲兵隊の捜査協力、横暴な日本商社の摘発・・・

全ては己の職務を果たしているだけなのだが、これらは中国人民達の目には聖人君主のように映った。

結果として日本陸軍は貴重な実戦を経験できた事となり、大日本重工は新兵器の貴重な実戦データ収集が十分でき、中国国民党は大量の占領地と強力な武装、そして強大な友好国を、帝國は中国との友好関係の他に現時点では非公式ながら満州を手に入れられることとなり『日中武器友好価格提供条約』は万人がそれぞれ納得のいく状況で進んでいった。

昭和2年9月、陸軍統幕議長派と空軍上層部をわざわざ大日本重工地下会議室へ呼び出しての第二次政策会議が開かれた。

そんな重要な会議がわざわざここで開かれた理由は単に機密保持がしやすいからである。

今回の会議では高すぎる零式兵器群についての価格交渉と空軍からの重爆撃機の開発依頼が主な議題であった。

最初の議題は零式兵器群、それも零式重戦車の価格についてだった。

いくら機械によってある程度生産が自動化されている為にコストが落ちたとはいえ、105mm砲を装備した大型戦車の値段は莫大であり、首都や前線などに限定して配備するだけでも陸軍の年間予算を使い切ってしまうと言うのである。

これに対して大日本重工は、現状でも当該戦車の製造ラインは赤字すれすれであり、これ以上の価格引下げには同意できない。

また、現在の技術レベルでは大幅なコストダウンは難しい、と徹底抗戦の構えを見せた。

話し合いの最中に技術者側から何度か反抗的な態度が見られたために激昂した陸軍青年将校が立ち上がるというトラブルがあり、一

時会議室内は非常に重い空気で包まれたが、長谷部の出した代用案『低成本中戦車開発案』によって問題は一挙に解決した。

高価な74式戦車（この世界では零式重戦車）はあくまで本隊などが装備するいわば『戦艦』であり、全国的に配備されるのは『巡洋艦』（といっても未来から見れば、の話である）クラスの61式戦車にしようというのである。

もちろん高価な事に変わりは無いが、それでも前より遥かに安価でかつ早く新型戦車が手に入るこのプランに陸軍は大いに満足した。

次の議題は空軍からの重爆撃機開発依頼だったが、空軍創設前から航空機の開発を進めていた大日本重工では、既に四発の大型爆撃機開発に入っていたので、これについては後日報告書を提出すると言う事で決着がついた。

あっさりと終わった会議だったが、この会議は大きな波紋を呼んだ。

陸軍と空軍トップが一つの企業に集まると言う異常事態に海軍が目をつけ始めたのである。

それも東郷平八郎や山本五十六と言った海軍トップ達が疑いを持つと言う最悪の展開であった。

しかし、陸空軍が揃って『何もない』と否定した為に、今回は疑惑を残しつつも事なきを得た。

時は流れて昭和3年2月。

雪のちらつく大日本重工八王子本社に一台の乗用車が乗り付けた。二人の海軍軍人が降り立つ。

「寒い・・・」

切目軍曹が衛兵と話しているのを横目で見ながらそう呟いたのは、

大神一郎海軍大尉であつた。

第十五話『さよなら、張作霖』

統幕議長の庇護のもと順調に進む歴史の改変作業。

国家統一の手伝いと武器友好価格提供の見返りとして国民党から満州の譲渡を引き出した帝國。

海上自衛隊の輸送艦2隻とそれに満載された陸上自衛隊一個中隊十aを手にいれた大日本重工。

機械化の有効性に少しずつ気づき始めた大企業達。

何もかもが順調に見えた昭和三年のある日、大日本重工に大神が訪れた。

「佐藤大佐殿。大神大尉がいらっしゃいました」

「入れろ」

「はっ！大神大尉殿、どうぞ」

まだ若い憲兵が大神を部屋に入れる。

「失礼します。大神一郎海軍大尉であります」

大佐の執務机の前に来た大神は見事な敬礼をした。

「話は聞いている。陸海軍の相互技術協力だったな」

室内を適温に保っているエアコンに不思議そうな視線を送っている大神を見ながら大佐。

「は、はい」

慌てて大佐の方に視線を戻しながら大神。

「直ぐに迎えを呼ぶ。それまでその椅子にでも座ってまってる」

「はっ。お心遣い感謝いたします」

敬礼して椅子に座る。

その視線は天井の蛍光灯や机の上のパソコン、温風を吹きだすエアコンなどを行き来している。

「海軍には電灯がないのか？」

ニヤニヤしながら大佐。

「えっ？あ、いえ、ずいぶんと明るい電灯だなと思ひまして」

急に声を掛けられた大神はあたふたとしている。

「そうか」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

しばらく2人とも黙る。

今度はエアコンの方を不思議そうに見始める大神。

ボイラーから温風を送っているのかと思ったが、その割には部屋

が暑くなりすぎない。

それに温風を伝えるパイプも見当たらない、いや、壁の中に埋め込んであるだけか？

「失礼します」

そこへ2人の憲兵が入ってくる。

建物の中と言う事もあるだろうが、以前見たような大きめの小銃に妙に大きな拳銃（実際には機関拳銃）と言う奇妙な格好ではない。腰のホルスターに黒い拳銃が一つだけである。

しかしながら、グリップをただけで大神にはそれが未知の物であることが分かった。

「おそかったな」

「申し訳ありませんでした。それで御用とは？」

敬礼しながら片方が答える。

「ああ、ここにいる大神海軍大尉殿を銀座研究所八王子出張所まで案内してやってくれ」

「はっ、了解しました」

「直ぐに向かってくれ。連中待ちくたびれているだろうからな」

「はっ。それではこちらへどうぞ大神大尉殿」

「ああ、それでは失礼します佐藤大佐」

「楽しんでこい」

部屋を出て行く大神。

それをにやけた顔で送り出すと、直ぐに内線電話を取る。

既に施設内の電話は全て自動交換のプッシュ式に移行している為、短縮番号を押す。

<銀座研究所八王子出張所です>

「俺だ」

<大佐。もう大神大尉が来たんですか？>

「そうだ。憲兵2人を監視につけてはいるが、あの米田の腹心だ。何をするか分からんからな。十分に気をつけろ」

<了解です。まあ重要書類はパソコンに入れているから問題ないですけどね>

「ならかまわんが、プリントした奴が万が一にでも残っていたら大変だからな」

<一応調べておきます>

「そうしろ。当初の予定以上の事は喋るなよ」

<気をつけさせます。それでは失礼します>

「外は結構寒かったんだけど、ここはずいぶん暖かいな」

前に行く憲兵に大神が話し掛ける。

「そうですね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

黙々と廊下を歩いていく。

しばらく歩いていると、要所要所の壁にクリーム色に塗られた鋼鉄製の大きな扉がついているのに気がついた。

「あの扉はどこに繋がっているんだい？」

「あれは防火扉です。火災発生時など非常時に自動で閉じるようになっていきます」

「天井についている鉄製の変なもの？」

「あれは自動消火装置です。火災発生時に自動で作動して消火作業を行えるようになっていきます」

「なるほど」

（自動消火装置か、艦船に取り付ければ戦闘時に役に立つな）

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

もともと憲兵と言う事もあるが、案内役は必要以上は一切話さないように厳命されているらしい。

2人は大神が話題を振っても一言ないし二言しか答えない。

お互いに沈黙を保ちながらしばらく歩いていると、特に頑丈そうな鋼鉄扉が見えてきた。

扉の横の壁にはガラスで仕切られた受付らしい物があり、そこからやはり憲兵が見える。

前を歩いていた憲兵が受付に行き、中の憲兵と少し話すと大神の所へやってくる。

「入室許可が出ました。中へどうぞ」

ガコン！と音がして、大きな鋼鉄扉の左下にある小さな扉が開く。どうやら大きい方は物資搬入用らしい。

「お仕事中失礼します。海軍の大神大尉殿がいらっしゃいました」
先に入った憲兵が声を張り上げる。

「大神海軍大尉です」

中に入ると、そういつて敬礼する大神。
直ぐに大介がやってくる。

「銀座研究所研究主任の高橋大介少佐殿ですね？」

あらかじめ待っていた大介が敬礼しながら歩みでる。

「いいえ、今は中佐です」

「こ、これは失礼しました」

「いえいえ」

「えーと、話は通っていますよね？」

「ええ。ここで立ち話もなんですから応接室へどうぞ」

奥にあるガラスで仕切られた部屋の方を手で示す。

「わかりました」

鞆を小脇に抱えた大介に連れられて応接室へ入っていく大神。中に入ると、座るように促される。

「コーヒーでいいですか？」

「すみません」

「いえいえ」

そう言うと、研究室から紙コップとポットを取ってくる。自分と大神の分を入れてそれぞれの前に置く。

「あまりおいしくは無いですがどうぞ」

「頂きます」

一口飲んで思わず顔が歪みそうになる。

いったいどうすればここまでコーヒーがまずくなるのか？と思わず聞きたくなるほどの不味さである。

「そう言えば、ここは大日本重工と繋がっているようなのですが、どこまでが大日本重工の建物なのですか？」

「大尉が通された正面玄関などは大日本重工のものです。

基本的に帝國軍のものは、憲兵隊が使っている管理棟一階の大部分とこの別棟、それから空軍が借りている外れの空港設備ぐらいです。それが何か？」

「いえ、聞いていた話より建物が大きかったのですね」

「ああ、それは不景気だから人件費が安くて済むと長谷部社長が社屋の拡張を行ったからですよ」

「不景気なのですか？」

「長谷部社長によると、夏場の熱気払いと同じ要領だそうで、不景気にこそ金を使うべきなのだとか」

「はあ」

「それで今日伺った理由なのですが」

いつまでも世間話をしていても仕方がないので、本題を話し始める大神。

「陸海軍の共同研究と聞いておりますが、電索ですか？それともそれ以外の？」

「はい、そちらの所有している輸送艦が使用している艦載電索です」

「そこまで掘んでいましたか」

「もちろんです。海軍とて国内の情勢には目を配っています」

「そうですか、それではこれをどうぞ」

鞆から一枚の設計図を取り出し、大神に手渡す。

「これは？」

「お探しの品です。対水上電波索敵装置乙型。ちなみに、以前差し上げたのは甲型です」

「性能は？」

「出力も精度も桁違いです。まあ詳しい事はそちらで調べてください」

「いいんですか？こんなに簡単に頂いてしまつて？」

「どうぞどうぞ、いつまでもウチで独占しておくわけにもいきませんからね」

「ありがとうございます。それでは自分は・・・」

「わかりました。迎えの者が研究室の外で待機しております」

後にわかる事だが、このとき大神に渡された設計図は銀座研究所では既に旧式になった真空管式のリーダーであった。

しかし、極限まで高められた研究所謹製の真空管はこの時代では超技術と呼ばれても問題ないものだったために大神はなんの疑問も抱かなかった。

礼を言いながら大神が退室してしばらくすると、長谷部達が入ってきた。

「どもども大介さん」

「お久しぶりです高橋主任」

にこやかに言いながら椅子に座る。

「長谷部さんに鏡花さん。今日は例の新型戦車の件で？」

「ええ、二式中戦車の試作はどうですか？」

「61式戦車の装甲を改良して、内部の設備にも少し手を加えました。もちろんエンジンも。あと例の夜戦装備・・・」

「赤外線暗視装置ですね」

どこからか魔法瓶を取り出した鏡花がコーヒーを入れながら補足する。

「そうそうそれです。それつけたので、原型は結構失われています」

「コストは？」

「何もつけてない状態より多めになりましたが、主砲が105mmから90mmに変わったお陰で随分と値段が落ちました」

「なるほど、んー相変わらずおいしいですね・・・零式重戦車と比べる？」

コーヒーを飲みながら長谷部が言う。

「そうですね。だいたい三分の一くらいですかね。大量生産効果を入れるともう少しかな」

「それだけいけば上等ですよ。陸軍の皆様も納得してくれる事でしょう」

「ですね。あとは先行量産さえ始まってくれれば全て解決です」

「しかし世間は不景気というのに、新兵器の研究開発に莫大な額の予算が出せる、戦争様様ですね」

「まったくです」

2人して顔を見合わせて笑う。

昭和3年6月4日早朝 奉天南方

頑丈そうな列車が朝霧を切り裂いて走っている。

車窓からは重武装をした軍人達が見える所から、旅客列車ではないようだ。

「いやー辻中尉。帝國から頂いたこの列車。素晴らしく快適ですよ」

『帝國から譲渡されたこの列車はとても快適だと申しています』

『恐縮です』

乗っているのは陸軍大学校入学を半年後に控えた辻政信中尉と、満州の軍閥張作霖である。

この列車は以前長谷部達大陸派遣隊が満州へわたったときに張作霖へ友好の証として送った物で、室温を逃がさない為の高気密性と安全の為の防弾が施された4両編成特別列車である。

「辻中尉。帝國は本当に国民党に私の權益を守らせる事を同意させたんですか？」

『帝國は本当に張作霖氏の權益を守る事を国民党に同意させたのか、と申しております』

『ですからなんども申していますように・・・』

「いやいや、ただ確認を取っただけだ」

不満げな辻の表情から通訳されるまでもなく言いたい事を悟った張は、苦笑しつつ片手を顔の前でふった。

『ただ確認を取っただけだと申しております』

『ご安心ください。帝國は嘘をつきません』

「帝國は閣下の信賴を裏切るような真似は決して致しません」

「だいいいんだがな」

ため息をつきながらテーブルの上に置かれたワインを取ろうとする張作霖。

『閣下、帝國に対してそのような態度はさすがに見逃せませんぞ』

顔を僅かに赤くして立ち上がろうとする辻の姿に呆れつつワインボトルを取る張。

やはり通訳されずとも、彼が何を言いたいのかは伝わる。

「落ち着きたまえ中尉。まあワインでも飲んで・・・」

そういいながらワインを辻のグラスに注ごうとした瞬間、列車は急ブレーキをかけた。

「ワアアー！！」

慣性の法則にしたがつて後ろに控えていた兵士に激突する張。

そこへ辻が飛び込む。

「なっ、なにごとだ！邪魔だ中尉！！」

辻を蹴飛ばしながら立ち上がる張。

蹴飛ばされた辻も慌てて立ち上がる。

「障害物です！レールの上に丸太が！」

「匪賊か！？」

国内を荒らしまわる犯罪者集団の名前が出る。

「分かりませんが頭を低くして下さい！直ぐに救援を要請します！！」

立ち上がろうとした張の頭を抑えつつ兵士が叫ぶ。

『帝國軍も呼ぶんだ！この時期は銀座研究所の試験中隊が定期演習を行っているはずだ！』

腰に下げたピストルに手を掛けながら辻が叫ぶ。

「付近に日本軍がいるのでそちらへの連絡も頼むとの事です」

通訳が素早く兵士に翻訳して伝える。

「分かりました！」

指示を受けた兵士が隣の車両にある無線機へ飛びつき、各方面に無電を打ち始める。

＜ワレ、張作霖特別列車。匪賊ノ奇襲ノ恐れアリ。至急救援ヲ求ム＞

それに対する応答は素早かった。

＜コチラ帝國軍銀座研究所試験中隊本部。野戦演習ハ既ニ終了シテ

イル。至急原隊ニ帰還セヨ>

<否、コレハ訓練ニアラズ>

苛立ちつつ返信したところで、車外から銃声が響いてきた。

あの音は・・・共産党軍の小銃!?

<共産党軍ニ襲撃サレツツアリ。至急救援ヲ求ム>

<真偽ヲ調査中>

相手の反応を見た兵士は眩暈がした。

真偽を調査中だと? こっちは既に銃撃を受けているのに日本軍の連中は何を考えているのだ?

『おい! まだ応答は無いのか? 一体何をしているんだ!』

焦った様子の辻が兵士に尋ねる。

横にいた通訳が兵士に辻が言っている内容を翻訳する。

「ご苦労様です。どこかの部隊との通信はつきましたか? と申しております」

「日本軍が出てくれたが、訓練と間違えてるらしくて取り合ってくれん! おい、アンタ日本軍なんだろ? 何とかしてくれ」

『なんと言ってるんだ?』

辻が通訳に訊ねる。

『日本軍と連絡が取れたそうです。しかし訓練と誤認してるようなのです。とのことですよ』

『なに！？ならば私の名前で再度呼びかけさせろ！早く！！』

「わかりました、すみません。辻政信陸軍中尉の名前で再度送信していただけないか、と申しております」

「あ、ああ、わかった」

<ワレ、陸軍中尉辻政信。繰り返シ救援ヲ求ム>

<了解。現在試験中隊が現場へ急行中。現地到着マデ40分>

<了解。交信終ワリ>

「40分で来てくれるそうです！」

その場にいる全員に聞こえるように叫ぶ兵士。
それを聞いた辻達の表情が明るくなる。

「に、逃げろお！！」

窓から小銃を撃っていた兵士が叫ぶ。

「何事だ！？」

同僚が肩を掴む。

「あ、あれを見ろ！！」

車両の外を指さす。

つられて表を見た辻は開いた口がふさがらなかった。

「ば、馬鹿な。重砲、だと」

視界の中の兵士達は重砲の砲身をこちらへ向けて・・・・・・・・

『張作霖閣下危ない!!』

通訳が日本語で叫ぶ声が聞こえる。

どうせなら俺を守れよ。

そんな事を思いつつ、辻の意識と肉体は粉々に飛び散った。

第十六話『日本工業規格』

満州を統べる張作霖とこの時はまだ悪名高くない辻政信中尉を乗せて移動する特別列車。

多数の警護兵を乗せたこの列車に対して、突如所属不明の共産党と思われる武装集団が攻撃を仕掛ける。

多数乗車していた警護兵たちが決死の抵抗を続けるが、敵軍の重砲の直撃を受け列車は大破する。

陸軍中尉辻政信名義での救援要請を受けた日本軍は、この時代には存在するはずのない完全な形の機械化歩兵中隊を率いてきっちり40分後に現れた。

「総員下車！直ちに友軍を支援しろ！！」

停車したトラックから飛び降りつつ山口軍曹が叫ぶ。

一度実戦を経験した彼の顔は既に平成からやってきた情けない三等陸曹の顔ではなく、帝國陸軍伍長のそれになっている。

ちなみに彼の命令で素早く展開を始める兵士達はすっかり顔なじみとなった東京憲兵隊からの出向の憲兵達である。

もはや憲兵としての任務はなんであるかなどという疑問を持つ者はいなくなってしまったようだ。

「戦車！重砲を吹っ飛ばしてくれ！！」

携帯無線機に向かって叫ぶ山口。

<了解>

応答しながら105mm砲塔を敵重砲へと向ける戦車。

だが、照準をつける前に敵の重砲が発砲した。

砲塔を旋回させていた戦車はよりにもよって真横から受けてしま
う。

轟音と共に煙に包まれる戦車。

「ば、ばかな、戦車が一撃で？」

一瞬動きが止まる山口。

「やった！ざましろ！」

拳を上げて歓声を上げる敵兵達。

だが、彼らは自分達が相手にしている物をあまりにも過小評価し
すぎていた。

次の瞬間、歓声を上げていた敵兵達は105mm榴弾の直撃を受
けて砲ごと吹き飛ばされた。

「馬鹿野郎！零式をなめるな！！」

爆発の被害を運良く受けなかった外部スピーカーから戦車長の声
が拡大されてあたりに響き渡る。

その声に反応した山口達が戦車の方を見ると、装甲に僅かな凹み
がついただけの姿の零式がいた。

いくら100%現代の技術に追いついていないとは言え、本来
の設計では105mm砲弾を受けても破壊されないようにされてい
るこの戦車が、徹甲弾を使ったわけでもないに105mm以下の砲
で破壊されるわけがないのだ。

「匍匐にて肉薄！」

山口が叫ぶと、いつのまにか銃剣を着剣していた兵士達が地面に伏せながらゆっくりと敵軍へ前進を始める。

そして、敵陣地へ肉薄し始めた者から順に手榴弾を投擲する。

次々と巻き起こる爆発によって怯んだのか、敵軍からの機銃掃射が途切れる。

その隙にトラックの陰から踊り出た機銃手たちが軽機関銃を設置して支援射撃を始める。

「左右に5人行け！残りは俺に続くんだ！」

敵陣に一番近い所にいた伍長が後続の兵士達に指示を下す。

敵弾のみならず味方からの支援砲火にも当たらないように注意しなければならぬ兵士達は、ぎこちない動きで三派に分かれて行動を開始する。

線路脇に塹壕を掘っていた敵軍であったが、重砲を破壊されたショックと、手榴弾の連続攻撃、縁に次々と着弾する銃弾のお陰でともに迎撃ができない。

「ば、ばか！撃て！撃ち殺せ！！」

指揮官らしい男が慌てて機関銃を列車から日本兵に向けながら叫ぶと、敵軍は遅まきながら迎撃準備を始めた。

先程まで列車に向けていた機関銃も日本側に向きなおし、猛然と射撃を開始する。

たちまち姿勢がやや高かった兵士たちがなぎ倒され、運良く生き残れた兵士達は地面にべったりと伏せなければならなかった。

その隙に塹壕から敵部隊の一部が現れ、発砲を繰り返しながら大

きく迂回をして回りこもうとしてくる。

「伏せろ！！物陰に隠れるんだ！！」

隆起した地面や溝などに身を隠す日本兵達。

「ロケット発砲自由！各自撃て！戦車は別働隊を頼む！」

携行型対戦車砲を抱えた兵士が敵陣地を狙おうと果敢にも遮蔽物の陰から身を乗り出すが、殺到する銃弾の嵐にまともに照準できない。

中には撃とうとして逆に被弾し、血飛沫を上げるものもいる。

<戦車！！主砲で援護してくれ！ロケットを撃てない！！>

再び無線機で山口の指示が飛ぶ。

<了解>

味方部隊の邪魔にならないように機銃による攻撃のみをしていた戦車が砲塔を敵部隊に向けて旋回させると、慎重に照準をつける。

「撃え！！」

戦車長の命令と共に轟音を立てて105mm榴弾が発射される。精密射撃のためにほぼ狙い通りの位置に突き刺さった砲弾は、信管を作動させて周囲のもの全てを粉々に消し飛ばす。

「ロケット！いまだ！！」

号令で再び頭を上げた兵士達が、これまた慎重に狙いをつけて敵陣地へロケット砲を撃ちこむ。

砲撃に怯んだのか機銃を破壊されたのか敵軍からの反撃は途絶えた。

「怯むな！！突撃いい！！」

既に相手に攻撃能力が喪失しているのを知りつつ小銃を乱射した山口が叫ぶ。

当然のことながら先陣を切りつつだ。

「隊長殿に続け！突撃いい！！」

同じく小銃を乱射しつつ松永。

こちらも一度実戦を経験したためか顔つきが既に帝國軍人のそれとなっている。

「ウオオオオオ！！！！」

雄叫びを上げつつ自分達へ突撃してくる日本軍に驚いた敵兵は陣地を放棄して慌てて反対方向へ逃げ出そうとするが、そちらにはまだ生き残っている張作霖の直衛隊が残っていた。

進退窮まった敵兵たちは急いで武装を放棄して降伏しようとするが、殺到する銃弾によってそれは叶わぬ願いとなった。

まあ降伏したとしても殺される運命だったが。

客車部分に大穴が空いた特別列車。

車内で唯一まともに残っていたソファアーの上に張作霖は寝かされ

ていた。

「・・・・・・・・・・う、うう・・・」

「気がつかれましたか張作霖閣下」

心配そうな日本軍軍医の顔が見える。

「こ、ここは？」

立ち上がろうとすると、やんわりと押しとどめられた。

「落ち着いてください閣下。頭を強く打っております。しばらく動かない方がよろしいかと存じます」

「わ、私は・・・そうだ！共産党軍は！？」

「共産党？連中は中国共産党軍なのですか？」

驚いた顔の軍医。

「ああ、間違いない。こちら辺で日本の兵器を使っていないのは共産党軍か匪賊くらいだ。だが匪賊が重砲を持っているなんていう話はあまり聞いたことがない」

「なるほど、その件にしましては私が口を挟める問題ではありませんから、隊長殿の方へお話しておきます」

「共産党軍は？どうなったんだ？」

怯えた目つきの張がいう。

「ご安心を。賊は我が軍が殲滅いたしました。部下の方々も多数生き残っております」

「・・・そうだ！辻中尉は！？彼はどこに？」

それを聞いた軍医は残念そうな顔をして列車の端を指差した。

「？」

悲鳴を上げる全身を叱咤激励しながらそちらを向いた張は直ぐに後悔した。

なぜならそこには苦悶の表情を浮かべた辻の首だけが転がっていたからだ。

「辻中尉は名誉の戦死を遂げられました」

「真に残念だ。そうだ！私をかばってくれた通訳は？彼にお礼を・・・」

そこまで言いかけて張は悟った。

「まさか、彼も・・・」

「はい、残念ながら・・・」

「・・・そう、か」

黙りこむ2人。

その周りでは日本兵達が忙しそうに走り回っていた。

そのうちの数名が写真を撮影しているのを見て張は軍医に尋ねた。

「彼らは何をしているんだ？」

「ああ、彼らは万が一にでも帝國がいわれの無い罪を問われない様にああやって証拠写真を撮っているのです」

それを聞いた張は激怒した。

「私のために命をかけてくれた者達に対してそのような態度を取る奴がいるのか！私が直接文句を言ってくる！！！」

「ありがとうございます閣下。閣下がそういつてくださるだけでも死んでいった者達が喜びます」

「あたりまえだ。諸君らの活躍に対して何らかの形で礼をしなくてはな」

「……………そうですね、しばらくお待ちを」

そう言うと、軍医は山口の所へと走っていった。

「壊れた列車にワイヤーかけて線路から戦車で引きずり出せ！直ぐに国民党軍の臨時列車が来るぞ」

「はっ！」

「増援の歩兵部隊はどうなっている？」

「あと十分以内に来るとのことです」

既に決まっている答えを返す別の兵士。

「ほう、そりゃまたなんで？」

筋書き通りの答えに律儀に質問する山口。

「申し訳ありません。移動中に共産党軍の別働隊と思われる敵勢力と遭遇、現在掃討を終えてこちらへ急行中であります」

「負傷者の搬送は？」

「駐屯地に残っていた機動車^{ジープ}に軍医を乗せて急行させている所です。ります。なお先月より我が部隊に密着していた神埼重工の活動撮影班が“偶然”居合わせましたのですが、自社の自動車にて随伴してくるとのことです」

それを聞いた山口はしばらく考えた後に答えた。

「もう来てしまったのではしょうがないな。随伴許可を出そう。ついでにこちらにも来てもらえ」

「はっ」

予定されていた問答をしている所に先ほどの軍医がやってくる。

「失礼します」

「ああ早川君だね？どうした？通訳だったことばれたか？」

それを聞いた軍医はにやりと笑った。

「いいえ、伊達めがねと付け髭、白衣で簡単に騙せました。どうやら気絶のショックからまだ立ち直れていないものと思われます」

「そうか、で？」

「張作霖が我々に対して感謝の意を表したいと」

「ありがたいことだ。基地に帰ってから感謝状でも書いてもらおう」

「はっ・・・そうだ、そのときにさりげなく活動に撮らせませんか？」

それを聞いた山口は目を丸くした。

「さすがは中野学校卒業生だな。そうしよう。基地に戻った兵士達を撮りつつ風景の一部として撮影させよう」

史実にてスパイ養成学校として知られていた中野学校だが、元の世界では落ちこぼれ学校として有名だった中野予備校がエリート力を伸ばす為の大学院のような存在となっていることもあり、この時代でありながら本格的な情報戦に備えた諜報員養成機関となっていた。

その訓練は苛烈を極めており、訓練中の事故死は当たり前で、各師団が必要とする分を質を落とさずに確保する為に、毎年大量に出る落第者と死者を計算に入れて多めに生徒を募集するという方法をとる程であった。

当然のことながらそこで教育された人材は優秀であり各師団より引く手あまたであったが、佐藤大佐はコネを使って大量の卒業生を自分の配下に加える事に成功していた。

「はっ」

走り去っていく早川を見つつ、にやけそうになる顔を抑えようとして山口は慌てて顔を整えた。

敵が次々と死んでいく事に大いなる満足を感じている自分に気づき、一言漏らす。

「まずいな。思考が佐藤大佐に似てきた」

張作霖暗殺未遂！日本軍必死の救出劇！！

衝撃的内容のニュースが全世界を駆け巡ったのは驚くべき事に翌日の事である。

国際連盟は直ちに調査団を派遣して事の真偽を確かめたのだが、現場の状況、日本側が提出した史料価値の高い大量の写真や現場検証の一部始終を収めた映像、回収された共産党軍の軍装などによって、この事件を共産党軍によるテロ行為と断定。逆に犠牲を払ってまで救援活動を行った日本軍を賞賛する事となった。

驚いたのは身に覚えのない罪を着せられてしまった共産党軍である。

慌てて冤罪であることをアピールしようとしたが、国連の出した結論を受けた国民党が『このような卑劣極まりない行動は許せない』というコメントを発表してしまった為にタイミングを失う。

結局、国民党がコメントを発してから数日が経過してようやく共産党は『すべては日本と国民党が仕組んだ狂言である』というコメ

ントを出す事ができたのだが、日本はニュース映画で尉官を含む多数の犠牲者がでてしまった事を涙を流して統幕議長が遺族に謝罪し、国民党は美人で知られる蒋介石夫人の宗美齡そう・びれいが通訳無しの英語で語ったのに比べて、むさ苦しい中年男性が通訳つきで語った共産党のコメントは、その内容も手伝って誰もが無視する事となる。

アメリカやソ連はやや納得いかないところがあったが、張作霖が内容を証明できる複数の人間の証明つきで命をかけて自分を守ってくれた日本人通訳と辻中尉（彼は何もしてないが）に感謝の言葉を述べた公式の感謝状が世界中に公表されるに到って、この件に関して異議を唱えるものはいなくなった。

「さて諸君。憎むべき敵である張作霖に消えてもらおう」

前方から数台の自動車がやってくるのを確認した人民服姿の青年が言う。

その言葉に頷いた男たちが次々と道路に並んで立ちふさがる。

「よし！共産党への忠誠を叫びながら賊を倒そうではないか！」

「そうだ！共産党万歳！！」

「共産党万歳！！」

口々にそう叫びながら停車した自動車の方へ走っていく青年達。その手には拳銃や手榴弾が握られている。

「なんだ貴様ら！」

先頭車両から降りた国民党軍兵士が怒鳴りつける。

「共産党万歳！！」

そこへ銃を持った青年が現れて問答無用で兵士を射殺する。
すかさずもう一人の青年が後ろの車両へ手榴弾を投げつける。

「に、逃げろ！！」

慌てて兵士達が自動車から降りようとするが、間に合わずに轟音と共に自動車ごと吹っ飛ばされる。

「応戦しろ！！下車だ！！」

混乱した国民党軍側の指揮官が叫びつつ車体の影に回りこむ。
同じように車体の陰に逃げ込んだ兵士達は直ちに猛烈な反撃を開始した。

「発砲自由！撃え！！」

小隊長らしい人物が叫ぶと同時に、零式小銃による濃密な弾幕が形成される。

軽機関銃並の速度で5・56mm弾をばらまく日本軍の小銃は普通の小銃に比べれば故障が多いものの、圧倒的なまでの性能を持っている事から多くの国民党兵士達が好んで使用していた。

しかし、もし彼らが本物の『89式小銃』を撃つ機会があったら、本物の軽さと故障の多さに驚いただろう。

さて、いきなり自動小銃の洗礼を受けるとは思っていなかった青年達は次々と体中に被弾して地面へと打ち倒された。

先を進んでいた仲間が次々に殺されたのを見た青年達は、慌てて建物の影や露店に飛び込んでいく。

「頭を下げるんだ！少しでも姿を見せれば蜂の巣だぞ！！」

露店に飛び込んだリーダー格の青年が叫ぶ。

しかし、その声を聞きつけた兵士達が露店に集中砲火を浴びせる。薄い木材でできた壁など何の役にも立つわけが無く、一瞬で肉塊に姿を変える青年。

だが、その隙を突いて他の青年達が雄叫びを上げつつ部隊へと殺到してくる。

「撃てっ！止めるんだ！！」

最前列の青年達が銃の代わりに大きめの鞆を抱えているのを見た指揮官が血相を変えて叫ぶ。

慌てた兵士達が銃を向けたときには手遅れだった。

車列のなかに飛び込んだ青年は鞆から出ていた紐を引く。

その瞬間、鞆の中に収められていた信管が作動して大量の爆薬が爆発した。

「ワァァァァ！！」

本能的に危険を察知した兵士達は、悲鳴を上げるのとはほぼ同時にこの世から消え去った。

この日、大日本重工地下会議室にはいつものメンバーに加えて数名が加わっていた。

最近出番が恐ろしく無かった5121小隊長の善行と整備主任である原、そしてもう一人、満州へ長谷部達を運んだ『満州丸』船長である。

「それでは報告させていただきます」

数々の功績によりついに准将になってしまった佐藤が立ち上がって言う。

彼の昇進については軍内部で7・3の割合で反対派と賛成派が戦った。

『あの男が准将とはいえ将官になったら皇国はお終いだ』という反対派の意見は賛成派の一部でも共感する者がいたが『信賞必罰は武門によって立つところだ』という統幕議長の声で劣勢だった賛成派が勝ったために今回の昇進が決まった。

「長谷部社長が考案した作戦は大筋が完了いたしました。国民党は帝國に一定以上の理解を示していますし、張作霖は護衛部隊ごと『共産党』によって消されました。」

この調子ですと、遅くとも来月には満州の………」

「失礼します！」

佐藤の言葉を遮って衛兵が中に入ってくる。

たちまち室内に緊張が走る。

未来に関する話がたびたび出るこの会議中は、よほどの事が無い限り入室を許されないからである。

「何事だ？」

佐藤が尋ねる。

「はっ！ 国民党政府から満州譲渡の件で最終打ち合わせをしたいという内容の電文が先程外務省に届きました。

緊急で御前会議が開かれるので、大至急統幕議長閣下に帰還するよう要請が来ております」

それを聞いた会議室のメンバーの顔から自然に笑顔がこぼれだす。国民党からの電文は数々の策略を駆使して行われていた重要な作戦の終了を意味するのだから当然である。

「第一段階終了おめでとうございます、統幕議長閣下」

長谷部が嬉しそうに言う。

「いやいや、私は大して何もしていませんよ。すべては長谷部社長、貴方の計画ではありませんか」

「いえ、閣下の権力があつたからこそ計画が実行できたのです。つまりこれは閣下の功績です」

「しかしな……」

「統幕議長閣下、陛下をお待たせさせるわけにはいかないのでは？」

時間の浪費を恐れた鏡花が恐縮気味に言う。

「そ、そうだ。うん、それでは後日結果を報告してくれ」

言いつつ大急ぎで退室する統幕議長。

衛兵と統幕議長の退室を確認した佐藤は、再び話し出す。

「満州の件については第二段階に入りました。これについては後日再び会合を行うとしまして、次の議題です……」

「佐藤君」

米田のささやかな反撃によって准将に降格させられたものの、中国戦線での国民党軍占領地防衛部隊の指揮官として功績を収めたとして再び少将に返り咲いた小林が話を遮る。

「なんでしょう小林少将？」

「共産党員についてだが、張作霖暗殺以降は使っていないはずだよな？」

「はい。便利ですがばれた時の危険度が高すぎますから」

そう、張作霖護送部隊を襲撃したのは共産党上層部を装った帝國陸軍が誇る秘匿部隊『鷹』部隊によってアヘン中毒で街をうろついていた若者達に重度の洗脳処置を施して作った偽共産党員だったのだ。

筋書きはこうだ。

帝國と国民党は以前に結んだ密約で、列車から救出した張作霖を後日共産党の仕業に見せかけて暗殺する事になっていた。

そのために国民党に満州へ帰還する筈だった張作霖を処刑地まで護送させていた。

処刑地では共産党軍に偽装した帝國軍が待ち受けており、護衛部隊と形だけの戦闘を行って張作霖を処刑する。

ここまでは国民党も知っている。

しかし、帝國は国民党に秘密で第二段階を用意していたのだ。

それは、処刑場に到達する前に『本物の共産党員』による襲撃を行って張作霖を暗殺するという物である。

これには二つの理由がある。

一つは帝國と国民党両者の手を汚さずに張作霖を消すことと同時に世界に疑問を持たせないということである。

列車襲撃は帝國の策略では無いと世界に信じさせる事に成功したが、もしその後帝國と仲の良い国民党が護送中に共産党に襲撃されて、たいした損害も無しに張を暗殺されたとあつては、さすがに世界中で疑問の声が上がるのは避けられない。

そんな事になってはせっかくの陰謀が台無しである。

だが、もし護送部隊が熾烈な攻撃を受けて全滅したとしたら？それも自爆テロという思わずそちらへ話題がずれてしまうような攻撃で。

世界は異常な共産党への批判には力を注ぐかもしれないが、多くの死者を出した国民党やこの件には表立って接してはいない帝國へ強い疑惑を持ったりはしない可能性が非常に高い。

二つ目は、日本との極秘共同作戦が共産党に漏れたという事実によって国民党内部に疑心暗鬼の種を植え付ける為である。

これは国民党内部で不協和音を奏でさせ、肅正や裏切り、追放といった自滅行為を誘発させて国民党自体を弱体化させ、共産党との内戦を延長・拡大させて中国特需の拡張を行って日本経済の建て直しの材料とする為と、内戦終結後に内部での権力闘争や肅正の嵐を起こさせる為である。

これによって、共産党亡き後の中国の目を外ではなく内部へと向けさせて満州防衛政策の一環にすると同時に、内戦終結後の国力回復や近代化の妨害、いずれは中華思想によって増長し、日本の国家安全保障を脅かす存在になるであろう中国軍の弱体化を図るのである。

また、多くの死傷者を出させる事によって人的資源を大量に浪費させると同時に、国内を広範囲にわたって大規模に破壊させて国力を可能な限り衰えさせ、内戦終結後に起こるであろう史上空前規模の復旧事業に日本資本が入りやすくなるようにするためでもある。

これは帝國による国民党への明確な背信行為であるが、政治の世界の常識から言えばそれほど悪質とはいえない。

なぜならば、国家間の関係などというものは、いくら奇麗事を並べ立てた所で自国の利益が最優先の潰しあい騙しあいが基本だからだ。

早い話が、国家にとって真の友人などいないということである。

「関係者は一人も逃がしていないな？」

「ええ、死体の数と顔をきちんと確認しました」

「外部に情報が漏れる可能性は少なくとも将来的には少なくなったわけですね」

納得して椅子に座る小林。

「そういうことですな、引き続き関係者周辺の洗い直しを行って機密保持の徹底を図ってください。」

さて、次の議題です、海上輸送路いわゆる『シーレーン』の安全確保についてですが、今日は『満州丸』船長に来ていただきました。

それでは紹介もかねて詳しい話は彼に話していただきましょう、船長どうぞ」

「は、はい」

佐藤に促されて立ち上がる船長。

多くの将官・佐官が臨席する会議で発言するという前代未聞の経験に、空調が効いているというのに汗がとめどなく出てくる。

「え、ええ、ご紹介に預かりました満州丸船長の北畠であります。このたびはご招待に預かり……」

「北畠船長」

その様子を苦笑しながら見ていた長谷部が北畠に声をかける。

「本会議では必要以上の敬語等は一切不要です。まあ統幕議長閣下や井上空軍大將閣下が相手ならばさすがに必要ですが。それと、貴方はこの会議に出席できるだけの権限を既に持たされているのです。堂々のご発言ください」

「は、はい……失礼しました。満州丸船長の北畠です。ご紹介の中にもありましたが、私からは海上輸送路の安全確保について話させていただきます。

とは言っても、現状でこっそりと用意できるものだけですが。

さて、まず水上艦艇に対してですが、銀座研究所で改良されている対水上電索三型をメインマスト上に設置する事によって、あちらが発見しない限りはほぼ確実に回避する事ができそうです、完成次第試験を行う予定です。同型は開戦後に民間船舶への搭載が計画されているので、一日も早い改良完了が望まれます」

「航空機に関してはどうなのかね？」

空軍開設と同時に空軍大將になった井上が訊ねる。

「航空機に関しては既に完成している対航空機用電索六号と電索連動対空砲があります。これにより早期発見と非常時の防空が可能となっております」

「なるほど」

「まず第一の問題は潜水艦です。」

これに関しては大日本重工で水中聴音機パッシブソナーと水中音波発信機アクティブソナーの開発が進められておりますが、未だに試作品しか出来上がっておりません。

しかしながら試作に到るまでの時間を考えると開戦までには十分に合うものと思われます、ですが早急に専門要員の育成に務めなければ、あまり好ましい結果は得られないものと思われます」

「つまり探知手段に関してはより一層の努力が必要という事だな？」

井上が言う。

「そうであります閣下。しかしながら、この問題での一番の懸念は海上護衛の要となってくれる海軍のほうであります」

「そちらに関しては私から話させていただきます」

今度は長谷部が立ち上がった。

「ご存知の通り海軍は先進技術研究局を開設し、陸軍から電索を借りて独自の開発を進めておりますが、装置が揃ったとしても運用する人間の方はそうそう簡単に変えられるものではありません。

つきましては統幕会議及び陸空軍で信頼できる海軍軍人を選んでこの会議へ呼び寄せる他ありませんので、人間に関してはまた後日。さて、海上護衛を行うに当たって必要とされるのが護衛船舶とそれを運用する人間です。

東西南北、それこそ下手をすれば大西洋まで、ありとあらゆる場所に確実に物資を届ける為には強力な護衛が必要なのは言うまでもありません」

「しかし長谷部社長。そんなに多くの艦艇を果たして海軍は用意できるのか？」

小林が不安そうに言う。

おおすみに私物として持ち込まれていた本からガダルカナル島の悲劇などを知っている小林は、陸軍内部では統幕議長、佐藤に次いで海上輸送路確保の重要性を認識している。

「冷え込んだ日本経済を活性化させるための事業の一環として我が社が日本や朝鮮に造船所を多数建設しているのは皆様もご存知の事かと思えます。

ここでは陸自の施設科が持ち込んだ溶接技術を日々習得させると同時に、旧式の輸送艦を廃艦にして新造を行っているわけですが、実は裏帳簿にしか記録されていない艦艇も建造されているのです」

「ま、まさか、自腹で極秘裏に護衛艦艇の建造を？」

驚いた顔で小林。

「ええ、自腹といっても開戦後は正式に買い取っていただきますけどね」

「この不景気によくもまあ金が用意できるな」

「ええ、放って置いてもラジオで資金が入ってきますから。それに、この先何が起こるかわかっていれば必要以上に金を溜め込む必要はありませんし」

このような一大事業を有志で行っている大日本重工では、不景気を理由にして解雇の代わりに社長などの重役も含む賃金一部カットによって出費を抑えている。

さすがに文句が出ないわけでもなかったが、社長の給料が60%もカットされている事実が知らされては特に文句もでなくなった。

そこまでカットしたのは、生活費は陸軍からでており、特に贅沢をする趣味も無い長谷部は金が必要としていなかったからと、社長がそこまで賃金をカットしているという事実は下の者の不満を抑えやすいからである。

「ばれたら海軍さんは怒るでしょうけどね、名前は駆逐艦『松』型と軽巡洋艦『阿蘇』型です。スタビライザーやシフト配置といった・・・ああ、後日配布する資料に記載しておきますのでご安心を」

聞きなれない単語に慌てて配布されている資料を見始めたメンバーに苦笑しながら長谷部。

根っからの技術屋である長谷部は相手のことを考えずに専門用語を口走る癖があるのだが、例によって今回もその癖が出た。

「まあとにかく未来の技術をふんだんに使用した一品です。」

機材の関係からどうしても高価になりがちですが、既存の艦艇数

隻分の働きだけではなく、従来では考えられなかった高い拡張性と長い寿命が値段を忘れさせてくれる事でしょう。海軍の皆さんに理解していただければ、ですけど」

「というわけでして、艦艇に関してはなんとか確保できる可能性が整ってきているのですが、運営する人員が問題でして」

深刻な顔をしながら北畠船長。

統幕議長と同じで常に深刻な表情をしてしまうようだ。

ブリッジのクルー達はさぞかし気苦労が絶えないことだろう。

「実はそれも腹案が」

すかさず長谷部。

「今回の不況が日本のみならず朝鮮にも影響を及ぼしているのは皆様もご存知の事かと思われます」

頷くメンバー。

本土ほどではないが、不景気の影響による犯罪の増加は警察のみならず憲兵隊や陸軍までも悩ましていたからだ。

また、失業者の増加は朝鮮で続く抗日運動に油を注ぐ効果もあり、結果として朝鮮の不満分子によるテロ活動の増加をも招いている。

これに対して統幕会議は『共産党軍による卑劣極まりないテロ活動』と全世界に公表し、共産軍の徹底的なイメージダウンを図っているほか、日本を『極東民主主義の最後の砦』とアピールする材料に使っている。

当然これは日米開戦の回避としては気休めにもならない物だが、早期講和の材料としてはそこそこ使える公算が高い。

とにかく持たざる国である以上は長期戦は望めないからである。

いかに彼我の技術力が隔絶しているとはいえ、すべての戦闘が毎回パーフェクトゲームとなるはずが無い。

ところが、極端な話100機の敵機を撃墜したとして1機でもこちらがやられたら戦略上は負けというあんまりな国力差である。

イメージ戦略は大切である。

敵国の国内感情というものは時として予想外の友軍となりかねないからであるのだが、戦後確実に予測される資本主義陣営と共産主義陣営による対立の際に『対共産主義の先駆者』としての国際的地位を築く為でもある。

「私が考えているのは朝鮮現地民軍と満州現地民軍の設置、両国海軍の開設。それによって多くの元軍人を復員させ、その装備を作るための作業員達を雇い、兵器増産によって重工業化を促進、雇用を確保、インフラへの投資を強化・・・まあ定番のコースですがね」

長谷部が最も好み、またこの世界で一番力を注いでいるお手軽コースである。

もちろん通常はこんなお手軽コースで経済再建などできない。

この先の主要な出来事を知っているうえに、お隣中国での大規模な内戦への介入で予想以上の利益が上がっているということと、統幕会議によって自分達のしたいような政策を取らせられるからこそ、このコースでいけるのだ。

「しかしそれでは朝鮮が武力で独立する可能性があるのではないか？」

とにかく心配性の小林が言う。

米田に降格させられてからはその度合いが酷くなったらしい。

「そのために朝鮮へは巨額の投資を行っているのです」

「どうということ?」

ここに到ってようやく5121小隊のメンバーである原が口を開いた。

「現在朝鮮への投資が赤字となっているのはご存知ですよね?」

「ええ……って教えたのは貴方でしょ?」

平行世界から来たメンバー達は、本来は使い捨ての捨て駒である一兵卒から部隊長クラスまで全員が長谷部による歴史の講義と自分達が行わなければならない事の説明を受けていたのだ。

これは、慣れない世界での暮らしによって精神的に不安定になりがちな兵士達の心に『自分達が帝國を救うのだ』という気概を持たせるためである。

失うものがない軍人というものは確かに恐ろしいが、護るべきものを理解している軍人はそれに勝るからである。

「そうでした。さて、持ち出しのし過ぎで問題になるほど我が国は朝鮮に対する投資を行っております。インフラの整備、教育機関の完備、民間資本の投下……」

「なるほど、民衆が味方についているという事ですな」

善行が言う。

「そのとおり、民衆は本能的に理解しています。独立しているという事実以外何のとりえも無い旧体制と、はっきりと目に見え、手に取れる形で物質的な恩恵を授けてくれる支配者のどちらがよいか」

「しかしそうもうまくいくのか？」

「もちろん手は打ちます。対日武装闘争に対する締め付けの強化と現地軍設立の内外への宣伝、後はその時その時です」

「長谷部社長ともあろうお方が珍しいですな。そんな消極的な計画を立てるとは」

特に皮肉った様子ではなく、単純に驚いた感じで佐藤が言う。

「ここらへんは既に私の知る『史実』から逸脱しすぎていますから、ある程度先手は打つとしても一部は対処療法でいくしかないのです。もちろんながら事態の推移を見ながらそれなりに先手を打っていくつもりですがね」

「なるほど」

「まあこの件に関しても、本格的な話は海軍が加入してからですね」「果たして連中が『陸空仲良し倶楽部』と見ているこの会議に来てくれるかどうかは別問題だがな」

腕を組みつつ小林。

「それは大丈夫でしょう、私達が陸軍の皆様にしたように海軍の方々にも新技術の恐ろしさを目の当たりにして頂けばいいだけですから」

「一企業が小規模ながら護衛艦隊を所持していたと知ったら海軍の

連中慌てふためくでしょうな」

ニヤニヤしながら佐藤大佐が言う。

「ちがいない」

声を合わせて笑うメンバー達。

重大な法律違反という事は気にしないらしい。

「いずれにせよ海軍高官とパイプを繋げなくてはなりませんね」

「ええ」

「海軍関連はこれで止めにしましょう。続いては日本工業規格についてです」

長谷部がそう言うのと、資料のページをめくるメンバー達。

「ありとあらゆる工業製品を一つの規格で統一するこの規格の導入は工業力向上の為には必要不可欠です。」

関係各所への圧力をよろしく願います。裏金、脅迫、手段は問いません。とにかく『日本工業標準規格制定法』を可能な限り早く施行できるようにしてください」

「統幕議長が政財界に圧力を掛けていると聞く。我々空軍でも独自に圧力をかけるとしよう」

「ありがとうございます井上閣下」

「気にするな。部下達に戦う為の士気を整えてやるのは上官の務め

だからな」

なんでもないという風に冷え始めた緑茶を飲む井上。

「この法案可決に先立って、我が大日本重工では主要な大企業を初め、中小企業に対しても工作機械の販売を予定しており、またそのための機材もある程度の数が揃っております。

当然、稼働させるための電力も。あとは政府内部への圧力だけです。皆さんの奮闘に、期待させていただきます」

「長谷部社長」

善行が手を上げた。

「しかしそれでは大資本を持ち、また直ぐに借金を返してしまう大企業ばかりが生き残り、中小企業は借金で倒産してしまう恐れがあります。

その点に関してはどうなっているのでしょうか？」

「大企業に関しては3年払いを予定しています。中小企業は同じ金額を無利子の10年払いで」

「つまり中小企業は通常の2分の1以下で済むということですか。ですがそれだけでは資本力の違いはカバーできないと思うのですが」

「現在我が社が製造している製品は、すべてこの『日本工業標準規格』で作られています」

「なるほど！つまり機械を仕入れたその日から大日本重工というお得意先ができるわけですね！」

工業力向上と中小企業の不景気対策、そして陸空軍への安定した兵器供給、戦時での大量消費に追いつけるための大量生産技術の普及、全てを可能にするこの名案に思わずポンと手を打つ井上。

「長谷部社長。貴方は本当に元の世界ではただの研究所所長だったのですか？」

思わずそんな質問が出てくるのも無理は無い。

「ははは、さて、本日の主だった議題は大体出揃いましたね。では統幕議長閣下には明後日に報告に行くとして、本日は解散したいと思います」

その言葉を合図に全員が席を立つ。

奥の壁にかけられた国旗に敬礼し、バラバラに部屋を出て行く。

「あのー長谷部さん」

部屋を出ようとした長谷部に善行が声をかける。

「なんででしょう？」

書類をまとめながら長谷部が振り返る。

「私の部下達の一部が帝都観光を希望しているのですが、米田派がどのような干渉を行うか分かりません。そこで・・・」

「護衛の手配を？」

「いえ、武器の携行を認めていただけないでしょうか？ 私ならともかくとして実戦経験を積んでいる彼らならばナイフ一本でも自分の身を護れると思います。」

それに、せっかくの観光に護衛がぞろぞろとついていったのでは休暇にならないでしょう」

「善行さん、いくら士官とはいえ彼らは年齢的には高校生です。護衛無しでは……」

「120」

「え？」

不意に善行が三桁の数字を口にする。

「土魂号と呼ばれる我々の機動兵器を使って、観光希望者の一人が一ヶ月で撃破した我々の世界での敵である幻獣の数です」

「ひ、一人で、ですか？」

元の世界での幻獣の恐ろしさをうんざりするほど聞かされていた長谷部はその数の異常さに気づく。

「正確には複座機ですから二人で、ということにはなりますが、行動決定権が彼にあった以上はそうなります」

「徒手は？」

「彼の搭乗機が一度だけやられたとき、彼は機銃一つで幻獣四体を撃破しました」

「・・・わかりました。それでは各員に自衛用の拳銃を持たせるということで」

「ご配慮ありがとうございます」

「いえ、しかし私服の警護は最低1チームつけさせてもらいます。我々に興味を持つ連中がどんな行動を取るか皆目検討もつきませんからね」

「了解しました。それではルートなどを決めた報告書を後で提出させていただきます」

「いやいや、休暇に報告書なんて要りませんよ。後日作成で構いません。行くときに内線で『行ってきます』といってくればこちらで処理しますよ」

「しかしそれでは」

食い下がる善行に長谷部は笑顔で答えた。

「あちらの世界でずっと頑張ってきたんです。少しくらいのご褒美があってもいいでしょう。特に指揮官だった貴方にはね」

「・・・・・・・・」

「ま、羽を伸ばしてきなさい。帝國劇場でレビューでも見て、のんびりと観光でも・・・あ、夜には陸軍の方で料亭を確保させましょ

う。おーい鏡花君！」

「はい。なんででしょうか？」

長谷部はどんどん話を拡大していく。

「統幕議長閣下に頼んで料亭の確保を。そうだな・・・店ごと借りちゃえ。それで酒と食べ物、ああもちろん普通の飲み物も。それで芸者さんも綺麗どころをたくさん確保しちゃって」

「わかりました。予算の方はどこから出しますか？」

「陸軍におねだりしちゃおう。統幕議長に頼み込めば奢ってくれるだろうし」

「・・・で、『それでは私も行かせてもらおうか』とかいって統幕議長閣下も来ちゃって、いつもいつも私が愚痴の相手をするんですよ」

涙目になりながら鏡花。

有能で気が良く回ったとしても乙女、おぢさんの愚痴に付き合うのは苦痛らしい。

実は統幕議長の精神安定剤の一つになっているのだが、鏡花本人はそんな事を言われても嬉しくは無いだろう。

「ごめんごめん。じゃあ今回も俺も付き合おうよ」

苦笑しつつ長谷部。

「それで二人して悪酔いして『いぢめてもいいかなあ？』とか迫っ

てくるんですよね」

「・・・・・・・・」

まるでか弱い女子中学生のようになってしまった鏡花と、上司と妻の板ばさみになっているサラリーマンのような長谷部に目を丸くする善行。

「しかしいつもその後を覚えていないんだよなあ」

長谷部の言葉にビクリとなる鏡花。

「みんなに聞いても教えてくれないし。なぜかみんな顔が青いし・
・鏡花君何かしらないかい？」

「知りません」

「ホントに？」

「知りません」

ロボットのよう抑揚のない声で繰り返す鏡花。

鏡花が酔い始めたあたりでいつも意識を失う長谷部は知らないのだが、鏡花の酒癖の悪さは伝説レベルにまで達しているのだ。

もちろん鏡花本人はそれを自覚しているのだが、事情を知らない長谷部や、女性に甘い統幕議長はつついそれでもお酒を勧めてしまい、いつも意識を失わされているのだ。

「それでは日時が決まり次第ご連絡をお願いします」

逃げるようにその場を走り去る鏡花。

扉のところで井上空軍大将に激突して平謝りをしている。

「・・・・・・・・というわけでして、日時が決まったら内線をお願いします」

「は、はい」

第十七話『帝都観光』

昭和3年7月14日 帝國劇場付近

「厚志、あれはなんというものだ？」

目立たないように陸軍が用意した服を着ている舞が速水に尋ねる。相変わらず偉そうな口調だが、本人に治す気がないのだからしょうがない。

「あれは蒸気自動車といってね、この世界での主要な交通機関になりつつあるらしいよ」

「ほう、ガソリンではないのか」

そこへ通りすがりの男が乱入してくる。

「なんだなんだなんだ嬢ちゃん、いい格好してんのに蒸気自動車も知らんのかい？どっからきたんだ」

「なっ、なんだと……」 「すみませんね」

一瞬で沸騰した舞の言葉を遮るように速水が謝罪する。

「私達は先日地方から来たばかりでしてね、地方ではあんまりないですよ。ところで、ウチのお嬢様をバカにすると……」

速水の顔つきが戦闘中のそれになんて変わっていく。

「どうなっても知りませんよ？」

顔だけ笑っている速見と対照的に、通りすがりの男は顔面蒼白で膝を笑わせている。

「しししつれいしましたぁー！ー！」

大慌てで立ち去っていく男。

それを笑顔で見送りながら速水は言った。

「舞、あんまり露骨に反応しちゃ駄目だよ？この世界は元いた世界とは違うんだから」

いつもの笑顔に戻って、優しく諭すように言う。

「何が違うものか。私は芝村で、そばにはそなたがいる。何も変わってはいない。しかし、わが身を案じての言葉・・・ありがとう」

以前だったら赤面して言えなかったであろう台詞を堂々と言う舞。しまいには感極まって道端で抱き合っている。

「なーなっちゃん？」

5121小隊事務係の加藤が整備班の狩谷に声をかける。

「なんだい？」

「あとであそこ浮いてる気球乗らん？気持ちいいーでーきつと」

「いや、僕はやめておくよ。速水君とでも乗ってくれば？」

「あーんつれないなー、ウチはなっちゃんと乗りたいんやー」

いいながら狩谷にしなだれかかる加藤。

胸を押し当てられて狩谷は顔を真っ赤にしている。

「い、いやでも・・・」

「でも？」

素早く前にしゃがみこんで上目遣いに潤んだ目で狩谷の目を見つめる。

「でも・・・あー・・・二人だけでどっかで話したほうがいいだろ？」

「!?!?・・・もちろんや！」

そんな大甘な青春を帝都のど真ん中で行っている彼らを路地裏から見つめる男がいた。

筋肉太りのその男は、何を隠そう帝國陸軍准将佐藤大輔その人である。

私服ではあるが、全身から発せられている殺気と威圧感自身が軍人である事を周囲に知らせている。

と、そこへ一人の青年がやってくる。

「暑いですね」

速水達から視線を逸らしつつ佐藤が尋ねる。

「この調子で暑くなると、12月には暑さのピークかもしれませんね」

青年が面白くもない冗談で答える。

「秋の日のヴィオロンのため息我ひたぶるにうら悲し・・・誰のポエムだ？」

と、佐藤。

「ハア、なんですかそれは？」

青年がそう答えると、佐藤は彼の方を向いた。

「現状は？」

途端に軍人口調で青年に説明を求める佐藤。

「はっ！現在、特別高等警察がウチの護衛小隊と行動を一緒に行っております」

「米田派は？」

「陸軍内部および海軍上層部と連絡を取り合っているようです」

「内容は？」

「申し訳ありません。そこまでは」

「すぐに調べろ」

「はっ」

「3・15の後始末は？」

「各地に増設された特高警察の総力を動員すると同時に、陸軍および憲兵隊より大規模な増援を加えまして、現在全国規模での捜索を行っています」

「必ず逮捕しろ。しかし殺すな」

「はっ」

「連中にはやってもらうことがあるんだからな」

邪悪な笑みを浮かべる佐藤。

その笑顔を見た青年将校は、真剣に退役する事を考えたという。

街中で佐藤が不穏な会話をしている間に、速水達とその護衛たちは帝國劇場付近にまで移動していた。

安全上の問題と慣れない姿をする事によって生じる疲労を考えた結果、無難に帝國劇場付近を散歩して演劇を眺めた後に宴会というコースを周ることになっていたのだ。

もちろん米田派の総本山がどこであるかなどと言う事は佐藤准将もわかっているが、自分達ならまだしも米田中将が誘拐やテロに手を染めるとは考えづらいとの理由と、突然の時空移動で精神的疲労

が溜まっている兵士達へのケアを考えてこのような措置が取られた。しかしながら関係者達は佐藤准将ほど精神的にタフではない為に、水面下でさまざまな機関や組織に連絡を取って万全の体制を整えた。心配性で有名な統幕議長などは、何があってもいいようにと私服で完全武装の一個中隊を揃えろという意味のわからない命令を下しかけたほどである。

「ここが帝國劇場か」

裏事情など露知らぬ滝川がその豪華な建物を見上げながら言う。

「随分頑丈そうな建物ね？単なる劇場とは思えないわ」

鋭い感想を述べる原。

伊達に整備班長は務めていないらしい。

「まあ帝國劇場ともなればそれなりに頑丈には作るのではないでしょうか？」

原の真横を固持していた森が自分なりの答えを返す。

「そうかもしれないわね。ところで今は自由行動のはずだけど、あなたは速水君に絡みにはいかないの？」

イタズラっぽい笑みを浮かべながら森に尋ねる。

「まあ今はラブラブモードですからあの二人。それより班長は小隊長のところに・・・」

カチャン

森がささやかな反撃を試みようとすると、原の着物のすそからよく使い込まれたナイフが落ちた。

よく手入れしてあるらしく、刃は輝いていた。

「あらあら、落としちゃったわ」

苦笑しながらナイフを拾う原。

「で？なんの話だったっけ？」

「サア、ハヤクナカニハイリマシヨウ」

真っ青な顔で棒読みをする森。

周りにいた整備班員たちも同様だ。

以前善行に振られた時に原がナイフを振り回したことは誰もが知っているのである。

「お客さんだ」

劇場前で騒いでいる一団を見ながら米田がいう。

彼の部屋には数名の男たちがいた。

「ほう、見た感じ学生のようなだが？」

灰色のスーツ姿の男が米田の肩越しに5121小隊のメンバーを見ながら言う。

「後ろにいる連中を見てください」

米田にいわれて彼らの周りにいる人間を注意深く観察する。

「なるほどな」

よく見てみると、周辺にいる男たちは一見通行人のように見えるが、一向にその場を立ち去ろうとはしない。

「しかし、あれでは威圧を兼ねた護衛なのか、それとも単に下手なかわからんな」

呆れたようにいいながらスーツの男は椅子に座る。

「ま、陸軍なんぞあんなもんでしょうが・・・あ、失礼」

米田が陸軍中将である事を思い出した男は素直に詫げる。

「かまいませんよ、実際、海軍さんの士官は優秀ですからね・・・さて、それじゃ早速本題に入りますか。山本さん」

同日 都内某所 料亭『白馬』

「いやいや皆さんお疲れ様でした」

上座の方に座っている長谷部がコップを持ちつつ一同に言う。
既に座敷の中には研究所のメンバーや統幕議長一派が座っており、

廊下や庭には目立たないように配置された護衛たちが待機している。

「それでは早速ですが統幕議長閣下に乾杯の音頭をとっていただきましょう。では統幕議長閣下、お願いします」

皆に拍手されながら統幕議長が立ち上がる。

「じゃあ長い話とかは抜きでいきましょう」

コップを高く掲げる。

「乾杯！！」

「「「「かんぱーい！！」」」」

それを合図に一斉に襖が開き、料理や綺麗どころたちが入ってくる。

「ままま統幕議長閣下、ぐぐつと行きましょう」

「すまんね長谷部くん・・・おっとつと・・・」

コップに並々と注がれた日本酒をあっという間に飲み干す。

それを見た一同が一斉に歓声をあげ、拍手を贈る。

「さすがですなー、どれ、私も・・・」

それを見て対抗意識を燃やしたのか、井上空軍大将も一気飲みをする。

「おおっ！いい飲みっぷりですね〜どれ私も・・・」

つられてビール瓶ごと一気のみを始める長谷部。
皆の手拍子が始まった途端に飲み終えてしまう。

「す、すげえ、5秒で瓶一本かよ・・・」

呆れて眩いた中村の顔面に裏拳がめり込む。

「ぶへっ、や、やめてくらひゃい」

「このボケっ！とっとと酒を注がんか！無能者！カスッ！」

「すっ、すいませんでした」

鼻血を止めるのも忘れて大慌てで酒を注ぐ中村。
心の中で『畜生、いつか殺してやる』と眩くのを忘れない。

「あっちは盛り上がってるなー」

「あちゅしー、にやぜ私の方をみないのらー？」

のほほんと佐藤たちの方を見ていた速水に舞が抱きつく。

「お、おい速水、いいのか？」

日ごろとは違いすぎるその姿に焦った滝川が、額にやや冷や汗を
たらしながら聞く。

だが、実は舞と二人の世界に入りつつあった速水にとって、彼の言葉などそこら辺のそよ風の様に全く聞く価値がなかった。

「はいはい、見てますよー」

「にやげやりの答え方だのー」

「はいはい、そんなことはありませんよー」

笑顔で苦情を無視する速水。

投げやりな答え方を返しながら自分はちゃっかりお酒を飲んでいく。

どうやら二人の世界が無理なようなので今日はひたすら飲酒で行くようだ。

「これは俺の刺身だー!」

「なにをー! 渡さんぞー!」

同時に刺身に箸をつけた山口と坂田が激しい顰迫り合いをしている。

その隙に松永がばくばくと食べてしまい、二人にアップーを食らわされる。

だが、まともに後頭部を柱にぶつけてしまい、ピクリとも動かない。

「お、おい、松永?」 「ど、どうした?」

辺りの空気がいきなり重くなっていく。

だが、そんな三人を無視して残りのメンバー達はひたすらに酒を飲んでいる。

教育隊の頃からこの程度の騒ぎは日常茶飯事だからである。

……とまあ、実ににぎやかな感じで飲み会は進んでいった。

開始から二時間もたつと、ともに酒を飲んだ事がない5121小隊のメンバーは大半が撃沈されて別室へと輸送されていき、最初の部屋に残っているのは泥酔した坂田達と部屋の端でなにやら密談をする長谷部達のみとなっていた。

「では、例の件についてはそういう方向で」

「ああ、わかった。あまり派手にはやらないでくれ」

なにやら妖しげな話をする佐藤と斎藤。

その脇では長谷部と鏡花が技術談義をしていた。

「というわけでして、ジェットの試作を行いたいんですが」

「材質強度の問題はまだ完全には解決していないんだろ？ だったら先にそっちから解決するべきだ」

「いえ、大量生産の目処が立たないだけで、少数の試作程度ならば何とかあります」

「ああ、それならかまわん、さっそく開始したまえ」

「はっ」

根が真面目な集団だけあって、飲み会の最中でも職務を忘れられない一同。

扱っている問題が国家の興亡に直結するものばかりなだけに仕方がないといえば仕方がない。

「そういえば長谷部さん」

不意に斎藤が話を振ってくる。

「なんででしょうか？」

「例の、さる高貴な身分の御方についてだが」

「ええ、話は伺っております、施設の警戒態勢を最高にしておきます。万が一にでも問題が起らないよう、陸空軍の方からもよろしくお願いします」

「ああ、任せておけ。日付についてはまた後日・・・」 「失礼します」

不意に襖が開き、二人の男が座敷に入ってくる。

「今宵はいい月ですよ、窓を閉めておくなんざもったいないねえ」

「・・・・・・」

「米田・・・中将。お久しぶりであります」

腰の銃に手を当てて立ち上がった佐藤が、相手の階級を思い出し、顔を赤黒くして敬礼する。

「おう、佐藤准将だったか。出世したな」

「恐れ入ります。本日はどういったご用向きで？」

様子を窺いながら慎重に質問する佐藤。

「なに、友人と飲みにきてみれば綺麗どころがほとんどいねえ。それで聞いてみれば統幕議長閣下がいらっしゃるってんだ、挨拶しないわけにはいかんだろう」

そういつて統幕議長の方を向く。

「統幕議長閣下。ご紹介、とはいっても面識はおありですよ？海軍の・・・」

米田の紹介をさえぎるようにして、一人の男性が斉藤に話しかけた。

「海軍軍人、山本五十六であります」

米田の紹介を遮って挨拶をする山本。

歴史の鍵を握る人物達が、一堂に会した。

第十八話『懇親会での遭遇』

帝都某所にある料亭は、異常なまでの緊張に満ちていた。

「初めまして、というわけでもないのにどうされましたかな？」

米田が余裕の笑みで統幕議長に話しかける。

統幕会議発足以来恐らく初めて佐藤と斉藤の裏をかくことができたからだ。

「あ、ああ、紹介しよう佐藤君。海軍次官、山本五十六君だ。山本君、こちらは佐藤大輔陸軍准将だ。研究部門を担当してもらっている」

統幕議長の言葉に佐藤が敬礼をする。

階級が下であるから、先に敬礼をせねばならない。

「・・・初めまして、閣下」

その表情は、どうしてこんな奇襲が許されたのかという疑問と憤りに満ちている。

ストレス発散の場であるここで、このようなことがあってはならない。

そして何より、彼は他人に主導権を握られることが大嫌いだった。

「おう、よろしく」

対する山本は、統幕議長たちの表情を見て、それがたんに驚きお

ののいているのだと勘違いし、ささやかな優越感を覚えていた。

何しろ統幕議長派の発足以来、海軍は常に陸空軍のやりたい放題を黙認させられる形であり、統幕議長派のやっていることに關しては、自分たちで調べたこと以外は報告書一枚手に入らなかったのだ。その統幕議長が、今自分の目の前で悔しそうな顔をしている。うれしくないはずがない。

「それで？ どうしてここへ？」

統幕議長が米田に話しかける。

海軍軍人である山本より、政治的には微妙だが一応陸軍軍人をやっている米田のほうがまだ話しやすいからだ。

「ですから、偶然飲み・・・」

「能書きは、いい」

酔っていたことと、癒しの時間を邪魔されたことで統幕議長はひどく腹を立てていた。

彼は自分の時間を邪魔されることを心の底から嫌う人間であり、それが公的な時間であっても、私的な時間であっても許せない性格をしていた。

必然的に、彼の声音は冷たく、切りつけるかのように歯切れがよい。

「米田さん、あとは私が話すよ」

いつになく苛立った様子の統幕議長に戸惑う米田を見かねて山本が間に入る。

「なに、簡単な話ですよ。陸海軍の頂点、いや、今は三軍の、でし
たな、頂点に立つお方がどんな方だろうかと思ひましてな」

「会議でいつも会っている」

あくまで統幕議長の態度は素っ気無い。

「いやいや、やはり会議の時と飲みるときでは態度も話す内容も違
いますでしょう」

「確かに、で、何の話なんだ？ここはそういう場ではない、政治
的な話ならまた今度に願うよ」

「いえ、簡単な話です。陸軍さんが持っている輸送艦とその護衛艦
艇。そいつらに使われている技術を譲っていただきたいのです。

陸軍が船の作り方知っていてもしょうがないでしょう？」

その言葉に長谷部のほうをちらりと見る統幕議長。

一方、見られたほうの長谷部は少し頷いて、山本へ話しかける。

「技術的な話となれば私の出番ですね。山本閣下、お初にお目にか
かります。私、大日本重工業の長谷部と申します」

笑顔で握手を求める。

山本のほうは突然高官同士の会話に乱入してきた若い男に驚いた
様子だったが、長谷部の名前を聞いて納得し、握手に答えた。

「貴方があの有名な長谷部さんか、話はいろいろ聞いているよ」

「恐縮です。艦艇に関しての技術提供です」

「そうです。あなた方が握っている技術情報を譲ってもらいたい。それから完成している艦艇もな。

陸軍にも一企業にも必要ないだろう？海の事は海軍に任せてもらいたい」

「かまいません。いつでも使いをよこしてください。ああ、未完成の技術だけは勘弁してくださいね。それと、我が社に対する諜報活動を一切止めて頂きたい」

長谷部の言葉に驚く山本。

一般人が海軍高官である自分に対してこのような口をきくことも驚きだが、米田を介してそれなりに腕が立つものに諜報活動を行わせているのにもかかわらず、黒幕である自分の存在があっさりばれていることに驚いたのだ。

まあ、実際には酔っ払った長谷部が、たまたま文句を言ってみたら正解にぶち当たっただけなのだが、山本はそこまでは気づかない。ただ自分の中での長谷部に対する評価を改めただけだ。

「わ、わかりました。命じておきましょう」

コホンと咳をし、話を変える。

「時に長谷部社長。話は変わりますが、最近は日の光が届かないところで話し合いをするのがモダンらしいですな。

できれば、海軍もそのような事をしてみたいのですが・・・」

地下会議室での会合に呼ばれないことを暗に批判している。

ストレートな表現を使わないあたりがより厭味になっているが、最後の一文を伝えるための手法としてはあまり適切ではない。

「わかりました。次回の時には使いを出します。潮気を嗅いでみた
いのは私だけではありませんし」

厭味には厭味で・・・と、思いきや、さりげなく歓迎の意を表し
ている長谷部。

おまけに、それを好意的に思うのは自分だけではないとアピール
している。

言われたほうの山本は、長谷部の言い回しが気に入ったらしく、
非常に好意的な表情を浮かべる。

「ほう、それでは何かあった時のために、私の連絡先を伝えておき
ましょう」

「ああそれはありがとうございます。機会があったら是非とも活用
させていただきます」

「是非ともそうしてください」

「ええ、もちろんです」

互いに笑みを浮かべつつ、その言葉は妙に硬い。

「さあさあご兩人、話がまとまった所で今日は仕舞いにしてくれ。
ん？鏡花君はどこにいったかな？」

その言葉に一斉に長谷部たちも席につき、コップにビールを注ぎ
だす。

「さ、米田さん。人様の飲み会をお邪魔してはいけませんな」

「そうですね。それでは閣下、佐藤君、長谷部さん。お邪魔しました」

碎けた敬礼をすると、二人は直ぐに立ち去っていった。それを確認してから統幕議長がコップを置く。

「どうしてここがわかったんだ！佐藤君！どうなっている！？」

「も、申し訳ありません。中村ア！！」

すぐさま別室で潰れている中村を捕まえに行く佐藤。

だが、呼ばれた当人は佐藤がふすまを開ける前に飛び込んできた。そのまま残されているお膳に飛び込み、いくらするのか見当もつかないような高級料理たちを巻き上げる。

「き、きさまあ！何をしとるか！立て！！」

佐藤が怒声を浴びせても反応しない。

それを見て佐藤が眉をしかめる。

ここ数ヶ月で中村は佐藤のまさしく犬になっていた。

いくら泥酔しているとはいえ、彼の声に反応しないはずがない。

「いけない！閣下！准将！逃げて！！」

長谷部の悲鳴が轟くと同時に、すごい勢いで何かが室内に飛び込んできた。

それは、着地と同時に中村の頭を掴み、そのまま窓の外へと投げ捨てる。

「警備兵！直ぐに来い！！まただ！！」

ビールを持ったまま統幕議長が叫ぶ。

その言葉に、人払いをされていた私服の警備兵たちが警棒を持って部屋へ飛び込んでくる。

さらに、隣室からやたら怪我だらけの山口たちがお盆片手に飛び込んでくる。

相手は素早くお膳を投げつけ、それがまともに顎に入った兵士が昏倒する。

「取り押さえろ！！」

軍曹の号令で一斉に山口たちも含めた一同が飛び掛る。

しかし、それを見越していた相手は素早く天井の梁に飛びつき、両足で手ごろな兵士に蹴りを入れて昏倒させる。

「糞！前よりも強いぞ！」 「増援を要請しろ！！」

大騒ぎになる室内。

その騒がしさに、一人の男が目覚めた。

「五月蠅いなあ」

頭を掻きつつ立ち上がったのは、顔中に舞のキスマークをつけた速水である。

その声音と一緒に起きた善行の表情が強張る。
速水のその口調は、戦闘中のものだったのだ。

「いけません！誰か速水君を・・・」

善行が叫んでいる途中で、速水がその外見からは到底想像できない素早さを出して乱闘の中へ飛び込む。

坂田が吹っ飛ばされ、壁に激突してうめき声を上げる。

山口が頭からお膳に頭を突っ込み、倒れている兵士のわき腹にそのままめり込む。

名もない兵士が悲鳴を上げて隣室へ吹っ飛んでいく。

「うわっ！」

悲鳴が聞こえ、善行の隣に何者かが倒れこむ。

恐る恐る見ると、そこには気絶した速水が倒れていた。

「はっ、速水君！？そ、そんな馬鹿な・・・」

驚いて乱闘のほうを見ると、そこには凍りついた表情を浮かべた一同がいた。

そこへドヤドヤと武装した兵士たちがなだれ込んでくる。

「統幕議長閣下をお守りしろ！」 「周辺の安全を確保！」 「閣下！敵はどこに！？」

弾丸を装填しながら隊長が叫ぶ。

部下たちも次々に銃を装填しながら周囲に展開していく。

「ばっばか者！銃をしまえ！」

血相を変えた斉藤が叫ぶ。

ここに居合わせている人間は、どれも金をいくらばら撒こうと手に入らない重要な人間なのである。

万が一にでも死人が出たら、取り返しがつかない。

「へ？」

兵士たちが一瞬呆けたその隙について、駆けつけた部隊を一陣の風が駆け抜けた。

風が止んだ瞬間、兵士たちの銃はパラパラと部品を落としながら分解されていく。

「やめるんだ鏡花君！！」

長谷部が叫ぶ。

そう、騒ぎをここまで拡大し、今、すべての銃を解体するという離れ業をやったのは、鏡花だったのだ。

酒癖の悪さもここまでくれば立派なものだが、その相手をさせられている一同にとってはまさしく悪夢だ。

「ぐるるるるるる」

四つんばいになり、喉を鳴らしているその姿は、新世紀で人造人間な感じだ。

「鏡花君！今日の予定は！？」

唐突に長谷部は意味のわからない事を叫んだ。

「ぐるる？ぐるーるぐるるるる」

「いまだ！取り押さえろ！！」

鏡花が長谷部の言葉に答えたその一瞬の隙について、一斉に兵士

たちが飛びかかった・・・・・・・・

二日後　大日本重工業本社　社長室

「長谷部社長。おとこの夜、何があったんですか？」

長谷部のところに書類を持ってきた鏡花が尋ねる。

この二日間、常に聞き続けている質問だ。

「ちょっとした騒ぎがあっただけです。あまり気にしないように」
対する長谷部の表情は、この上ないほど蒼い。

「気になるじゃないですかー教えてくださいよ。山口さんたちは最近見ませんし。もしかして・・・」

「ああ、それはないから安心してください。それより頼んでおいた件は？」

鏡花が真相に気づきそうなことに気がついた長谷部が慌てて話をそらす。

なぜ真相を伝えないのかというと、悪鬼のごとく暴れまくる鏡花は、自分が酒乱であることを病的なまでに気にしているのだ。

その度合いは凄まじく、以前そのことを指摘された時には9mm機関拳銃を振り回して自殺騒動を巻き起こしたくらいである。

ちなみに、警官をやっていた前の彼氏と別れた彼女が男ばかりの自衛隊に入隊した真の理由は『屈強な自衛隊員なら自分を抑えられるだろう』である。

「あ、はい。こちらが今日侵入する予定のメンバーです」

写真つきの書類を出す。

一枚目は白人系の女性だった。

「何だこいつは？ロシア系？こないだの中国人といい、今度のロシア系といい、米田の奴、実は共産主義者か？」

事情を知らない長谷部が呟く。

「どうも『靈力』が絡んでいるようで。私はいまだに信じられないんですけど」

「しかし、米田の不可解なまでの政治力を考えるとやはり事実のようですね。信じがたいですが」

科学万能時代からやってきた技術者に靈力の存在を信じろというのは、やはり無理な話である。

彼らは統幕議長とのコネを使って華撃団の存在やその活躍を聞いてはいたが、まるで漫画やアニメのようなその活躍と内容に、公文書であるにもかかわらず、その内容を疑っている。

「まあそれはおいといて、警備状況は？」

「本日1130ごろ、第三歩兵連隊より二個中隊が増員され、当日まで警備を続けます。宿舎・糧食等の準備は完了しております。

また、第二山砲連隊が装備転換のために同じく当日まで、新編の第一戦車中隊は来週末まで試験場での訓練を行います」

鏡花がそこまで言ったところで、窓の外からエンジン音が轟いた。見ると、十数台のトラックが広場に停車し、次々と兵隊を吐き出しているのが見える。

どうやら、部隊の配備状況は良好らしい。

「そういえば、迫撃砲の特許に関してはどうなっているかな？」

「先ほど外務省から連絡が入りました。エドガー氏は特許の譲渡に応じたそうです。しかし予算のほうは予定の2倍になったようすが」

「それはよかった。予算のほうは何とかしておきましょう。しかし、これでようやくおおっぴらに迫撃砲が使えますね」

実は、現在大日本重工で製造されている81mm迫撃砲の特許は、フランスの会社がもっているのだ。

ややこしいことになるのだが、史実においての開発元がこの会社であり、本来ならば未来の長谷部たちには実際には特許料の支払い義務は生じないのだが、タイムスリップという異常事態で過去にきたことにより、困ったことに支払い義務が生じてしまったのだ。

まあ、無視するという方法もあるにはあるのだが、気持ちよく兵器を運用する為にはどうしても必要な処置なのである。

だが、少しも合法的ではない方法を用いることによって、その特許を強引に買い取ることに成功したのだ。

その方法は人権派でなくとも眉をしかめるようなものであり、18禁小説ではない本作では説明できない、とだけ記しておく。

「そうですね。ところでまた神埼重工の方がいらしておりますが？」

「またですか・・・あそこの人も飽きませんねえ。ご丁重にお断り

して追い返しておいてください」

うんざりした様子で長谷部が言う。

山本と話してからまだ二日だというのに、アポの申し込みや強引な押しかけの回数が既に二桁に達しているのだ。

「いえ、どうも今回は違うようで」

困ったように鏡花が答える。

「というと？」

「神崎すみれ社長自ら、すでに隣室にいらっしゃっています」

「なんだって!？」

社長室内に、長谷部の悲鳴が響いた。

1925年12月03日 大日本重工八王子本社 応接室

「失礼します」

長谷部が入室すると、先客は立ちあが……らずに、優雅に足を組みなおした。

それを見て長谷部は軽く眉をしかめる。

彼は伝統や慣習にはそれほど固執しない方だが、こと礼儀に関してだけは人一倍うるさかった。

「ご機嫌麗しゅう長谷部さん」

「どうも神埼さん。いつもお世話になっております」

一応社交辞令だけは返しておく。

実際には大日本重工は、末端レベルの子会社においてのみかすかに神崎重工と接点があるだけであり、まったくお世話になどない。

さりげなく「いつも」と連日のアポ攻勢への嫌味がこもっているあたり長谷部らしい。

「本日窺ったのは・・・」 「わが社の技術が欲しいんですね」

単刀直入で来たすみれに同じく直球で返す長谷部。

「え、ええ、そうですわ」

そこで姿勢を直す。

無駄に隙間が開けられている胸元から、豊かな乳房が見えそうになる。

「どうでしょう長谷部社長？ 神崎重工と大日本重工、二つの会社が結ばれれば・・・」

（日本一の財閥が出来る、ね）

蒸気関連技術大手の神崎重工と、未来の技術を持つ大日本重工、この二社が統合されれば、ゆくゆくはロックフェラーにも匹敵する巨大財閥が出来上がることは目に見えている。

何しろ、大日本重工には（公表されていないが）自社所有の油田

すらあるのだ。少なくとも日本一だけは簡単に達成できる。

「ねえ長谷部さん？話は変わるのですが、私、もうこのような年でしょ？両親からも早くいい相手を見つけれと言われて困っているの」

「それはまた、ずいぶんと露骨な政略結婚ですね」

対する長谷部は、そのあまりの露骨さに呆れる。

だが、すみれの表情から、その提案は彼女の本意によってではなく、別の何かを理由としていることを読み取る。

おそらくは業績悪化によるリストラが嫌だったから、あるいは、この不景気下で業績の落ち込んだ会社自体を護るためか。

いずれにせよ、社員たちにとってはありがたい話だ。

「私では不足ですか？」

長谷部に擦り寄るすみれ。

真上から見下ろす形になった長谷部の目に、服の隙間から見える桃色の頂が飛び込んでくる。

（あら、意外とウブなのね）

顔を真っ赤にして黙ってしまった長谷部を見て、すみれは心の中でクスリと笑う。

侮蔑ではなく、あくまで好意的な笑みである。

米田たちから悪の総大将のような紹介を受けているだけに、聞いた話と現実のギャップが面白くてしかたがないのだ。

「ととととにかく！！ちゃんと後日担当のものを送りますから！」

大慌てですみれを引き剥がし、上気ていた顔を元に戻す。
すぐさまインターホンで鏡花を呼び出す。

「御用でしょうか？」

あらかじめ待機していたと思えない速さで鏡花が飛び込んでくる。

「ああ、神崎さんはお帰りです。丁重にお送りするように」

「かしこまりました」

「というわけで」

素早くすみれのほうへ向きかえる。
既に彼女は立ち上がろうとしていた。

「また後日ということでは」

「ええ」

第十九話『昭和4年のはじまり』

第二十話

「年が、明けますね」

昭和4年の初日が明かりとなっている執務室内、その静けさを最初に破ったのは鏡花だった。

室内には長谷部の他に山口、大介、島、佐藤など主だったメンバーが揃っている。

「さようなら昭和3年、ようこそ昭和4年。みなさん、明けましておめでとうございます」

窓の外を向いたまま長谷部が言う。

外から光が入っているために、その表情は窓の反射を見ようとしても見ることはできない。

「昨年はまさしく波乱に満ちた一年でした。ですが、今年はさらにその度合いが高まります」

鏡花がプロジェクターを操作し、山口がカーテンを閉じる。

一同は窓の反対にあるスクリーンを見た。

「今年は主に海軍をメインでやっていこうと考えております」

「ちょっと待ってくれ」

長谷部の言葉に口を挟んだのは佐藤だ。

ある程度予測していたらしい統幕議長と井上空軍総長は平然としている。

当然ながら佐藤ほどの人間が、予測していなかったわけがない。だが、彼の直属の上司である小林少将や島たちまでもがそう思っているかどうかは分からない。

そのためにあえて長谷部に質問しようとしているのだ。

「はい准将閣下、なんででしょうか？」

当然、長谷部も佐藤の質問の意味は分かっている。

「どうしてそう決まった？君の考えを聞こう」

「はい、今年以降、海上輸送を伴う作戦は増大の一步を辿る予定です。そこで・・・」

「海軍艦艇の増強は必要不可欠、というわけか」

「はい、そのとおりでございます」

頭を下げる長谷部。

ちらりと小林や山口を見ると、案の定目を丸くして感心している。島はというと、長谷部と視線を合わせ、ニヤリとしている。

井上総長や統幕議長はというと・・・子供の成長を見守る親のよ
うな表情を浮かべている。

おそらくは士官学校時代の自分たちを思い出しているのだろうか。彼らも昔、上官たちのさりげない気の使い方を見て同じように目を丸くしたのだろう。

ちなみに、井上の肩書きが安定していなかったのは、空軍が急に設立されたことによつて官僚の仕事が間に合わず、ひとまず頂点だけを暫定的に決定したからだ。

昨年中に決死の覚悟で官僚たちが頑張った結果、年明け初日から彼は『井上空軍総長』を名乗ることができるようになった。

「まあ問題あるまい。海軍さんの船に乗ったまま死ぬのは君も嫌だろう？」

「はい」

というわけで、もともと反対者などいなかったのだが丸く収まった。

この場で決まるということは、事実上の決定である。というわけで、三日後から新年早々あちこちへと命令や脅迫が飛ぶことになる。

そんな中、佐藤准将はいつになく精力的に行動していた。

「こいつ、気にいらないな」

書類を机に投げ出す。

そこには米田派でも屈指の工作員の経歴が書かれていた。

大日本重工内でも有能な部類に入る作業員として働きつつ、もう一人の雇い主へせっせと情報を送るのが彼の仕事だ。

当然、佐藤たちはそのことを既に知っているが、あえて泳がせて

『いた』

「最近設備が破損しかけているらしいな」

「そうですね、点検を命じましょう。事故があつては困ります」

貧相な顔に何も考えていないような表情を浮かべつつ、中村が答える。

しかし、本当に何も考えていないわけでは当然なかった。

「そうしろ」

数日後、大日本重工八王子工場内で事故が発生した。

死者は一名。落下したパイプによって胴体を潰され、即死した。

それは、佐藤の持っていた書類に書かれていた男だった。

数日後、事件の責任を追及されていた二人の男が、自室で首を吊り、自殺しているところが発見される。

二人は、共に米田派の息がかかった男だった。

この露骨過ぎる脅迫が効き、大日本重工全体で十五人が依願退職した。

同時刻 帝都内某所

「くっ」

大神一郎海軍大尉は、生まれて初めて絶望しようとしていた。

今まで、数々の戦いを仲間たちと駆け抜けてきた。

どんな困難も、仲間たちと力を合わせれば切り抜けることができ

た。

だが、その仲間たちはもう動けない。

「さくら君・・・」

既に皮膚が変色し始めているかつての仲間の表情は、恐怖と苦痛に歪んでいた。

「花火君・・・」

いつも沈着冷静、大和撫子を絵に描いたような彼女だが、今は喉を掻き爪った体勢のまま仰向けに倒れている。

そしてもう一人、コクリコ。

笑顔がトレードマークの彼女は、まだ動くことができる。

しかし、恐怖に引きつった表情を浮かべて部屋の隅で震えている。せめて、せめて彼女だけでも逃がしたい。

犠牲は、少ないほうがいい。

「コクリコ、行くだ」

「で、でもイチロー、無理だよ一人でこんなに」

「いいから行くだ！そしてみんなに伝えてくれ、このことを、ここに近づかないように」

「い、イチロー」

「行くだコクリコ、君は強いコだろ？」

「う、うん、イチロー、忘れないよ！！」

扉が閉まる。

晴れやかな表情でそれを見送る大神。

これで、これでよかったんだ。

そう思わないとやっていられないからである。

そして、彼は口を開いた。

「覚悟はできてる・・・往くぞ!!」

数時間後、自宅に帰り、その惨状を目撃して半狂乱になったグリシーヌからの連絡を受けた米田が、大量の部下たちを連れて駆けつけた。

そこには悲しみにくれた表情のグリシーヌが倒れており、室内には他三名がそれぞれ倒れていた。

そして、ちゃぶ台の上には原因物質と思われる謎の物体が蠢いていた。

「閣下お下がりください！撃え!!」

隊長の号令で兵士たちが一斉に小銃を発砲する。

物体は無数の鉛弾を受けしばらくのた打ち回っていたが、次第におとなしくなっていく、最後は嫌な臭いを出しながら溶けていった。

この事件の被害者は合計4名。全員が1月24日まで入院した。

後の調査により、物体はグリシーヌが12月1日から密かに製造に取り掛かっていた『おせち』だと判明。

日本食など作ったこともないグリシーヌが、意地と怪しげな本と大神への愛情で作り上げた悲劇だった。

さて、そんなドタバタも収まった1月31日、長谷部たちが動いた。

非公式に海軍高官たちが招集され、あちこちに散らばっていた米田派の職員たちが一部消息を絶った。

非公式会合の翌日、つまり2月1日。

国内数箇所 に点在する大日本重工関連施設が、不審火が発生したという理由で憲兵隊の厳重なる管理下に置かれた。

昭和4年2月2日 帝國劇場支配人室

「未だに連絡はなしか？」

大量の書類などを運んできた加山に米田が尋ねる。

遺族への補償金や後任候補の人事書類、新たな潜伏先の候補など、指揮官である彼が目を通さねばならない物が多い。

「はい、数名の潜伏先からは微量の血痕が発見されました。残りは本人から家財道具一式に至るまで全て綺麗さっぱり消えています」

「佐藤が動いたと考えるのが自然だな。あの野郎、やってくれるじゃないか」

「はっ、ですがあくまで我々とは関係のない人間だと見せなければなりません」

「ああ、忌々しいことにな」

消された人間たちはいずれも今回厳戒態勢に入った施設の周辺に

配置されていた者であり、疎ましく思った佐藤が消去を命じた事はわかる。

だが、もしそれを公式非公式を問わず咎めようとするれば、それは参謀本部の命令を米田が無視したことになる、どれほどの祟りが帝國華撃団を襲うことになるかわからない。

悔しいが、自重するほかないのが米田たちの現状なのである。

しかし、このような絶望的状况にもかかわらず、米田派の結束は揺るがなかった。

彼らは日本をより良い国とするため、大日本重工に操られた統幕議長や佐藤准将の好き放題を可能な限り止める手綱とならなければならぬからだ。

そこには収賄などという下賤な方法では揺るぎもしない、確かな愛国心だけがあった。

また、大日本重工一社による支配体制を憂うその他の企業たちが毎月資金を提供しているため、彼らの信念は資金面からも支えられていた。

「施設の方はわからねえのか？」

「はい、申し訳ありません。連中、夜目が利く奴を夜警にしているらしく、深夜でも簡単に見つかってしまうのです」

いくら凄腕の工作員である加山と言えど、赤外線暗視装置を装備した兵士たちにしてみれば、夜闇の中でボケーッと突っ立っているのと変わらない。

だが、そういった装置があるという知識が無いのだから仕方が無い。

「そう、か・・・」

片手で目を揉む米田。

立て続けに起こる問題の数々のおかげで、最近やたらと歳を感じるようになってきているのだ。

「手を考えねえといかんな」

「はい。ですが・・・」

何か言い出そうとする加山を手で制する米田。

「わかってる。まだ動かん。ひとまずは人の補充を急いでくれ」

「はっ、それでは失礼します」

米田の心中を察した加山は、話を早めに切り上げると退席していった。

残された米田は、窓際へ歩いて行くと、一面に広がる帝都の町並みを見た。

親と一緒に笑顔で歩く子供、恋人と幸せそうに歩く青年、年長いた祖母を気遣いながら歩く女性。

そこには当たり前前の日常が広がっていた。

「護らねえとな」

この日常を護ること。

それこそが皇軍の任務、陛下の御心。

私利私欲に走り、同胞を殺めること、怪しげな陰謀を弄ぶこと、権力闘争に明け暮れること、それが任務なわけがない。

そんなことは皇軍がやっているいいことではない。

佐藤たちのやっていることは、許されることではない。

昭和4年2月20日 大日本重工業八王子本社 第31倉庫 仮設
パーティー会場

「今日、技術者諸君に来てもらったのは他でもない。最近わが社内にはびこっている無意味な優越感、楽観主義に対して一言言っておきたいと思ったからです」

プロジェクターの光を反射したメガネの奥の表情は見えない。

この日、大日本重工のとある倉庫では、さまざまな組織から研究者を集めての懇親会が催されていた。

広い会議室内には、大日本重工の技術者・研究者のほかに、陸海空軍各工廠から呼ばれた人間も混ざっている。

そう、とうとう海軍までもが、組織間の不仲を乗り越えて技術革新の恩恵に授かる時が来たのだ。

「たとえば、陸軍将兵の皆さんがたまに引き合いに出すアメリカ合衆国。

最新の調査によると、あの国と帝國の国力比は概算だけでも10..1、もちろん我が帝國が1です。

そんな国との戦争を遂行するに当たって、我が国が必要としている兵器とはどんなものであるか・・・君はどう思いますか？」

海軍先進技術研究所から来ている若い技術士官に尋ねる長谷部。尋ねられたほうはいきなり話を振られて一瞬うろたえたが、すぐに立ち上がると答えた。

「はっ、敵よりも少なくとも10倍は強力な兵器であります」

「そう、君は・・・切目技術少尉というのか。うん、そうだね」

頷きながら着席を促す長谷部。

再びスクリーンの横へ移動すると、一同の方向へ向き直る。

「切目君の言うとおり、工業力から考えて数を揃えることが困難な我々は、単純に考えても大真面目に考えても最低敵の10倍強力な兵器が必要だ。

さて、それを前提条件として、我々は他に何を考えるべきか？意見がある人」

ジェスチャーで挙手を促す長谷部。

長谷部の予想通り、技術者たちは顔を見合わせるばかりで挙手しようとしなない。

「では先ほどの切目君。君はどう考えますか？」

再び先ほどの士官が立ち上がる。

必死に考える表情を浮かべ、そして答える。

「はっ、えー・・・安い兵器、でありますか？」

「安い兵器。確かに必要ですね。せっかく強力な戦車を作っても、一年に10台しか作れないんじゃない意味がない」

90式戦車のことを思い出しながら長谷部。

最新鋭かつ世界的に見て上位ランクの戦車ではあるが、値段が高すぎるために年間調達数はわずか、74式がそこまで非力ではないとは言っても、北方への優先配備のために定数をいつまでたっても

満たせないあの戦車は、長谷部にとっては恥だった。

「他は？」

長谷部の言葉に会議室内はざわめく。

これかな？と思った意見が出尽くしていたからだ。

「……生産性の向上、高性能多機能化、安価、どれも必要不可欠な要素ですね。ところで皆さん、稼働率についてはなんとも思わないんですか？」

長谷部の言葉に陸空軍の技官がはっとした顔をする。

いくら高性能な戦闘機を揃えていても、故障していて飛べないのであれば、それはただの地上標的に過ぎない。

工場から車で飛ばせば数時間というような試験場ならばそれでもいいかもしれないが、本土を離れたところでそうなったからといって、ハイお待ち！と部品の出前にこれるわけではない。設計段階において故障のしづらいようにする義務がある。

それだけではない、故障のしづらい設計で、精度の高い部品があったとしても、構造が複雑でベテランでないとなかなか修理ができないのでは整備に時間がかかってしまい、やはりそれは稼働率の低下につながる。

機構の簡略化も至上命題と思って問題はない。

要するに、安く・強力で・丈夫で・長持ちし・整備しやすい物を作らなければならないのだ。

当然で、必要不可欠なこと。

しかしそれは、並大抵のことではできない。

「銃後の我々を命がけで守るのが兵隊の皆さんの仕事です。

我々の仕事はその前線でがんばっている兵隊の皆さんを一人でも

多く家庭に生きて帰れるようにすることです。

皆さん、今回のことを教訓に、よりいっそうのご協力をお願いいたします。ご静聴ありがとうございます」

頭を下げ、壇上から下がる長谷部。

たちまち会議室は割れんばかりの拍手で満たされた。

退出した長谷部は、隣室へと入っていった。

そこには監視モニターが数台あり、立食式の雑談会が催されている倉庫が映されている。

陸空軍と大日本重工の技術者、そこへ三菱など財閥系および軍需産業の技術者たちが合流し、部屋の半分以上を占領、身振りも交えて活発な議論をしていた。

海軍は・・・部屋の端で固まり、なにやらヒソヒソと密談をしている。

あまりに予測どおりの動きに落胆しながら長谷部が尋ねた。

「どうです？良さそうな人はいいますか？」

モニターを見ていた鏡花に尋ねる。

「はい、三番モニターをご覧ください。

山本閣下から紹介された例の士官、先ほどから陸空軍のほうをちらちら見えています。あっ動きました」

そこは、陸軍と空軍の技術将校が同席している海軍にとっては敵地のような場所だった。

と、そこへ海軍技術少尉の服を着た男が現れる。

それまで雑談をしていた将校たちが、興味深そうな視線を彼へと向ける。

海軍少尉は敬礼し、何事か話しかける。

動きがあった。

直ぐに一人の若い陸軍技術少尉が立ち上がり、その海軍技術少尉に席を譲る。

少し離れた席にいた空軍技官が駆け寄り、何事か議論を持ちかける。

自分では分からなかったらしい、海軍少尉は直ぐに部下らしい人間を海軍の固まりから呼ぶ。

それに答え、数名の海軍技官がやってくる。

再び議論が交わされ、今度は陸空軍の高級将校と、海軍の技術者たちがそこへと駆けつける。

なにやら議論がなされ、再び海軍の集団から数名がそこへと合流する。

今度は陸軍の士官に声がかかり、それに答えるかのように海軍からも集団が押し寄せる。

気がつけば、陸海空軍の隙間は埋まっていた。

「さすがは山本さんの紹介した人だなあ」

長谷部は数日前に会議を思い出していた。

それは、海軍が参加した初めての会議だった。

昭和4年1月31日 大日本重工業八王子本社地下会議室

「それでは会議を始めます。が、その前に新たに我らの会議に加わった海軍さんの方から、山本次官に一言お願いいたしましょう」

手で山本に発言を促す。

それに頷き、山本が立ち上がる。

「海軍軍人、山本五十六であります。新参者ゆえ至らない点もあると思いますが、相手をしてやってください」

そう言うのと陸軍式の敬礼をする。

その口調と格好に、陸軍の将校たちも表情を緩める。

山本のその態度は、自分に敵意が無いこと、この会議の重要性を認識していること、陸軍とは仲良くやっていきたい（海軍と空軍は、陸軍とのそれほど仲が悪いわけではない）ことを表しているからだ。

「さて、それではご挨拶も終わったところで、早速最初の議題に入りたいと思います。山本次官、続けてお願いします」

「はい、お手元の資料にもありますよう、陸海空軍それぞれの技術力は大幅なばらつきを見せております。

当然ながら我が海軍の航空関連技術が最も低く、継いでこれも我が海軍の電探、ああ、ここでは電策ですな、とにかくそれに関する技術が立ち遅れている。

そして、それらを支えるさまざまな部品の工作精度も、また同様に低い」

「ぶっちゃけた話が、我々が今まで極度に情報公開を拒んだために、海軍さんの技術が我々のそれとはずれてしまっているということですね。

まあ、それはこれから徐々に埋めていくつもりですのでご安心を。時間もまだありますし」

やや碎けた口調で佐藤が言う。

この場では、階級所属をそこまで考慮しなくても良いからだ。

「時間があるというのは？」

・・・まあいい、それですな、陸空だけではなく、民間の技術者も含めて一度懇親会などやってもらいたいのです。

その席で、できれば長谷部さんにいろいろ話してやってもらいたくもあるんですよ」

「といたしますと？」

「ウチの技術者で切目という若い技術少尉がいますね。士官学校は出ていないんですが、目端が利くので持ち上げてやった奴なのです。」

それですな、そいつから聞いたんですが、最近電探の技術が極端に向上した影響からか、米英恐るるに足らず！いざとなれば鎧袖一触粉碎してやる！！という考え方が広まっておりましてね」

「危険思想ですぞそれは」

やや青くなりながら長谷部。

自軍の能力を過大評価し、敵を過小評価するのは敗北へしか繋がっていない危険思想だ。

仮に始めから勝つことなど不可能だったとしても、それは敗北の要因であると言える。

それがもはやこの会議で問題として取り上げられるほどになっていたとは。

「いわれてみると、実は陸軍でも最近そういった話がでているな」

「なんですって!？」

佐藤が現状を告げる。

陸軍兵器開発部門の現状として第一に言えるのが、高性能な兵器ばかりが現れることにより、そこに携わる者たちの間で楽観主義が根強いものになってきているということである。

確かに、昭和40年50年代クラスの兵器が次々と開発、配備されているのだから、楽観するなというほうが無理かもしれない。

しかし、それは大日本重工が製造を一手に引き受けているものである。

喪失車両を補充することや、他の兵器の製造も行わなければならないことを考えれば、おのずと一社できることには限界が見えてくる。

長谷部たちの介入があったとはいえ、相変わらず日本軍は補給のことを忘れている。

そこで見えてくる次の問題。

他の軍需産業がただの下請けになりそうな自分たちの実情に、意欲を失っているというものがある。

例えば、以前は主力兵器の製造を行い、我が世の春を謳歌していた三菱。

そんな彼らは、今では一部の補助部品を製造する程度。それもレンタルした大日本重工の機械で。

以前の製造ラインは命令により保存されてはいるが、保守点検以外は何も行われていない。

こんな現状で、さらに大不況とも言うべき現状で会社の経営は悪化する一方。

意欲を持てるはずも無い。

だが、長谷部は現状を放置しつつけるほど愚かではない。

時計を調べる。

今頃は、大日本重工から『長谷部社長の機嫌を損ねた』技術者たちが三菱を始めとした数社へ『研究資料を持って寝返っている』はずだ。

これがカンフル剤になり、日本の重工業は急速な発展を・・・遂げて欲しいというのが長谷部の願い。

もっとも、その結果が分かるのにはしばらく時間がかかるが。

「わかりました。それではできるだけ早く懇親会を行いましょう。たまには若い衆に説教など垂れてみるのもそれなりに楽しめるでしょうし」

そして、時間は今に戻る。

山本が目をつけた切目という人物。

海軍技術部門とのパイプとして使えるかもしれない。

笑顔で山本と会話しつつ、長谷部はさまざまな陰謀を張り巡らせつつあった。

会議はその後も順調に続き、あれこれと米田が聞いたら卒倒しそうな陰謀や計画が決定された。

海軍高官たちはその全てに口は挟むものの、感情的に反論するといったことはなかった。

昭和4年2月27日 深夜 満州国

夜闇が支配する草原に、散発的な銃火が現れる。

それに答える号令、砲声、爆発。

何かが千切れ、吹き飛び、絶命する。

「撃え！」

砲術士官の号令と共に、一斉射撃を行っていた兵士たちが城壁の内側へ頭を引っ込める。

再び爆発。

何者かの叫びが上がり、それまで響いていた銃声が止む。

「敵軍撤退していきます!!」

狙撃兵から報告が入る。

すぐさま号令が飛び、砲撃その他が止む。

「大したものですな」

後ろ手にそれを眺める佐藤。

傍らには中村が例によってボコボコになっている。

「ええ、大変気持ちの良い風景ですね」

それに答えるのは長谷部。

傍らには完全武装の鏡花が周囲を油断無く窺っている。

彼らが今いる場所は、大日本重工業石油製品研究所満州支局。

周囲を空軍分遣隊と陸軍一個中隊、そして工兵隊が頑張って建造したコンクリート製の城壁に囲まれた大規模な油田だ。

敷地内に併設されている化学工場では、目下の課題である硫黄分を多く含むこの原油を効果的に使うための研究が進められている。

とはいっても、現代のように環境に考慮する必要が無いため、課題としてはそれほど不可能ではない。

また、プラスチックの大量生産やオクタン価の高いガソリンを作るための技術も日夜研究されており、すでにかなりの数の特許を抑えている。

「満州第四製鉄所より入電、敵軍の破壊活動により損害が生じたとの事です。現在復旧作業に入っています」

「急がせろ」

「はっ！」

「報告します、大東亜工業所の横田なる人物が保護を求めています」

「なんだそいつは？」

途中経過を記した書類を読んでいた佐藤が視線を上げる。

現地入りしている邦人企業の一覧で見た記憶が無いからだ。

「はっ、先日現地入りした企業らしく、こちらには資料がありませんので現在東京憲兵隊に資料を請求中であります」

「分かった。入れてやれ。一個分隊でがっちり守ってやれよ」

「了解しました！」

ニヤリとしてから答える兵士。

要するに、片時も目を離すなということだ。

「本当ですか！恐れ入ります。まったく、地質調査で来てこんな目にあうとは我が身の不運を呪ったものですが、地獄に仏とはまさにこのことです！」

絆創膏だらけの男が大げさな表現で若い兵士に礼を言っている。
男の名前は横田健三。またの名を加山雄一。米田子飼いの部下だ。

「は！それではこちらへ、お部屋をご用意してあります」

「はいはい、ありがとうございます」

ヘコヘコしながら兵士の後をついていく加山もとい横田。

だが、部屋を出た途端に気がついた。

入り口の両脇に立っていた兵士が二人とも自分の後ろをついてくる。

さらに角を曲がったところで待っていた二人の兵士が前に行く一人に合流し、前三人、後ろ二人の状態で加山を連れて行く。

兵士たちは周囲よりも横田自身を明らかに警戒しており、一定の間隔をあけている。

（これは、もしかしたらばれてるかな？）

内心冷や汗をかきながら加山。

本土から遠く離れた辺境の地で、軽く一個中隊はいる相手に囲まれ、さらにその先には馬賊や共産軍のうろつく原野が広がっている。

さすがの彼も、今回ばかりは無理かもしれない。

しかし、運命は皮肉な形で彼の味方をする。

「同志大尉、日本帝國主義者どもの砦が見えてきました」

闇の中、何者かが報告する。

「攻撃しますか？」

「君は何を言っているのだ？これだけの人数で、攻撃しないわけがあるか」

背後を振り返る。

小銃だけを持たされた大量の兵士たちが、不自然に綺麗な目をして命令を待っている。

「突撃だ」

「はっ！総員前へ！突撃する！！！」

「原油の採掘は順調です。硫黄分の抽出に関する研究も順調のようですね」

報告書をめくりながら長谷部。

そう、彼らは研究の進み具合を実際に肌で確認するため、それだけのために、はるばる最前線のここまでやってきたのだ。

実際には、これから満州防衛のために必要な兵力を佐藤が出し渋らないように、前線視察という形で彼に研究の重要さを知ってもらうためだ。

「硫黄っていうと、屁みたいな臭いの奴か？」

「はい、こいつが多いために、ここで取れる石油を活用することが困難なのです」

「ほうほう、それで、研究は進んでるんだよね？」

「ええ、この研究所で得られる研究データと特許は、既に帝國にとって必要不可欠なものとなっております。今後の技術発展に期待を寄せていただけると光栄であります」

「うむ、貴様と部下どもには期待している」

「はっ！ありがとうございます」 「社長！閣下！敵襲です！！！」

扉を開けて鏡花が叫ぶと同時に、銃声が響き渡った。

その時、夜間狙撃手として警戒に当たっていた兵士の一人は、抑えようの無い震えに襲われていた。

暗闇が怖いわけではない。新兵というわけでもない。

夜間暗視装置『護符三型』の視界一杯に広がる原野には、これまでの視界一杯に無数の敵兵たちが群れていたからだ。

それも、経験したことが無いほどの数ののが、である。

震える手で無線機を操作し、本部へと連絡を取る。

「月、月、月光3、月光3、アカ多数」

<月光3、光あれ光あれ>

慌てて暗視装置を外す。

階下から慌しく出動する兵士たちの物音と、怒鳴り散らす下士官の声が聞こえてくる。

そんな中、照明弾が夜空に舞った。

城塞を取り巻く周辺が真昼のように明るくなる。

「敵襲！撃え！！」

号令と同時に、城壁の一辺に集中していた兵士たちが一斉に射撃を開始する。

小銃が、機関銃が、迫撃砲が、軽砲が火を噴く。

「多連装撃え！」

ソ連では後にカチューシャと呼ばれる多連装ロケット砲がおおよその方向を向く。

そして、一斉にロケットに点火した。

「突撃突撃突撃突撃！！何をしとるか！この機関銃は臆病な奴を撃ち殺すためだけに存在しているんだぞ！さあ走れ！！！」

やたらと装備の良い一個小隊に囲まれた大尉が叫ぶ。

その足元には先ほどから絶え間なく銃弾を味方の足元に降らせている機関銃がある。

この時、後に共産党軍が誇らしげに語ることとなる『人民の海』戦術、その第一回目が、日本軍との共演で演じられていた。

敵味方双方から放たれる銃火、時折起こる爆発。悲鳴。

地上で繰り広げられる死と破壊の宴に、空から新たな参加者が降ってきた。

たちまち爆発が相次ぎ、集団中央部に血と炎で赤く彩られた穴が開いた。

さらに爆発、爆発、爆発。

兵士たちが宙を舞い、あるいは半身を木っ端微塵に碎かれ、ある

いは血煙と化して、この世から消えていく。

もはや督戦隊員たちが良心を痛める必要は無かった。

今晚の襲撃に参加した将兵219人の内、督戦隊である彼ら21人のほかは、ほぼ全員が死ぬか動けなくなるか逃げるかしたからだ。そして、慈悲深い神は彼らが数十年後の新聞で自分の罪を競って贖罪しないで済むようにしてくれた。

遠くから銃声がいくつか響き、何人かの兵士たちの頭部が消滅する。

「狙撃！？こんな距離で、夜中に！？」

「大尉殿危険です！ここはひとまず下がらないと！案内人はどうした！？」

「やられています！だめです！ウワァァァ！！！」

恐慌状態に陥った兵士たちが我先にと逃げ出す。だが、次々と頭部や腹部を撃ち抜かれていく。

「月光2より月へ。清掃完了」

<月から月光たちへ、光あれ光あれ>

再び照明弾が打ち上げられる。

照らし出された原野に、動くものはやいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3352y/>

帝國自衛隊

2011年11月10日02時14分発行